259-624
1200501348425
259
624

廣島文理科大學教授 長田新著

獨逸だより 再遊記

東京 目黑書店發兌

昭和六年一月 圖書

259-624
~~195-297~~

序

長短二十二篇からなるこの小書は私が二度目の外遊を主として獨逸で暮らした一年有半の間に、見たり聞いたり讀んだりしたことの印象を綴つた雜記である。教育に、哲學に、宗教に、藝術に、社會に、そのかゝはる方面は種々雜多であるが、今校正しながら概觀して見ると、全體の基調をなすものは結局私の專門としてゐる教育のやうである。

獨逸の土を一度しつかり踏んで見たいものだ。獨逸の空氣を一度深く吸つて見たいものだ。かういふ希望に燃えて一千九百二十一年渡歐の途についた私は、戰後の世界の教育を廣く見るといふ特殊の事情の故に、その希望を十分果たすよしもなく、空しく獨逸を去つてしまつた。其後七年、機會は思ひがけなくやつて來た。私は私に與へられた大事な時のすべてを獨逸で過ごすことにしたのである。私は少くとも

決して弛緩してはゐないところの探究心と情熱とを以て、假令結果において、それの全體の基調をなすものが教育であつたとは言へ、獨逸文化の諸相を、言はば貪るやうに眺めてみた。たゞそれにも拘はらず、小さな私の眺めたものは、遂に小さな私を出なかつたやうである。斯の樣なたより少なき印象を纒めて一書に編むに至つたわけは何か。小さな自己の心に映つたものも、それが眞實に映つたものなら、少なくとも私自身に取つて捨て難きものでなくてはならない。たゞ私自身に取つて捨て難きものを綴るといふ主觀的の若しくは個人的の動機の外に、私は他にもう一つの動機を有つ。

私は一國文化の自花受精乃至は同族結婚を最も怖れる者の一人である。國民文化の自覺はさることながら、「窓なき單子」の如きは取らない。人は斷えず自己を見なくてはならないが、併し、眞に自己を見ることの出來る目は如何なる目だらうか。自己を見る目の構造如何に依ては、人は遂に自己を見ることが出來ない。自己を見るとは他人において自己を見ることである。日本を知ると言つても、それは世界において日本を知ること以外の何物でもない。人をして屢々「窓なき單子」を想起させるやうな狹隘な愛國主義者の現はれようとする今日、文化の自花受精と同族結婚とに依て、國民の文化的生命衝動を去勢しようとするやうな小型の國粹論者の現はれようとする今日、私はこの小書を新日本の教育者に贈るであらう。

昭和六年二月十一日紀元節

東京本郷の客舍にて

長田　新

目次

首途に立ちて……一
フレーベル遺跡巡り……一五
グローブ筆「スタンツのペスタロッチー」を訪ねて……五二
ライプチヒだより……六二
文化と地方都市……七三
其の日其の日のこと……八二
鐘の音と説教……九〇
獨逸精神の片影……九三
神々しい粗野……一〇一
學藝の「流行(モーデ)」……一〇五
古書の香……一一二

現象學と教育學……一一八
辨證法と教育學……一三九
客觀精神の復興……一五九
獨逸の新教育……一六五
學校教育を觀て……一八二
新教育に就て……一八八
勞作教育の本質……一九三
リット教授のこと……一九八
マックス、シェーラーの訃……二〇八
ライン教授逝く……二一五
フォルケルト教授の思出……二二六

獨逸だより　再遊記

長田新著

首途に立ちて

一

一月末に話があつて、出來ることなら二月中旬の船で立て、船室は取つてある、といふのだから、今度の外遊命令は餘りに突然であり、私は足元から鳥の飛び起つ思をした。けれども、まさか軍人に降つた動員令でもあるまいし、それに暫らく留守になるとすれば、片附けておかねばならない多少の用事もある。許を得て、私は四月初に立つことにした。

さて愈〻行くといふことになると、準備が要る。準備と言つても身につけるものゝ準備ではない。少し古びて粗末ではあるが、大小二個の鞄は今度の旅にも間に合ふ。身に附けるものなぞは成るべく彼方で求めるがいゝ。何も西洋の服裝を強ひて日本で用意してゆく必要はない。西伯利を行くなら、モスコーあたりで日本から穿いて行つたよごれた靴下を脱ぎ捨てゝ、新に西洋のものを穿き代へればいゝ。凡てその式だ。西洋へ行くなら、何事も西洋を生活するがいゝ。日本を背負つて、蝸牛のやうに西洋を歩るき廻るほど愚かなこともあるまいではないか。祖國が懐かし

いからと言つて、日本人同志が同じ下宿に集をくつて、日本飯を焚かせ、日本語を話すやうな眞似だけはしたくない。凡て西洋を生活しようといふ私には所謂旅の準備といふものはない。私が準備と言ふのは西洋を見る心の準備である。

今度西洋へ行つたら、何を見て來ようか、何を聞いて來ようか。私は自分でも考へ、人にも尋ねた。私は先づ今度の留學國を獨逸に限らなくてはならなかつた。併しそれは私がこれから考へて見ようとしてゐることの極く特殊な性質から來たことで、獨逸以外の國々に研究すべきこと、學ぶべきことが無いなどいふのでは決してない。神の太陽は善きにも惡しきにもその光を投げ、神の雨は正しきにも邪まにも雨降らすといふ。佛蘭西には佛蘭西の文化があり、英吉利には英吉利の文化があり、亞米利加には亞米利加の文化が美しく花咲いてゐる。諸々の文化はいづれ劣らず、柳は綠に花は紅の色とりどりの特色を表はして、互に敎へ諭す尊い暗示に富んでゐる。亞米利加は唯物論の國であるとか、實用主義の鄕土であるとか言つて、口善惡なく嘲けるものもないではないが、その亞米利加にも學ぶべきところが決して少くはないであらう。石に苔蒸す趣はもとより新大陸に要むべきではないが、何等の因襲に捕はれず、善きこと、正しきことを、自在に行ふ「大膽と創意」とは倫敦大學のナン敎授が亞米利加の敎育を評した言葉のうちにもあるやうに、

確かに此の國の長所である。デューイ敎授の「人間性と行爲」を大學の演習に使つた京都の小西先生の話に、若しあのデューイが獨逸に生れたら、も少し學界に重きをなしたであらう、「人間性と行爲」などの中には現象學的の考方も相當這入つてゐると。デューイ研究で著名な永野芳夫君などに言はせると、プラグマティズムを日本で實用主義と譯したのがそもく不用意で、「プラグマ」とは「事實」の義であり、プラグマティズムとは「事實の哲學」といふ意味だといふ。少くとも廣く眞理を求めることをその職とするものは、曾てフランシス、ベーコンの試みたやうに、認識上のあらゆる偶像を破壞し、何れの國の文化にも先づその胸を開いて、虛心になるが肝心である。

さうだ。私は先づ自らの胸を開き、虛心になつて西洋に行かなくてはならない。私は西洋の文化に對して、十分謙遜な生徒でありたい。併し斯く言ふ私を戒しめて、「お前は一體どうしたのか。維新以來歐化に歐化を重ねた日本が、この上西洋に學び、西洋を眞似する必要があるか。」と言ふものもあらう。私は明治から大正へ、大正から昭和へと、早や半世紀餘りを經て來た現代の日本の識者の胸に、そゞろに懷古の情が湧き起り、模倣の日本を創造の日本に導かうとする心の目覺めて來たのを嬉しく思ふ。けれども私は模倣と創造とを對立する二個の出來事と解し、且つその一つを選んで他を捨てるほど、しかく單純な二元論を奉ずるものではない。模倣に徹するところ

に眞の創造はある。所與の眞實の理解から恐らく必然的に獨創の天地は展けるであらう。佛蘭西の社會學者タルドは曾て「模倣の法則」といふ書の中で、「社會は凡て模倣である。無から有の出るわけはない。たゞ模倣にも單數と複數との別はある。愚かなものは同時にたゞ一個を模倣し、敏きものは同時に二つ三つ即ち多くを模倣する。世に發明とか創意とかいふは複數模倣の謂であり、天才と言つても、それはこの複數模倣の主人公に外ならない。」と說いてゐる。實際、模倣は多きを憂へない、寧ろその力の薄弱なるを恨みとする。しかし私はいま模倣と創造とに關する古今の學說を一々あげて、これが概念的探究を試みるには餘りに多忙な外遊の首途にある。私はたゞ「模倣に徹するところ必ず創造あり。」といふ平素の所信をこゝに一言すればそれでいゝ。

二

日本人は模倣好きであると誰れでも言ふ。それは日本人に眞理を求めて息むことを知らない好奇心の不斷に淸新なものゝある證據ではなからうか。その好奇心こそ私達を眞の獨創に導く水先案内である。日本人は古來異文化の模倣をこれ事として來たと誰でも言ふ。果してさうであつたらうか。いゝえ。好奇心に富み模倣を好む日本人は、地理的に、歷史的に、眞の獨創に達するまで模倣を恣にすることが出來なかつたのである。それを疑ふものは世界の地圖と歷史とを開いて見るがいゝ。東方の孤島に遠く離れて國を建てた大和民族は、周航も思ふに任かせぬ幾千年を孤獨に淋しく暮らす外はなかつた。支那や印度の思想は時に訪れ來つて、日本文化の根に培ふことはあつたが、それとて歐羅巴の諸國が斷えず有無相通じて、文化の交流作用を自在に且又力强く營んだのに比すれば言ふにも足りない。それでも支那・印度の文化は一定の年所の中に我が藥籠中に收められて、獨創的な日本固有の文化を培ふことが出來た。西洋文化に至つては今日僅かにその外殼を瞥見したと言ふまでゝあつて、これを眞に自己の藥籠中に收めるにはなほ多くの歲月と努力とを要すると私は思ふ。

開國維新以來私達の目に映じた西洋は西洋の正體ではなくて、實はその朧ろな影にも過ぎない。西洋を知るは支那や印度を知るやうに、しかく容易くゆくものではない。ナイフやフォークの持ち方さへも覺束ない洋行者が、一年や一年半廣い西洋を滑走しても、西洋の正體を摑むは難いであらう。紐育のウルヲースの建物の高さ、倫敦のピカデリーサーカスの雜沓、伯林のウンターデンリンデンや巴里の大通の惡魔的の夜景。それほどのことは知るにさしたる困難もないであらう。併し私達の感覺に直接映つて來ない、併しそれだけ西洋文化の本質でなくてはならないものを知るは決して容易のことでない。獨逸にゐる友人O君は伯林から私に宛てた手紙の中に書いて、「此

地に見る外界のありさまには私は殆ど全く心を引かれません。私の求めてゐるのは、特色ある獨逸の精神文明、あの理想主義を産んだ地盤を掘りあてたいといふことです。」と言つてよこした。私達はこういふ態度で西洋に臨まなくてはならない。兎も角私達が今迄見て來た西洋は外面的な皮層的な西洋だ。見なくてもいゝ、いや、見ない方がいゝやうな西洋を過去半世紀の日本は眺めて來た。私の考では西洋を見ることはこれからだ。西洋はもう澤山だなど言つて、若し今西洋を見ることを止めでもしたら、私達は見るべからざる西洋を見て、見るべき西洋を見ずにしまふやうなことになる。併し今日一部の反動思想家のうちには、西洋を見ることの意味なり價値なりに就いて、疑を懷くものさへなくはない。

私達が西洋を知らうとするのは、そも〳〵何の爲であらうか。此の問に答へて、私は先づ、日本を知る爲に私達は斷えず眼を西洋に向けなくてはならないと答へたい。己を知るとは、實は他人において己を知ること以外の何物でもない。私は少年時代によく茅原華山の文章なぞを讀んだものだが、曾て華山が西洋に行く時、自分は日本を見つけに西洋へ行くのだと書いてゐたのを面白く讀んだことがある。私なぞも倫敦の土を踏み、巴里の空氣を吸つて、日本の果して何であるかをしみ〴〵と感じた。早い話が我々の同胞に日本といふ觀念の痛切に起つて來たのは、浦賀に現はれた黒船以來のことではないだらうか。西洋を解せざるもの丶日本觀の如きは、正に繪にかいた魚のやうなものだ。其處には何の生命もない。

私達が眼を西洋に向けることの意味は、併し、たゞ日本を知る爲のみではなくて、實にまた日本を培ひ養ふ爲でなくてはならない。世界から切り離した日本は物理學者の謂ふアトムのやうなもので、それは抽象されたる單なる概念にも過ぎない。日本が日本であり得る爲に、日本は世界の日本でなくてはならない。世界の日本としてのみ日本は日本としての生命を維持し發展する。私の恐れるのは、日本を窓なき單子にすることが、必然に日本そのもの丶內面の發展力を弱めるといふことである。さうだ。私は一國文化の自家受精、一國文化の同族結婚を恐れて息まない。植物はよき實を結ぶ爲に自家受精を避け、人類はよき子孫をつくる爲に近親結婚を避ける。同樣に一國民が健全な文化の發展は異文化との斷えざる接觸を必要とする。儒教や佛教が日本文化に培ひ得たのが既にそれではないか。易世革命の思想を根柢に秘めてゐるやうなあの支那思想、現世の活動を拒否するやうな隱遁的な厭世的なあの印度思想さへ、日本文化の根に培つたではないか。併し既に日本文化の血となり肉となつた儒教や佛教は今にしてこれを見れば異文化ではなくて同族文化である。同族文化としての儒教や佛教とのみ結婚を繰返してゐては、日本文化の生命衝動

を弱める憂はないであらうか。

三

世には歐羅巴や亞米利加の方にあるもので、今日私達に知られてゐないものは、殆ど無いなど言ふものもなくはない。果してさうだらうか。私は接吻といふ極めて簡單な、さうしてありふれた西洋の社會的風習を一つの例として此の事を考へたい。接吻と言へば直ぐそれを男女の愛情にのみ結び付けて考へるのが日本人の常である。ところが西洋の接吻の意味は實は私達日本人の恐らくは解し得ないであらうほど廣義のもののやうである。あの歐羅巴や亞米利加の停車場などで、誰れの見てゐる前でも憚かることなしに交はす、親子・兄弟・姉妹なぞの間の親しげな接吻は、その意味もその形式もまだ殆ど私達には知られてゐない。多くの日本人はそれを見て、まるで猫か犬のやうだなどと、直ぐさう言つてしまふが、併し斯く簡單に片付けるには餘りに廣く複雜な意味を有つてはゐないであらうか。接吻といふやうな簡單なありふれた風習においてさへこの通りであるから、其他は推して知るべきであると私は言ひたい。また我が國で所謂西洋風なるものが西洋の方に現にあるものと全く同じだなどと考へたら、それこそ大早計だと言はねばなるまい。例へば日本の享樂機關に新たな紀元を劃したやうなあのカフェーにしても、西洋のカフェーとは全く

その性質を異にするものである。日本のカフェーは女給で持つてゐると言つてい、が、西洋のカフェーにはその女給といふものがないのである。格式のよしあしを問はず、人は紳士として、また淑女として、晝でも夜でも堂々と出入することの出來る西洋のカフェーと、女給相手に白粉の香を嗅ぎ喃々の聲を交すを主なる目的とするあの頽廢的な日本のカフェーとは全く別物である。日本のカフェーは名はカフェーでも西洋には類のない、日本獨特のものである。だからカフェーの流行を以て歐化呼ばはりをするが如きは、惡疫の流行元をすべて異國に歸する類の得手勝手の論なのだ。

今日の歐化の風潮に對して過ぐる昔の時代の支那化といふことを考へて見るのも面白い。私達の祖先の中には今日の西洋崇拜家も及ばないやうな支那崇拜家があつたやうだ。さういふ人達は支那人のやうに書き、支那人のやうに歌ふほど大陸の方にあるものに心醉した。それに較べたら今日の歐化の如きはまだ〳〵程度の低いものだ。

四

世にはまた歐化が思想動搖の主なる原因であるかの如く信ずるものも少くない。私もまた歐化と思想動搖との二個の事實が與へられたるものとして、私達の眼前にあるのを見る。たゞ歐化が思想動搖の主なる原因なりや否やに就いては、私は知らない。何故なれば同時に二つの場合を實

驗することの出來ない以上、歐化なくんば果して日本の思想は安定なりや否やを確かめるよしもあり得ないから。併し其れ等は私に取つてどうでもいゝ。私は思想の動搖を以つて却て一國文化の進歩發展の徵とも見るものである。思想の動搖今日の如きはないとか、現代は正に過渡期であるとか言ふのを、私は既に久しいこと識者の口から聽かされてゐる。思想の動搖と時代の過渡とは歷史を通じて見得るところであり、就中文化發展の速度の加はるほど動搖と過渡とはあはたゞしい。靜かに動く船は動搖しない。けれどもドーヴァー海峽を一時間半で乘り切るやうな快速船の動搖は堪へ難くひどい。私達の祖先が幾百年もかゝつて漸くし遂げたやうなことを、現代の人々は十年か二十年でし遂げる。それを思へば動搖のあはたゞしさに何の不思議もないではないか。

動搖は怖るゝには足りない。萬法は流轉し、生命は創造的進化の道を辿る。たゞ私達は動搖に徹し、動搖に靜座すべきである。此の意味において人は漂泊の詩人芭蕉の生涯を思ふべきではなからうか。「漂泊の思ひやまず」と道の記に書いてゐる芭蕉の生涯は、藤村も評してゐるやうに、實際漂泊者の生涯であつた。併し彼は同時に偉大な精神上の漂泊者であつたのである。彼は西行や定家や萬葉の諸歌人へ漂泊して行つただけではなくて、遠く大陸の李白や杜子美や寒山へも漂泊して行つた。さうして斯く漂泊に徹したこの詩人が一歩は一歩より、動搖の上に靜座する心術を捕へ、其處に彼が詩の創造の世界が大盤石の如く築かれたといふことを人は見逃してはならない。國民思想の動搖は怖るべきものではない。動搖を怖れる心は一般にたゞ舊きものを正しきもの、善きもの、美くしきものとして、只管それを維持しようとするところに生ずる一種の錯覺である。實在の發展がヘーゲルも說いてゐるやうに、若し辨證法的な止揚による外ないとすれば、動搖そのものは怖るゝには足りない。たゞ私達は動搖の上に靜座し、其處に眞の創造の世界を築いて行かなくてはならない。

五

私は前に西洋の文化に對して、謙遜深い一人の生徒でありたいと言つた。實際私はこの心で西洋を見たいものだ。

ホーマーを讀むにしても、徒らに文法家的若しくは言語學者的な批評眼を以てし、且つ得意になつて、そのうちの弱點、例へばホーマーが寢衣を着てゐるところや、居眠をしてゐるところなどを特殊の興味を以て搜し出し、その表を製つたりする人ほど世に不幸なものはないであらう。三千年前の希臘人がそれを受取り、さうして讃美した時に示したやうな素直な新鮮な純粹な心でこれを取入れ得る讀者こそ幸福な讀者だ。私はかういふ幸福な讀者の心で、もう一度西洋を見たい

ものだ。此前倫敦に滯在してゐた時、日本の一人の官吏が――私はその名を今覺えてゐない――ホテルに私達を訪ねて來た。その人の話の一節に、日本の學校では西洋人は公德心が發達してゐて、樂書などは何處へ行つてもないなど敎へるが、倫敦の某四ツ辻の便所に今日私は樂書を見付けた、敎育上參考になるなら案內してもいゝとのことに、私は辟易し、且つその人の心をあはれに思つた。西洋人も人間である。缺點弱點はいくらもあらう。樂書どころではない、監獄制度のあるを見れば、强盜や詐僞や殺人も澤山あらう。光明を求めることを知らずに、たゞ暗影を探がし歩るく人ほど世に不幸なものもあるまいと、私はそのときつくゞ思つた。恰もホーマーの不幸な讀者のやうに、此の頃は西洋の缺點を拾ひ集めて、表でも製り、日本の方が遙かにえらいとでも言ひたいやうな國粹病患者がぽつ〳〵ある。眞似たくないのは斯の種の患者の態度だ。私は極く素直な心で西洋を見たい。子供のやうな心にならなくては人は天國に入るを得ないとは確か基督の言葉であつたかと思ふ。天國に入る心の工夫のみではあるまい。すべて物事の眞相を捕へようとするものは、子供のやうな素直な天眞な心にならなくてはならない。

たゞ眞に素直な天眞な心で物を眺めることは私達に取つて決して容易のことではない。新刊圖書の一二冊も讀めば、早や何々敎育學說批判などと題して滔々論じ立てたくなるが、我が敎育社會の常である。私はよく卒業論文に取りかゝる生徒を集めて話すことがある。「獨創に富む論文を書かうなどいふ大望心は懷かなくてもいゝ。たゞ謙虛な心で讀んで見ろ。プラトンの「理想國」でよし、ルソーの「エミール」でよし、ペスタロッチーの「ゲルトルート」は如何にして其の子を敎ふるか」でよし、フレーベルの「人間敎育」でよし、ナトルプでよし、シュプランガーでよし、リットでよし、たゞ敬愛の念を以て、その一冊なり一章なりを味へ。味へばおのづと感想が湧いて來る。その感想を率直に綴ればそれでいゝ。何も論文としての組織や體裁に捕はれるには及ばない。否な、否な、組織や體裁は却て思想の生命を無みすることも珍らしくない。讀むにも謙虛、綴るにも謙虛、決して新機軸を出さうとか、偉人の思想を批評しようとかいふ心を起してはならない。さうしてこの謙遜深い心が論文を書く心であつて、軈て又卒業後の長い一生の處生の心でもありたい。若し顧みて內に謙虛な心を見失ふやうなことでもあつたなら、藤村の「新生」でも讀め、ドストイェフスキーの「白痴」でも讀め。」

私はこの半ば說敎めいた、每年自分の生徒に與へる注意を自分自身に與へて、いま再遊の首途に立つてゐる。たゞ私は西洋を觀る根柢を「人間」に置きたい。といふのはテーヌがあの英國印象記の中にも述べてゐるやうに、「根本において一國の主要なものは人間である。」併し、人間と

は精神である。今日私達に取つて必要なのは社會や政治や經濟の革命ではなくて、國民の精神の革命である。國民の精神さへあれば、凡ては來る。イブセンはブランデスに寄せた書簡の中で、「眞に必要なものは人間の精神の革命である」と言つたとか。私が西洋の社會に探がし求めるものも亦その人間の精神の革命の糧に外ならない。

フレーベル遺跡巡り

一

種々なる精神科學のうちで、その文献の數多いことでは、恐らく教育學に及ぶものはないであらう。その數多い教育學の文献を渉獵して、何時も沙漠を旅する思ひを禁じ得なかつた私は、曾てフレーベルの「人間教育」を讀んで、初めてやる瀨なき渴をオアシスに癒やす隊商の思ひをした。「人間教育」は私の愛讀する教育書の一つである。さういふ書物の作者フレーベルを慕ふやうになつて、早くも十幾年の歲月は流れた。初度の外遊の時は特殊の用向を帶びた不自由の身で、私は獨りチューリンゲンの森に入つて、フレーベルの遺跡を尋ねる時を有つことが出來なかつた。今度の外遊が決つた刹那先づ私の胸に來たものは「フレーベル遺跡巡り」であつた。さうしてその日は恰も一千九百二十九年五月聖靈降臨祭（ヴィンツステン）の休暇といふ善い季節にやつて來た。

五月十八日、午前六時四十三分、私は萊府（ライプツヒ）の停車場を立つた。春雨新綠をうるほす聖靈降臨祭の前日である。此の善い祝祭期を田舍に行つて、自然に浸らうといふ山仕度の若い男女の群で汽

車は一杯である。汽車の窓から外を眺めると、沿道の山家には花といふ花が一時に咲いたかと思はれた。梨も林檎も李も杏も接骨木（フリーダ）も競つて咲いてゐる。聖靈もこれでは降臨せずには居られまい。基督もいゝ時を選んで再び私達の世界に降りて來たものだと私は思つた。

汽車は午前十一時十二分にブランケンブルグに着いた。雨中馬車を驅つて、私は停車場から凡そ四五町のベーリング通りのロルフス家に行つた。此の家は曾て福島君が「外遊二年、その間最も滋味に富む人間的の體驗をした」と歸朝早々私に告げたこともある家である。私の來訪が既に屢々福島君から豫告されてゞもあつたのか、家族の皆んなが恰も舊知のやうな態度で玄關に飛び出して來て、私を應接間に引つ張つて行く。ロルフス夫婦と三人の娘と二人の息子と、併せて七人に取り卷かれて、私は應答に目を廻はした。私は既に一年有余萊府に在留してゐるといふこと、今日の來訪は突然のやうではあるが、實は去年の春國を立つとき早くも念じてゐた實にその來訪であるといふこと、ロルフス家のことに就ては既に詳しく福島君から聞いてゐるといふこと、福島君からは呉々宜しく傳へて欲しいとのことであつたといふことなぞを話し、且つ私の此の來訪の目的は勿論チューリンゲンの聖者フレーベルの遺跡を巡るにあるが、福島君の遺跡を訪ねるのも兼ねた一つの目的であると言つた。「滯在の御豫定は？」とロルフス夫人が尋ねるから、私は「豫定といふものを立てゝ強ひて自分で自分を縛るほど頑なものではない」と答へた。「では氣の向くまゝの御豫定ですか？」と問ひ返す。「その通り。別してフレーベルのやうな偉人の跡を訪ねるのに、時間割で事を運ぶは勿體ない。感慨無量その盡くるところを知らざれば、私はこのブランケルブルグを去らないかも知れない。」と私が答へると皆んなで洪笑。初對面の會話はこれで打ち切り、私は二階に取つてあるといふ自分の部室に案内された。

京都の東山そつくりの金山銀山の一聯を南に見る私の部室の眺めも捨て難い。「自由は獨逸の森より」とは古來歐羅巴の詩人の歌つたところであるが、その獨逸の森の代表と言つていゝチューリンゲンの森の中に今正に自分が居るのかと思つたとき、私の心臟は皷動した。

晝食後小學五年生の宿のペーター君はフンメルの作「小ヴァイオリン彈奏者」を彈いて、私をもてなしてくれた。夕食が濟むと長女のドリーと次女のカシーとがピアノを合奏して、遠來の客を慰めてくれる。「ビータースブルグの橇滑り」「シュワルツワルドの水車」「屋根の雀」「前奏の喜劇」などに、チューリンゲンの森の一夜は更けて行つた。

二

五月十九日、朝曇る。聖靈降臨祭の第一日である。朝の珈琲を濟まし、ペーター君の案内で私

は町に出た。ブランケンブルグの町は人口三千、谷間の小さな田舍町である。町の本通りを西へ四五町行くと市場に出る。市場を北に入つて山手の方へ一町程爪先上りに登つて行くと、其處にはフレーベルが初めて建てた幼稚園の跡がある。オーベレル、ゾンネンベルグ町百十二番地の三階造りの一棟がそれである。家の内部は全く模樣を變へて、今は普通の民家になつてゐる。後に岡山を背負つた、見るからに憐れな見すぼらしい建物である。道路に面した壁に記してある文字を私は見つけた。「フリードリヒ、フレーベル、一千八百四十年六月二十八日彼れの最初の幼稚園をこゝに建立す。」人間の教育は魂の教育を以て第一とする。その魂の眞の教育は幼きものにおいて、然り、たゞ幼きものにおいてのみ可能であるといふフレーベルの信念が凝つてあらはれた人類最初の幼稚園はこゝにあつたのかと、私はその憐れな古い建物を下から上へ上から下へ幾度か眺めた。

この建物に隣つて小さな町の教會がある。恰も今日は聖靈降臨祭の第一日に當るので、禮拜や祈禱や說敎がある。オルガンの音は街道に洩れて來る。衝動は私をその敎會へ運んで行く。會堂に入ると善男善女は堂に滿ち、讃歌の聲はオルガンの音に和して聖氣は堂に溢れる。三十四五の夫人を指揮者とする合唱隊は男女併せて二十餘名、美しい聲で幾曲を歌つた。軈て老牧師が壇上に身を運ぶ。禿頭、白髯、聲量に富む牧師は壯重な口調で、靜かに、さうして明瞭に聖靈降臨祭に因む一場の法話を進める。今日の祝祭日に相應はしいと思つた。私は讃美歌第三十六番と第三十七番とを歌ひながら、宗教的人間教育者フレーベルも恐らく此の敎會に屢々來たであらうなどと想像して見た。

晝食後私はシュワルツワルトの森へ散歩した。獨逸は昔から歐羅巴の「森の國」と言はれてゐる。その「森の國」の森を代表するのがチューリンゲンで、チューリンゲンではこのシュワルツワルトの森が第一であると言はれてゐる。私はそのシュワルツワルトの森の中を四五時間もぶらついた。山あり、川あり、山は奇岩怪石に富み、川は清流滾々として流れ、私は信州の故山に歸る思ひをした。樅やえぞ松(フィヒテ)などの常綠木の間に、白樺、楓、栂(とが)、樫などの若葉が燃えて、初夏の森は何とも言へない。山を降りて私はシュワルツァ河の土手に出た。夕日は道端に咲き盛つてゐる山櫻を美しく照らす。暫くして日は森に沈み、十三夜の月がすがゝしい顏を谷あひに出す。私は河沿ひの並木道をブランケンブルグの方へ歩きながら、フレーベルといふあの大敎育家はかういふ美しい自然の中で大きくなつたのかと思つた。ペスタロッチーを育んだ瑞西の山と水も美しかつたが、フレーベルを育んだチューリンゲンの山も水も、なかゝ〳〵美しいと思つた。

三

五月二十日、快晴、聖靈降臨祭第二日。目ざめて窓を開けば、雲雀は野原に囀り山鶯は籠に欣ふ。朝の珈琲を濟ませて、私はフレーベル夫人ウイルヘルミネの墓に參つた。町の本通りを北に折れて、グライフェンシュタインの山に登る登り口に、町の北墓地がある。幅二十間奥行一町餘りの小さな墓地で、十五六本の大きな橡や樫の木がまばらに立つてゐる。南面しただゝら登りの墓道を殆ど登り詰めると、左側にウイルヘルミネの墓がある。墓は九尺四方位の鐵柵にかこまれ、眞中に立つ二尺に三尺位の小さな石の墓碑には、玆に「ウイルヘルミネ、フレーベル眠る、ホフマイスター家の出、一千七百八十年九月十七日に生れ、一千八百三十九年五月十三日に死んだ。」と記してある。フレーベルがこのウイルヘルミネを新妻に迎へたのは、彼が生涯において特筆すべき一千八百十七年、即ちフィーベルがカイルハウに初めて學園を建てた年である。ウイルヘルミネ夫人が一代の哲學者フィヒテ及びシュライエルマッヘルに學んだ才媛で、智德兼ね具はり、フレーベルの事業に内助の功を積んだといふことは人のよく知るところである。彼に先立つた彼女の死を悼んでフレーベルは言つてゐる。

「假令蒲柳の質とは言へ、なほも彼女は精神において聰く、愛において強き、主婦らしい内助の力となることが出來た。カイルハウの學園において、ウイリサウの學園において、ブルグドルフの學園において、さうして最後にはまた幼兒の教養に捧げたブランケンブルグにおける學園において。人類の幸福に對する愛は彼女の强味であり、神が彼女に任かせた子供に對する忠實な世話は彼女の喜悅であり、彼女の夫がその全生涯を淨化した愛に滿ちたる仕事は彼女の賜物であつた。」

墓碑の右側には一株の薔薇が茂り、薔薇を取り卷いて三色菫が咲き亂れてゐる。墓地は草原でたんぽゝの花が一面に咲き、駒鳥は枝から枝に飛び廻つて朝の陽光を浴びてゐる。

墓參を濟まして私はグライフェンシュタインの古城に登つた。道は北墓地に續く。胸突き四五町を攀ぢ登らなくてはならない。登り詰めると城跡で、一軒の茶店がある。腰をおろし、汗を拭き、風を入れ、下を眺めると、ブランケンブルグの町は手に取るやうに眼下に見える。シュワルツァタールを始めとして、四方の山々が一眸の中に集るいゝ眺めである。フレーベルは閑さへあれば杖をこの古城の跡に曳いて、チューリンゲンの森を眺めては氣を養つたと言ふ。さもあらうと思はれるいゝ眺めである。

午後私はシーファーブルシェといふ近くの森に出かけた。宿を出で、シュワルツァ河の谷間を登

つて行く。川沿ひの草原や森の木蔭には、若い男女の群が毛布を敷き、リュックサックを枕にし、半分裸體になつてごろ〳〵してゐる。此等のアダム・イヴ達は多くは伯林とか萊府とかいふやうな都會地から、自然を慕つてこの森の中にやつて來た「渡り鳥」である。空氣と水と日光とに飢ゑた此の「渡り鳥」はシュワルツァ河の清流に身を浸したり、花の草原に横はつて、紫外線の強い山地の日光を浴びたりする。「自然に歸れ」と敎へてくれたルソーのやうな人があつたに拘はらず、ロダンをして遂に「其處には人間は生活してはゐないのである。」とさへ叫ばせた病的な都會生活のことを思へば、私はこの新時代のアダム・イヴに同情せずには居られなかつた。川に沿つて十二三町登り、それから右に折れて、急勾配の山道を更らに七八町登ると、海拔四百六十米突のシーファーブルシェの頂に着く。山上は四邊の眺もよく利く。あたりは美しい草原で色々の花が咲いてゐる。ブターブルーメ・ハアネンフス・ゲンゼブルーメ・シュルッセルブルーメ・シュタインブレッヒャー。高原の草花は一般に姿態が優しく、色彩が高尙で、私は好きだ。ブターブルーメは日本のたんぽゝで、ハーネンフスは金鳳花（きんぽうげ）に似た黃色い花である。ゲンゼブルーメは野菊に似た小さい花を一輪づゝ附ける。シュルッセルブルーメは袋形をした黃色い花が七八個群生してゐる優しい花である。シュタインブレッヒャーは石割花とでも譯すべきであらうが、その名にも似ず可憐な白い小さい花である。私はお伽噺にでも出て來るやうな、この美しい花野に仰向けに横はつた。空には一片の雲もない。私は考へた。あの一面熱心な自然研究者でもあつたフレーベルはブランケンブルグの里から、また時にはカイルハウからさへ、植物や鑛物の採集に此のあたりへもやつて來たであらう。「子供と共に生きる」ことを信條としてゐたやうな、あのフレーベルが學園の子供をつれて此の美しい草原に來たことも決して稀ではなかつたであらう。

今日は聖靈降臨祭の第二日なので、遠足に出て來た人も少くない。花摘みの田舍娘は草原に臥ころんで、チョコレートを頰ばつてゐる。リュックサックを背負つた「渡り鳥」の男女の一と群は、手風琴を鳴らしたり、ハーモニカを吹いたりして、山道を歩いて行く。私はついうとうとした。シュワルツァ河は遙か下の方の谷あひを流れてゐる。川沿ひの街道を走る馬車馬の蹄の音は河音に和して、微かに響いて來る。私はチューリンゲンの森で二時間も午睡をした。山を降りブランケンブルグの方へ歸らうとすれば、早や滿月に近い初夏の月は森に谷間に一杯光を投げてゐた。

四

五月廿一日、快晴。朝の珈琲を濟まして町に出る。ベーリング町を本通りに出て、二町ばかり東に歩き、停車場の手前を南に折れると、ゲオルグ町はシュワルツァ河に沿つて、町の公園の方に走

つてゐる。道の左側は大きな林檎樹の並木で、丁度花の盛りである。かうした果樹の並木は獨逸の田舍町だけに見られる景色ではなからうか。この並木道を一町ほど行くと、右側にフレーベルの記念碑がある。私はその記念碑を見にやつて來た。凡そ三間四方の黑塗の鐵柵の中に、高さ二十尺ばかりの石の塔が立つてゐる。塔の頂はフレーベルの恩物の球を載せた形である。正面の銘には金字で、「フリードリヒ、フレーベル、いざや我等を我等が子供に生きしめよ。」と鐫り付けてある。此の塔は裏面にも記してあるやうに、一千八百八十三年四月二十一日、恰もフレーベルの生誕百年祭に、彼を畏敬する知人の志によつて建てられた。塔の右側に寄せかけた一枚の石は、ルイゼ夫人の思出で、彼女が「一千八百十五年四月十五日オスターオーデに生れ、一千九百年一月四日ハンブルヒに沒し、シュワイナに葬られた彼女の夫の側に埋められてある。」といふことを記してある。

この碑が立つ境内は相當廣く、幾十本の赤楊（はんのき）の外に、樫、楓、橡などの巨木が立ち並んでゐる。記念塔の傍には砂山を作つて、界隈の子供を遊ばせるのも、故人の意に添ふよい思付きである。私は砂山の廻りに並べてある子供のベンチに腰をおろした。小學三年になるといふ一人の子供は、四つになる弟を連れて來て、砂遊びに餘念もない。私は子供の砂遊びを見たり、青葉がくれに鳴く山雀（やまがら）を聞いたりした。砂遊びに飽きた二人は私の方を向いてハーモニカを吹いた。私は調子っ外（ぱづ）れの「おてゝつないで野道を行けば」を歌つて見せた。

此日午後は家居し、萊府大學の圖書館から借りて來たフレーベルの自叙傳を讀んで夜に至る。

五

五月廿二日、快晴。オーベルワイスバハにフレーベルが誕生の家を訪ねる。午前八時十五分プランケンブルグの驛を立つた私はシュワルツワルドの森を東に進む。沿道につらなるチューリンゲンの森林地帶を見て、私はフレーベルが自然の研究に興味を有つたり、森林官に志したりしたのも成る程と思つた。「詩人を正しく解さうとすれば、人は先づその鄕土に行かなくてはならない。」と誰やらが言つたのも肯かれる。シュワルツワルドのシュワルツの名の起りに就いては私は知らない。けれども森の樹木の畫なほ暗く續くを見ては正に黑部の森である。森のとぎれ〳〵には牧場があつて、たんぽゝが花毛氈を敷き詰めたやうである。獨逸のたんぽゝの花は日本ののに較べると、背が高く花が大きい。そのたんぽゝの一面に咲く牧場を見て、私は晩春九州路を旅して菜の花を見る、甘く軟らかい印象を喚び起した。森林地帶を走つた汽車は午前十時三十分にオブストフェルトの驛に着く。此の驛でケーブルカーに乘換へた私は三十分でオーベルワイスバハに着いた。高原にある人口三千といふ小綺麗な田舍町で、此の地方の山から出る石盤石で、屋根も葺けば壁も

蓋つてある。胸のすくやうな、さつぱりした町である。部落の東南の岡の上には高さ二十六米突のフレーベル塔が立つてゐる。偉人を產んだ土地の記念として、一千八百八十七年に建てたと言ふ。私は先づその塔に登つた。塔の中程には簡單な茶店がある。一杯の紅茶に渴を醫して、四方を眺める。高原の岡山に高く立つ塔からの眺めは、チューリンゲンの山々幾十里を一眸の中に集める。私は塔を降り、雲雀の聲を聽きながら、二三十分散步した。岡を下りて町に出る。町の北端にある小さな敎會はフレーベルの父が牧師をしてゐた敎會である。私はその敎會をのぞいて見た。フレーベルが誕生の家は道路を挾んで、この敎會の向側にある。素朴な二階造りの一棟に、私は「幼稚園の創始者フリードリヒ、フレーベルは一千七百八十二年四月二十一日此處に生れた。」と言ふ文字を見付けた。フレーベルはこんな淋しい家に生れたのか、彼が僅かに九ケ月の短かい間產みの母の愛を受けただけで、繼母の冷たい手に育てられたのは此家か、と思ひながら見上げると、二階の窓を開けて顏を出したのは、世の繼母といふものを想はせるやうな邪見の婦人ではなくて、微笑さへ湛えた優しい一人の田舍娘である。娘は上から、私は下から、互に視線を交じへながら、一應の挨拶をした。今はフレーベルに因む何物も此處には殘つてゐないと聞いて、私は淋しく、前來た道を驛の方へ引き返し、驛の近くの獵人宿で晝食を食べた。

ケーブルカーを待つ一時間餘りを私は森の木陰で休むことにした。子牛を連れた親牛の一群も木かげで休んでゐる。馨る若葉の森で親牛が子牛に乳を添へてゐるのものどかである。親牛の首に吊るした大きな鈴は時々鳴る。私はフレーベルのあの「母と遊戯歌」の中にある「母と子」の詩などを心に浮べながら、思はずこの森で親牛子牛の群と一所にまどろんだ。

母と子

小さき者よ！いとしき者よ！
汝(なんぢ)より出でて我胸を
春の訪れさながらに、
喜びと暖みもて
搖り動かすはそも何ぞ？

「一に信、二に愛、三に望」なり。
信は眼(まなこ)より逆り出で
只管にみ親の愛を

我が守り神と信ずなり。
愛は微笑の中にさゝやき
み親との生の旅路に
光をのみぞ與ふなり。
望は胸に住ひなし
生の泉はそこにのみ湧く。

いざ我子！來よ我子！
共々に足並揃へ手を握り
人生の旅に出でんかな。
母の優しき愛は動けり
汝が信、汝が愛、汝が望
あだには汝に留らじ。
年經る者が天國の

光を仰ぐ靈感も
幼き者の信と愛
望の中に宿るなり。

午後二時十五分の汽車で私は朝來た道をブランケンブルグの假寓へ急いだ。

六

五月廿三日、快晴。宿の近くにブランケンブルグの幼稚園を訪ねる。この幼稚園はフレーベルの記念の爲に今から二十年の昔即ち一千九百八年にフレーベル協會の建てたものである。園主はエリザベト、ロイトホイザー孃と言ふ。父はこの三月までチューリンゲン州の文部大臣をしてゐた。地位あり資産ある名門の出であるのに、子供を研究し、子供と生活するのに趣味を有つといふので、ブランケンブルグの幼稚園經營のことに携つてゐるのである。別に紹介狀も持たず、打合せもせず、突然玄關に立つて面會を求めると、快く應接室に連れて行く。私は先づ來意を述べた。私の專門が教育の研究であるといふこと、かねて古典にも多少の興味を有ち、フレーベルに就てもさゝやかではあるが曾て一書を書いたこともあるといふこと、目下ライプチヒに假寓して

ねるが、フレーベルの遺跡を隈なく巡らうと思つて、數日前このチューリンゲンの森にやつて來たといふこと、今日の來訪は突然ながら、あなたが營むこの幼稚園を拜見し、幼稚園に附屬してゐるフレーベル博物館で少しく調べ物もさせて欲しいといふことを私は述べた。氣品ある、兎角無口の、何處となく淋しさうなエリザベト嬢は、極く謙虛の態度で、自分は子供の研究と子供の世話とが好きなので、自然、フレーベルにも興味を有ち、言はば道樂氣分で、伯林に二年此處に四年、フレーベルの研究やら幼稚園の世話やらに忙がしい日を送つてゐると話した。初對面の、まだうら若い婦人に、年齢を尋ねることとの非禮は、私とても十分知てはゐたが、必要がこの非禮を敢てして、「あなたは、お幾つですか」と私が尋ねたら、「わたしは今年二十七になる。」と端的な答。

彼女は先づ私を幼稚園の方へ引つ張つて行く。こゝには八十人の園兒が居て、四部屋ある。朝からシュワルツワルトの森に遠足に出かけて、今日は授業がない。彼女はフレーベルの恩物やモンテソリーの玩具や、ハンス、フォルケルト教授が工夫したといふ玩具などを見せながら、詳しく說明してくれる。ハンス、フォルケルト教授は有名なヨハネス、フォルケルト先生の令息で、ライプチヒ大學の教授として兒童心理學や教育心理學を專門にしてゐる。恩物の改良なども色々と企て、直觀的に數觀念を會得させる玩具や積木細工などは可成得意なもので、研究室に訪ねて行くと、必ず並べて見せる。見せるだけでは承知せず、買はせて持つて歸らせて、吹聽さへもさせようとする。エリザベト嬢はこのフォルケルト教授と幾年か共同研究をし、教授は屢々この幼稚園にもやつて來ると言ふ。私はその共同研究の結果を彼女の口から面白く聽いた。その共同研究の結果によれば、フレーベルの恩物の方がモンテソリーの玩具より優れてゐるといふ。私は稍意外なこの研究に興味を有ち、種々な質問に答へて貰つた。

余「あなたは此の幼稚園でフレーベルの恩物とモンテソリー式の玩具との比較研究をやられたのですか?。」

嬢「はい。フォルケルト先生と御一所に。」

余「フレーベルの特色とするところは、あの偉大な精神にある。兒童心理學のまだ幼稚な當時に出來た彼れの恩物には、種々な缺點があるかと私は思つてゐた。モンテソリーの方は假令フレーベルに見るやうな偉大な精神は缺けてゐても、新心理學の應用に依つて、子供の心に適切なものが出來てはゐないであらうか?、私はかねて、「フレーベルの精神とモンテソリーの方法」といふモットーさへも作つて、此等兩者の調和と統一との必要を叫んでゐる。」

嬢「新心理學で舊いフレーベルの方法を補ふことの必要は、私なども感じてゐる。けれどもモンテソリー式は決してよい意味で心理學的ではないやうである。」

余「私はその理由を、特にあなたとフォルケルト教授との共同研究に基づく理由を是非聽きたい。」

嬢「モンテソリー式は凡てが知的でもあれば分析的でもある。」

余「そのわけは？」

嬢「色とか形とか、大とか小とか、長いとか短いとかといふことが、凡て知的でもあり、分析的でもあり、孤立的でもあるから、理には長じても子供の心には却つて遠い。ファンタジーで動く子供は科學的には種々なる缺點もあるであらうところのフレーベルの恩物を却て好むではありますまいか？」

余「ではモンテソリーは科學的で、フレーベルは藝術的であるといふのですか？」

嬢「わたしはさう言ひたい。モンテソリーは科學的であるだけ子供のファンタジーに遠く、フレーベルは科學的でないだけ、子供のファンタジーに近い。子供はファンタジーの使徒なのだ。」

この短い問答は更らに幾多の疑義を私の心の中に惹き起した。私は此等の疑義を解くよすがになるであらうところの、彼女とフォルケルト教授との共同研究の報告書「フレーベルとモンテソリー」一部を手渡しされて、エリザベト嬢との會話をやめた。

初夏の庭には幾株かの接骨木が咲き、樫の大樹には西洋には珍らしい蟬が鳴いてゐる。私は厚く禮を述べ、午後の再會を約して一旦宿に歸つた。

午後フレーベル記念館を見る。記念館は幼稚園と同じ建物のなかにある。館長は同じエリザベト嬢が兼ねてゐる。フレーベルの肖像畫の色々なのや、最初の夫人ウィルヘルミネ、後の夫人ルイゼの肖像畫を始めとして、フレーベルの學園で彼を助けた多くの協力者の肖像畫など、記念室の四壁に所せまきまでに掛けてある。「人間教育」や「母と遊戯歌」などの初版が目に付いた。「母と遊戯歌」の初版を既に手に入れてゐる私は「人間教育」の初版を見て欲しくてたまらなかつた。フレーベルが自ら手を入れ、筆を加へてある「人間教育」はこの記念館での珍中の珍である。私は幾度か手に取つて、眺め眺めた。私はまた「人間教育」の原稿を見つけた。福島君の骨折りで數年前、意外にも一通のフレーベル自筆の手紙を手に入れることの出來た私は、彼れの筆蹟には初見參ではない。けれども人類教育史上における一大金字塔としての「人間教育」の原稿の墨痕なほ鮮かなるを目のあたり見て、私は感慨無量であつた。私は早速乞うて寫眞師を呼び、「萬物

の中には永劫の理法が祕められ、働き、さうして支配してゐる。」といふ、あの第一行に始まる最初の一頁を撮影した。祖國の友に贈るよき土産の出來たことを私は喜ばずには居られなかつた。

私は陳列棚の中にふと「日曜新聞」の一束を見つけた。これはフレーベルがブランケンブルグ時代に獨力で發行した週間新聞で、先づ世の父兄や教師を、更らに進んでは廣く一般識者の眼を、兒童の教育に開かせようとしたものである。ペスタロッチーに導かれて人類教育の世界に入り、ペスタロッチーの正統の使徒として戰つたフレーベルに、ペスタロッチーの「瑞西新聞」に比すべきものゝあつたといふことに何の不思議もないと私は思つた。試みにその「日曜新聞」の一枚を取つて見れば、表紙の上方に「來れ、我等を我等が兒童に生きしめよ」といふフレーベルが得意の金言が書いてある。私はエリザベト孃を顧みて、此金言の由來を尋ねて見たが、彼女も確かには知つて居ない。たゞフレーベルが「人間教育」の著作以後、好んで此の言葉を使つてゐるといふことだけは疑ないとのことである。フレーベルはシュワイナのマリエンタールに學園を營む頃にも、「週間誌Wochenschrift」を發行して、主義の弘通に努めたが、その「週間誌」もすべて整へてこの記念館にある。私はフレーベルが訂正加筆の「人間教育」や「日曜新聞」や「週間誌」や未發表の手記や書簡の數々を見ながら、何故眞のフレーベル全集の企がないのかと思つた。ランゲが一千八百六十二年に編纂した三卷の全集は、全集ではなくて選集である。その選集さへ今は全く手に入るよしもなく、私も十年探がして漸く第二第三の二卷を手に入れた。一部の完全なランゲの選集が日本にないのも嘆かはしい。フレーベル全集の企はないかと、エリザベト孃に問へば、無いと答へる。たゞ近年漸く、フレーベルを顧みようとする風潮だけは起り、伯林にはドクトル、フリッツ、ハルフターといふ熱心なフレーベル研究家があつて、此秋か冬には立派なフレーベル傳が出るだらうといふよいことを聞かせてくれる。私は後日の文通の爲に、ハルフター氏の宿所を尋ねた。忘れぬやうに、こゝに書き付けておかう。Dr. Fritz Halfter, Berlin Zehlendof, Dallritzstr. 49. フレーベルの生涯や思想に關する新著を聞けば、エリザベト孃は有るものは持つて來て見せ、無いものは書名、著者、發行所などを親切に教へてくれる。私はその一々を書き取つた。

七

五月廿四日、快晴。毎日よいお天氣で、私もいゝ時來たと思つた。午前中フレーベルの住まつた舊家其他の遺跡を見る。宿を出て本通りを四五町東に行けば、ブランケンブルグの停車場がある。停車場の近くを流れてゐるのがシュワルツァ河の支流である。この支流に架けた小さな橋の袂に、見るからに憐れを催すやうな二階建の一棟がある。「フリードリヒ、フレーベルは一千

八百三十七年から一千八百四十五年にかけて此家に住んだ」と記してある。誰一人同情の涙をそゝぐ者もなく、その上貧苦と戰つて道の爲めに働いた當時のフレーベルを、私は十分偲ぶことが出來た。當年の主なき家の門口には、徒らに古い大きな葡萄蔓がはびこつてゐる。

今來た本通りを三四町引き返すと道に面した左側に、フレーベルの「事務宅 Geschäftshaus」といふものがある。矢張粗末な二階建で一千八百三十七年から一千八百四十九年まで彼が此家で仕事をしたと記してある。仕事とは主として恩物の製作である。彼は一つには道を弘める手段として、二つにはまた維持の困難な幼稚園を支へる經濟上の助として、彼が創始の恩物を遠く外國までも出さうとした。商才を具へぬ彼れの此事業が失敗に終つたことは言ふまでもない。彼は書齋を此家に有つてゐた。「日曜新聞」も「母と遊戯歌」もこゝから出た。

此日午後私は自動車を驅つてカイルハウに行く。こゝはフレーベルが始めて自信ある學園を起し、その體驗が凝つてあの「人間教育」一卷になつた聖地である。午後一時に宿を出る。自動車は廣い平らな果樹の並木道を辷るやうに北へ北へと走つて行く。名も知らない小さな部落を二つ三つ通り抜けて、西に折れると牧場の間を縫ふ細い道になる。その細い道を凡そ十町走つて、午後二時頃に私はカイルハウに着いた。山懷にいだかれた人口僅かに七十の小部落である。私はカイルハウの學園の門前に立つた。門前に咲き盛つてゐるフアルバウムの香をかぎながら、私は當年のフレーベルがことどもを色々と思ひ出した。彼がグリースハイムの教へ子を引き連れて、心中大に決するところあつて、此のカイルハウに移つて來たのは一千八百十七年、彼が三十五歳の時である。此年迎へた新妻は一世の哲學者フィヒテとシュライエルマッヘルとの薫陶を受けた才媛ウイルヘルミネである。自信に滿ちたカイルハウの十年の體驗は「人間教育」一卷となつて、一千八百二十六年に公にされた。たゞ好事魔多く、一千八百二十八年には學園が危機を告げ、政府は彼を反對黨の一人と見、教育社會は擧げて猜疑の目を以て彼を見た。受難のフレーベルが瑞西に亡命したのは一千八百三十三年のことである。併し私は學園の前に立つて規模の意外に大きいのに驚いた。三層樓は正面に嚴然として立ち、左に事務室と宿舍、右にフレーベルの住宅、宛ら一城廓の觀を呈してゐる。今は特色ある實科中學校が此建物を使つてゐる。百二十名の生徒の中には露西亞や瑞典や丁抹や西班牙あたりから留學してゐるものもあると言ふ。併し聖靈降臨祭で學校は休、校長は伯林に出張中で留守である。私は事務員の案内で校舍を一巡した。私の興味を引いたのは、フレーベルの住宅の二階にある「フレーベル室」である。室一杯に陳列してある兒童の手工製作品・恩物・動物植物鑛物の標本類は今も昔を語つて、私はフレーベルの魂が其處に動いてゐるか

と思つた。「フレーベル室」の片隅に小さな棚がある。ふと私はその棚に塵にまびれた假綴の同じ書物が四五冊重つてゐるを見た。何の氣なしに手にして見ると、それは「人間教育」の初版である。「人間教育」の初版は今では手に入れることの殆ど絶對に出來ない書物である。「母と遊戯歌」の初版でさへ私は百五十馬克を支拂つた。「人間教育」の初版は私も十年の長い年月を空しく探がして、今に手に入れることが出來ない。その「人間教育」の初版五部をふと塵の戸棚に見付けた私は夢かとさへも疑つた。案内の事務員に聞けば、最近此部屋の整理に着手して、偶然見付けた掘出物であるといふ。早くも野心の起つた私は名刺を事務員に托し、「校長さんが歸つたら、フレーベルの遺跡巡りに、遠い日本から遙々こんな男が訪ねて來た。何れ書面で御依頼に及ぶ件もあらうから、どうぞ宜敷く傳へて欲しい。」と附け加へた。

「フレーベル室」を出た私は同じ事務員の案内で學校の裏の小山に登つた。爪先上りに二三丁登ると其處は早や雜木林で、白樺や楓や松や一位が茂つてゐる。林の入口にはフレーベル及び彼の協力者の記念碑が立つてゐる。私はその記念碑を見に來た。高さ六七米突の石の碑の眞中にはフレーベルの肖像を彫み、廻りを八人の子供が取卷く。ゆかしい意匠である。銘に言ふ。「カイルハウ學園の創設者フリードリヒ、フレーベル・ウイルヘルム、ミッテンドルフ・ハインリヒ、ランゲンタールの記念の爲に、感謝禮拜之を建つ。一千八百七十九年舊カイルハウ協會。」この界隈はコルム山と呼ばれてゐる。フレーベルの精神に從つて、今も學園の生徒をこのコルム山に連れて來ては作業をさせるといふ。山から學園の方を見下すもいゝ眺である。學園の周圍は一面果樹園で、林檎や梨の花盛りである。私はペスタロッチーのノイホーフを想ひ起した。山を降りて再び學園を横ぎり、坂道三町を左に登ると、カイルハウの學園に專屬の墓地があり、フレーベルの緣者や協力者の亡きがらが埋めてある。墓參を終へて歸路に着けば、日はコルムの山に入つて、旅情一入深し。

共夜私はブランケンブルグの或るレストラントにエリザベト孃を招いた。突然訪ねて種々厄介になつた禮である。私は兎角默し勝ちな彼女の持てなしに、可なり骨を折つた。カイルハウに行く道の美くしかつたといふこと、フレーベルが學園跡の想像にも勝つて宏大であつたといふこと、玄關に咲き盛つてゐたファウルバウムの花の香の忘れ難くよかつたといふこと、「フレーベル室」に意外なものを五部見屆けて來たといふこと、コルムの山から學園の方を見おろす眺めは、私をしてそゞろにペスタロッチーのノイホーフを想ひ起させたといふこと、感激の直後の弛緩がいたく哀愁を催させたといふことなどを、ぽつり〳〵と話しながら私は盃を交はした。私が「人間教育」の

初版を十年この方探し探して、今や絶望の底に沈んで居るといふことを知つた彼女は、フレーベル博物館に所藏の二部ある一部を、當路の許しを得て私に頒けようかと言ふ。當路の許しとは、チューリンゲン州の文部省の許しである。事の成否は別として私は世に有難い彼女の好意を謝した。

陶醉の頭を夏の夜の涼しい風になぶらせながら私は宿に歸つた。

八

五月廿五日、天氣晴朗。シュワイナの遺跡を巡る。

午前七時五分の汽車で、私はブランケンブルグの驛を立つた。チューリンゲンの森林地帶を横切つて、私はゴータから先づアイゼナハに行かなくてはならない。驛を出た汽車は直ぐ森林地帶に入る。汽車の窓から外を見ると、野道山道に荷馬車を追ふ乙女が目につく。山地の女がひどい勞役に服すことは西洋も日本も變りはない。私は信州の山地で馬追ふ乙女を見て大きくなつた少年の日を思ひ出した。汽車が驛に着く度に私は界隈の山家から、最寄りの町の市場に物賣りに行く老婆の群を見た。てんでに大きい籐の籠を背負つてゐる。籠の中には家に出來た野菜や草花が這入つてゐる。私は一人の老婆の背負つた籠の中で鳴く幾羽かの鶯鳥の雛を見た。孵化してまだ一と月か二た月しか經たないやうな雛は、嘴が黄色く、毛は細く短かく軟かさうだ。その雛達が老婆の背中で、首を籠の緣から長く延ばして、ヒョ〳〵と鳴いた。廣い山家の庭に育つた鶯鳥の雛が、親に別れて、あゝして町に賣られて行くのかと、憐れなもの〻運命を私は考へずには居られなかつた。私には忘れ得ぬチューリンゲンの山地の印象である。

午前八時半アルンシュタットの驛で汽車は乘換になる。男女二三十人から成る「渡り鳥」の一群はリュックサックをプラットフォームにおろして、彈いたり歌つたりしてゐる。ヴァイオリンが三挺、ギターが一挺、マンドリンが一挺。チューリンゲンの山地に聞く古い獨逸の民謠を私は面白く感じた。同じ青年運動でも獨逸を中心に瑞西の一部へも擴がつてゐるこの「渡り鳥」は、日本の青年運動などによく見るやうな、窮屈な汎倫理主義的のものではなくて、よく青年の泡立つ心情の琴絲に響く。自然に浸つて打ち寛ぎ、若やかな生氣を養はうといふ、半ば浪漫的な、併し、飽く迄も素朴な獨逸の青年運動はいゝと思つた。久しく書物や雜誌で讀んでゐた「渡り鳥」をチューリンゲンの森で見ることの出來た私の喜は決して一と通りではなかつた。

午前十一時に汽車はアイゼナハに着いた。私が初めて此の町を訪れたのは四月の春休である。イェナにライン教授の亡き跡を弔つた足で、私はこのアイゼナハにやつて來た。獨逸音樂の父の一

人と言つていゝあのバッハの生れたのは此の町である。宗教改革のルターが捕はれてゐたワルトブルグの古城も此の町にある。四月來たとき雪に埋れてゐた城山が今日は青葉に包まれてゐる。僅か月餘の間の急な北國の春の變化にも私は驚いた。私は併しシュワイナに急がなくてはならない。汽車の連絡は悪く、乘合自動車の出るのも遲い。私は自動車を雇つて、チューリンゲンの廣野往復六十基米突を走ることにした。驛前を出た私の自動車は町の中央にあるルターの大きな銅像の前を通つて、またゝく間に郊外に出た。郊外は一面森で、森は若葉に燃えてゐる。森のとぎれとぎれから、右手にワルドブルグの古城を眺めながら暫く行くと、道は梨や林檎や李の並木道、道の兩側は牧場と麥畑とである。いゝ初夏の景色である。

丁度正午に私はシュワイナに着いた。こゝは人口三千の田舍町。先づ幼稚園に行くと、すぐ隣りに續く教會の鐘は眞晝の時を報じた。フレーベルが生涯の記念に建てたこの幼稚園には保姆學校も附屬してゐる。その保姆學校の校長をケテー、ハインツェ(Käte Heintze)と言ふ。私はこのハインツェ夫人の案内で學園を一巡した。今日は土曜日で午後の授業はない。保姆學校には二十人の女生徒がゐる。如何にも丈夫さうな、赤い厚つぼつたい顔をした娘達は、井戸端で洗濯をしてゐたが、時々私の方をさも珍らしさうに盜み見た。ハインツェ夫人の話によれば、皆んな田舍の農家に生ひ立つた娘であるといふ。私はその娘達の書齋や寢室まで案内されて、夫人のこまゞゝな説明を、「成るほど、成るほど」と聞いた。幼稚園には六十名の園兒がゐるが今日は休みである。私はたゞ設備だけを見た。ハインツェ夫人は私の突然の訪問に對して、いさゝかもいやといふやうな氣配も見せず、食事さへ延ばして、部室々々を案内する。私は設備の行き屆いてゐるのと、すべてが教育的で、新しい心理學がよく應用してあるのとに驚いた。これはブランケンブルグの幼稚園と共にチューリンゲンの二つの最もよい幼稚園であるといふ。さもあらうと私は思つた。設備に關する詳しい説明にも拘はらず、精神に就て殆ど夫人の語らなかつたのをやゝ物足らなくは感じたが、私は夕方までにアイゼナハに引き返さなくてはならないので、夫人の案内でフレーベルの墓所に急いだ。

幼稚園を出て、町の北に續く岡山に登るとそこにはシュワイナの町の墓地がある。この墓地の中程の後方にあるのがフレーベルの墓である。恩物にかたどつた丈餘の墓碑は鐵柵を廻らし、可なり立派に營んである。銘に言ふ。

「いざや、我等を我等が兒童に生きしめよ。フリードリヒ、フレーベル、オーベルワイスバハに生れ、マリエンタールに死す。兒童と人間との此の偉大な友の爲に、感謝に滿ちて彼を思慕する

者相集りて之を建つ。」

墓碑の前に佇みながら、私は靜かに晩年における受難のフレーベルを想起せずには居られなかつた。彼がブランケンブルグに幼稚園を創めて幾許もなく、政府はフレーベルを社會主義者の一味と誤り、一千八百四十四年にはその幼稚園に閉鎖を命じた。彼が死の前年即ち一千八百五十一年には普魯西さへも幼稚園の禁止令を出すといふやうな事態になつて、此の豫言者は彼が畢生の事業と共に討死した。此の墓にはルイゼ夫人が合葬されてある。

「こゝに第二夫人ルイゼ、フレーベルが眠つてゐる。彼女はオスターオーデに生れてハンブルヒで死んだ。愛は決して終熄することがない。」

第一夫人のウイルヘルミネはフレーベルに先立つて一千八百三十九年に逝いた。フレーベルはシュワイナの地に最後の學園を營み、二十人足らずの女教師を養成した。その教へ子の一人にルイゼ夫人を見つけてフレーベルは再婚した。フレーベル亡き後の彼女は居をハンブルヒに移し、海を越えて遙ゝ亞米利加から訪れ來るフレーベルの使徒を引見して、夫の思想の世界的弘通にも貢献したといふ。そのルイゼ夫人の遺骸が、ハンブルヒからこんなチューリンゲンの田舍に運ばれて、愛する夫と合葬されてあるのも、ゆかしいと私は思つた。

墓所を辭した私は初夏には暑いシュワイナの街道を五六町南に下つて、フレーベルが此の地に營んだ學園跡を訪ねた。廣い庭園の眞ん中に立つ五十坪餘の二階建の建物は舊式ながら一見貴族の邸宅のやうな感じをおこさせる。今は私人の屋敷になつてゐる。「フリードリヒ、フレーベルは一千八百五十年五月此家に住み込み、一千八百五十二年六月二十一日同家に死す。」と壁間に記してあるを見付けて、これがあの偉大な教育家が不遇の晩年を終つた舊跡かと思つた。廻はれば四五町もあらう庭園には色々の草花も咲き、幾抱の大樹も青々と茂つてゐる。フレーベルが此家で教へた女教員の數は十四名から二十名の間であつた。人間の友であつて自然の友でもあつたフレーベルは、女生徒達をよくこの大樹の木かげに連れ出しては教へたといふ。さうして今も尙ほ當時の二人の教へ子がシュワイナの町に生きてゐて、一人は七十八歳、他の一人は八十二歳である。案内のハインツェ夫人は私に此二人の老婆の寫眞を見せた。一瞬間たりとも子供を忘れることの出來なかつたフレーベルは、女生徒を教へる傍ら、暇さへあれば界隈の子供を連れて來ては、此庭で遊んでやつたといふやうなゆかしい偉人の昔を追懷しながら、大きな樫の樹の下に腰をおろして、私はハインツェ夫人と話した。私は語るがまゝに夫人の話を次のやうに書き付けた。

一千九百二十七年にフレーベルの第七十五周忌といふものが此學園跡の庭園で擧げられた。そ

の時はシュプランガー教授も態々伯林から來て、幼稚園といふものに對する深い理解と同情との籠つたいゝ話をしてくれた。幼稚園に對する興味と熱との再興は早や十四五年來のことではあるが、別してこゝ五年來はチューリンゲンを通じて盛である。老フォルケルト教授やシュプランガー教授を始めとして、大學方面の人の同情は、文部省の教育官をしてゐる小學教師出身のデッペル氏の熱心と共に此の地に興つた幼稚園熱の動力であるとも言はれてゐる。

話は盡きない。二人は近くのマリエンタールの岡山に上つて四方の景色を打ち眺めた。シュワイナの町は岡と岡との間にある。岡を隔てゝ西から北へとレーン・ヴェラなどの連山が屏風のやうに並んでゐる。私はまたペスタロッチーのあのノイホーフを思ひ出した。マリエンタールの岡はえぞ松やぶなの茂つた森で、森の一角にフレーベルの碑が立つてゐる。恩物に因む六尺餘りの碑である。私はこの碑の廻りを二三度廻つて、岡山を降りた。降りると自動車が待つてゐる。案内のハインツェ夫人に厚く禮を述べ別れを告げて、私はマイニンゲン公の古城アルテンシュタインに疾驅した。古城はシュワイナの町外れの岡の上にある。マイニンゲン公と言へばフレーベルが自叙傳をさへ書き送つたほどフレーベルとは深い中である。私は午後の二時に此の古城に着いた。若葉に馨る古城の情景は何とも言へない。私はしばらくその景色に我を忘れた。城の出口に小綺麗なレストラントがある。私はそのレストラントに入り、カスタニアの樹下でフレーベルの靈を祝した。白いエプロンの田舍娘が給仕をする。微風樹間を渡ればカスタニアの淡い小さな花片(はなびら)が酒盃に散る。

稍〻醉心地の身を自動車に乘せ、朝來た道を再び私はアイゼナハの方へ引き返へす。ホテル、チンメルマンに着けば午後の五時。

九

五月二十六日、天氣晴朗。午前九時十六分の汽車で私はアイゼナハを立つた。シュタット、イルムの郊外グリースハイムにフレーベルが始めて人間の教育といふことを始めた、その遺跡を訪ねる日だ。ゴータ・アルンシュタットなどの驛を汽車の窓から見ながら、私は午前十一時十五分にシュタット、イルムに着いた。田舍びた小さな驛には勿論自動車もなければ馬車もない。不案内の道を獨りで行く外はないかと思つた。私は驛の出口に居た一人の田舍紳士にグリースハイムに行く道を尋ねた。彼は自分もその方向に行くのだから案内しようと言ふ。私は彼の好意を受けた。素朴なこの田舍紳士と話しながら、私は初夏の獨逸には稀な炎天を、汗を拭き拭きグリースハイムの方へ歩いた。約四十分で私は目的地に着いた。教會もあれば學校もあるが、人口僅かに三百五十

の小さな農村である。村の入口に私は早やフレーベルが始めて人間の教育といふものを試みた、その家を見付けた。家は二階建の粗末な造りで、往來に面して居る。銘に言ふ。

「フリードリヒ、フレーベル、こゝに獨逸教育に對する彼が事業を創めたり。一千九百十六年十一月十三日、第百年の日に此の銘を記す。」

フレーベルがこの寒村に彼が畢生の事業の端緒を開いたのは一千八百十六年のことである。當時のフレーベルは既に胸底深く、教育改革のことに生涯を捧げようといふ堅い信念を懷いてゐた。私は炎熱の道に立つて、當時の彼が心事を追懷した。人のよく知るやうにフレーベルがあの轉々として席も暖らない長い漂泊の生涯において、ふとその天職を見付けたのは一千八百五年、恰も彼が二十三歳の時である。當時まだ建築家を志して居た青年フレーベルは、知人の紹介でフランクフルトの師範學校長グルーナーに會つた。ペスタロッチーの門下生でもあつたこのグルーナーはフレーベルの心を見抜き、建築家たることのフレーベルに適せざることを指摘し、且つ勸めるに教育家たることを以てした。その勸めを兎も角容れたフレーベルはフランクフルトの師範學校で初めて教壇といふものに立つて見た。その時の體驗を述べてフレーベルは自叙傳の中に言つてゐる。

「それは恰も曾て余が知らなかつた、併し、絶えず憧憬れてなほも得ざりし或物を見付けたやうに思はれ、恰も余の生涯が遂にその本來の要素を發見したかのやうに思はれた。余は水中の魚、空飛ぶ鳥のやうに幸福であつた。」

在職三年その間彼は二度までペスタロッチーをイヴェルドンの學園に訪れて、人類教育改革のことに生涯を捧げようとの大望心も起し、且つ教育改革の手がかりも少からず會得することが出來た。既にさういふ心境にあつたフレーベルは一千八百十六年に兄クリスチャンの許に六歳と八歳の兒童を教育し、更に他の兄クリストフの遺兒をも加へて、同じ一千八百十六年にグリースハイムにさゝやかな寺小屋式の一學園を興したのである。この學園は僅か一年でカイルハウに移つた。けれども其後フレーベルが生涯を通じて、次から次へと展開した全教育事業の序曲として、私達はグリースハイムの此の學園を見逃がすわけには行かない。

炎熱の街路に立つて私が學園跡の舊い家を見廻はして居ると、五十ばかりの婦人がその家の玄關に出て來て、珍らしさうに私の顏を見た。無理もない。獨逸もチューリンゲンのこんな田舎の農村に日本人の來た例は今迄一度もなかつたらう。私は試みに家の由緒を尋ねた。婦人は何事も知らない。私は辛うじて此婦人が村の牧師の夫人であるといふこと、學園跡のこの舊き家は今は村

の牧師の住宅であるといふことだけを確かめた。夫人の側には年頃十六七の娘も立つてゐる。娘も家の由緒に就いては何事も知らない。父の牧師は聖靈降臨祭の休みで旅行中であるといふ。兎も角目的を果した私は近くの料亭に入つた。晝食を取らうと思つたが何もない。一杯のビールに渴を醫し、主人を捕へてフレーベルに就いての此地の由緒を尋ねて見るに、矢つ張り何事も知らない。主人は隣に物知りの老翁が住んでゐるから行つて聞けと言ふ。私は早速その老翁の門を叩いた。併しこの老翁もフレーベルに就いては何事も知らない。勿論私は此人達からフレーベルの遺跡に關する何か新な知識を得ようとしたのではなかつた。けれども問ふ人毎に何事も心得てゐないのに、私は言ひ知れぬ淋しさを感じた。國亡びて山河ありとは東洋の古い言葉であるが、今千古の教育家フレーベルの遺跡を訪ね、村人に會つて問へども誰れ一人知るものもない。偉人空しく逝いて僅にその家殘るのみかと私は長嘆息した。私が再び前の料亭に引き返して入口のベンチに腰をおろし、日記をつけてゐると、一人の少年が驅けて來て私に繪葉書を呉れた。見ると此村の教會や學校や牧師の住宅を一枚に收めた繪である。少年は牧師の子供である。私はポケットからチョコレートを出してその少年の好意を謝し、尙ほ名刺を托し、「若しお父さんが歸つたら、日本からこんな人がフレーベルの遺跡を訪ねてやつて來たと傳へておくれ。」と附け加へた。

料亭のベンチに休んでゐると、牧童に連れられた一群の綿羊は、燒けるやうな往來をヒイ〳〵うめきながら通つて行く。

シュワイナやグリースハイムの遺跡巡りを無事に濟ました私は午後四時三十五分再びブランケンブルグに歸つた。私の歸宅遲しと待ち佗びてゐたロルフス家の人達は、相變らずの親切で私をもてなしてくれる。私が歸ると間もなくフレーベル記念館から使が來た。「お約束の書物が差上げられる運びになつたから…。」此一言を聞いて私は踊り上つた。廣いチューリンゲンの森を東へ西への旅の疲れも忘れて、私は記念館へ急いだ。玄關のベルを力强く押せば、エリザベト孃は早や其處に居る。挨拶は拔きにして、私は厚く禮を述べた。彼女はフレーベルの「人間教育」初版一部を取り出して來て確かに私に渡した。天祐か？神意か？私は彼女の手を堅く握つた。

（一千九百二十九年五月二十九日ブランケンブルグの假寓にて）

グローブ筆「スタンツのペスタロッチー」を訪ねて

一

私がペスタロッチーの遺跡巡りをしたのは一千九百二十八年のことである。私は早や初秋の風さへ戰ぐ八月二十七日の午前十時十三分の汽車でライプチヒを立つた。エルフルト・ゴータ・フランクフルト・ハイデルベルヒ・フライブルヒなど、思出深い町々を縫つて走つた私の急行車は午後の九時三十分にバーゼルに着いた。

ペスタロッチーの遺跡を巡るものがバーゼルで見落してはならないものは、美術館にあるグローブの描いた「スタンツのペスタロッチー」である。私はベルンに開かれる國際農村教育會議といふものに祖國を代表して出席せねばならない關係上「スタンツのペスタロッチー」は遺跡巡りの歸路ゆる〳〵見ることに決めてバーゼルを立つた。然るに瑞西の各地を凡そ三週間ばかり巡つてチューリヒに着いた私は、チューリヒからミュンヘンに直行しなくてはならない事情になつた。私は決心した。まゝよ、どうせ獨逸國内旅行の足を延ばして、バーゼルを再び訪れる機會はいくらもあらうと。私はそこでチューリヒから、ミュンヘン・ウィーン・ブーダペスト・プラーグ等を旅行して、九月二十三日の晩にライプチヒに歸つた。机上には多くの郵便物が主人の歸宅を待ち詫びて居る。私は其の郵便物の中に小西先生からの一通の手紙を見付けた。手紙の中には一葉の端書も同封してある。私は先づその端書を手に取つた。『最近瑞西で出版された「畫集ペスタロッチーと其時代」によると、二十餘年の昔僕が神の御靈のやうに大事に大事に日本に携へ歸つたあの名畫「スタンツのペスタロッチー」の色刷が出來たらしい。さうしてその原畫の所在もバーゼルの美術館と明記してある。自然バーゼルへの行脚の機會もあらば、この色刷の複寫は最非買求めて送つて欲しい。畫家はグローブで、畫題は「スタンツのペスタロッチー」である。萊府の書店か繪畫店に賴んだら、或ひは取り寄せて呉れるかも知れない。』手紙の方は候文で書いてある。『今朝同封の葉書認め候につき其儘御送り申候。御芳書によれば瑞西へは既に趣かれ候由殘念千萬に存じ候へ共最早致方も無之候。就いては若し御地の書店又は繪畫店などにて勞を取り呉れる處あらば、御依賴下され度、それとも直接大兄からバーゼルの美術館宛書面にて紹介、色刷を賣り捌く店を御尋ね御取寄せ下されても宜敷候。色刷は一寸光澤も趣も有之、是非日本に一二枚は欲しきものに候。』先生が如何に色刷のペスタロッチーを所望されてゐるかは明かである。先生は此の手紙に附

記して『尙ほペスタロッチー在世中の全集コッタ版は此の間大學の方に買入れ候。世良君からは歸朝土産にペスタロッチーの「母の書」の初版一部を貰ひ、伯林の書店へラースベルグからはペスタロッチーの「余が生涯の運命」の初版を送らせ申候』と書いてある。私はバーゼル行を何時にしようかと、早やその日取りを考へるやうになつた。

既にして冬の學期は始まつた。大學の方へも週に三度は行かなくてはならない。折角特別の時間まで作つて、質問にも答へ、話相手にもなつてくれるリット教授の好意にも拘はらず、學校を休んでバーゼルに行くのも不本意である。而かも私は學校を休んでバーゼル行を決行しようとして、汽車の時間表まで繰つたことが二度三度であつた。斯くする間に十一月は過ぎて十二月になつた。私は決心した。いつそ、バーゼル行はクリスマスの休にしよう。基督降誕祭の休にペスタロッチーの由緒を尋ねるも却て興味があると私は心で微笑んだ。

二

其日は來た。私は十二月二十七日午前十時十三分の汽車でまたライプチヒを立つた。夜來の雨は全く晴れて冬の太陽は軟かい光を野原や畠に投げてゐる。暖爐を圍み、冬眠の書齋に閉ぢ籠つて、心で冬枯の野山を想像してゐた私は、もう三四寸も延びた麥が野良一面に青々としてゐるのに驚いた。自然は休息することを知らずに、斷えず新生する。汽車の窓から私の眺めた郊外の冬は、私が書齋で想像してゐたやうな、光澤のない、單調な、貧しさうな、醜く皺枯れた老婆のやうなものでは決してなかつた。冬枯の林を見ても、其處には早や處女に見る深い含羞と微笑とがある。舊い霜葉が疾くに落ち盡くした後の、茶色や褐色の細く若い枝の一つ一つには、新生の芽さへ見られて、そのみづ〳〵しい光澤のある若枝には冬の焰の情熱が流れてゐる。

携へて來た「イゼリン教育著作集」を開いて見たり、窓外の冬の景色を眺めたりしてゐる間に、私の汽車はエルフルト・フランクフルト・ダルムシュタットなどの町々を過ぎて、午後五時にハイデルベルヒに着いた。私はハイデルベルヒに一泊し、翌二十八日獨逸最古の大學や、ルイ十四世の厄に逢つた古城などを見て、午後五時十分の汽車でバーゼルに向つた。

バーゼルに着いたのは午後九時。ほんの形ばかりの稅關の檢査を濟ませて、私は自動車で雨のしよぼ降る夜の町をバーゼラーホーフといふ旅館に急いだ。途中ラインの橋を渡る。薄闇の中を音も立てずに流れるラインの流をちらと見た時、私はもう昔なじみにでも逢つたやうな懷かしさを感じた。宿に着くと帳場には三十二三の如何にも瑞西の婦人らしい優しい女番頭が事務を取つてゐる。私はその女番頭の案内で部屋に入つた。「此夏も私は貴方の處を當てにして來たのに斷ら

れてしまつた。」と私が言へば、「それはお氣の毒さま、夏分は何時も滿員で……そのうち裏へ建增しをしますから。」と彼女は答へる。彼女の注意で女中は早速風呂を用意した。私はゆつくり浴びて床に着いた。

二十九日。昨夜の雨は息んだが快晴といふ程の天氣ではない。食堂に入る。珈琲が運ばれる。新鮮な國產のバタと牛乳の香。珈琲の入れ物よりは牛乳の入れ物の方が餘程大きい。瑞西では珈琲に牛乳を入れるのではなくて、牛乳に珈琲を入れるのである。クリスマスの餘韻は食堂に飾られた樹樅にも殘つてゐる。各食卓には聖書の中の句を記した小さなカードを結び付けた樅の小枝が配つてある。ペスタロッチーの遺跡を巡るに相應はしい風情であると私は喜んだ。

三

食事を濟まして私は宿を出た。グロープの筆になる「スタンツのペスタロッチー」が今は此市の美術博物館の所有であるとは一二の書物にも明記してある。私はその美術博物館を目指して、迷路のやうな曲りくねつた街路を尋ねて、漸くフライ町の美術博物館に着いた。ふと入口の注意書きを讀めば「繪畫の陳所は一千九百二十八年七月一日以來シュタインベルク町七番地の美術堂に移した」と記してある。多少の不滿にも拘はらず、私は所在の明瞭なのに勇氣を出して、前來た道を逆戻りして、その美術堂へ急いだ。稍々神經の尖つた私は、入口に複製品を賣つてゐる年增の女賣子に念を押した。「グロープの描いたスタンツのペスタロッチーはこの美術堂にあるでせう。」「そんなものは此處には無い」との冷かな答に私は驚き且つ怪しんだ。私は早くも「容易ならざる結果」の勃發を直覺した。ライプチヒからはる〴〵瑞西のバーゼルまで、特別急行列車でやつて來たのも、思へば一枚のこの畫を見るが目的である。それが無いと言はれては、私は身をラインの奔流に投じて、惡鬼になるの外はない。私は決意した。如何なる犧牲を拂つても、目的を達するまでは、ゆめこのバーゼルを退くまいと。

私は偶々傍に居合はせた美術館の老守衛を捕へて、グロープの筆になるペスタロッチーの名畫の複寫が全く不思議な因緣で、今から二十三年の昔遠い日本に渡來したといふこと、その複寫が更らに複寫されて、津々浦々まで行き渡り、今では日本の教育者にして其畫に就いて無知なるは一人もないといふこと、自分の觀察にして若し誤なしとすればペスタロッチーを畏敬し愛慕する情熱の强さにおいて、恐らく現代の日本は世界の何れの國に比しても劣るものではないといふこと、さういふ日本の一人の教育者が、假令今はライプチヒに假寓の身とは言へ、その一枚の繪を見るべく、態々こゝまでやつて來たのであるといふことを、或は恨むやうに、或は訴へるやうに、

或はまた哀を乞ふやうに語つた。私の一片の丹心は老守衛の胸を打つた。彼は言つた。「私は私の最善を盡くすであらう」と。守衛は私を引つ張るやうにして美術館から約三四丁のミュンスター廣場にある分室に連れて行つた。私達はこの分室の地下室に降りた。地下室は大きな物置きで、取り片付けられた幾百の繪畫は塵に埋もれてゐる。私は叫ばずには居られなかつた。「あのペスタロッチーの名畫がこんな地獄に投げ込まれてあるのか。」私の心を既に讀んでゐる守衛は靜かに答へた。「如何樣(いかヤウ)ペスタロッチーの畫ではあるが、いやそれゆゑに、餘りに觀念的(ウーイデアール)であつて、一般の者には興味がない。取り片付けた理由である」。腹立たしくなつた私は、「一體瑞西の國民は祖國が產んだあの偉人を塵芥の中に投げ込むことほど左樣に厚顏無恥なのか」と、罪も無い、さうして我が事のやうに私の爲に骨折つてくれる守衛に當つた。守衛は默々として部屋中を探がす。私も鼻の穴まで黑くして埃の中を探し廻る。すべては、併し、無益であつた。二人は分室を出て直ぐ隣りの事務室へ行つた。年增の女書記がゐる。名畫の所在に就いて語る守衛と女書記との會話は賴りなく聞こえる。私は守衛と一所に更らに近くの第二の物置を探がした。しかしそれも徒。今や失望そのものと言つていゝ私は守衛に伴はれて再び事務室に引ぎ上げた。私はやゝ興奮した調子で、女書記に言つた。「假令一目でもあの畫を見ない間は、私はライプチヒに歸るわけには行かない。美術館長でもよければバーゼル市長でもよい、助力を乞ふの外はない。住宅は何處か、知らせて欲しい。」恰も私のこの言葉に辟易したかのやうな書記と守衛とは、「では暫らく玆に……」と言つて、あはたゞしげに出て行つた。私はホードラーが描いた「落膽」といふ名畫の主人公のやうに、ぐつたりとして倒れるやうに傍のソーファに腰を下ろした。暫くすると二人は嬉々として戻つて來た。「見つけた！」といふ吉報を私は半信半疑で、守衛の後に付いて、最初私達が探がした地下室に行つた。其處にはグローブの筆になる「スタンツのペスタロッチー」がまざ〳〵と居る。物置の一番奥の暗いところに裏返しにしてあつたとは守衛の說明である。私は新大陸を發見したコロンブスの心で畫の前に立つた。私は餘りの嬉しさに默禱した。さうしてこれがわが小西先生に依つて日本に傳來したあの畫の原作かとつくづく眺めた。幅六尺に縱五尺といふ可成りの大作である。作者コンラド、グローブは一千八百二十七年に生れて一千九百四年に逝いた瑞西の畫家であるが、制作の地は獨逸のミュンヘン市で、日附は一千八百七十九年としてある。今から五十年前のものとは思はれないほどの光澤(つや)と新らしさとがある。やる瀨なき兒童愛の焰に燃えてゐるペスタロッチーの心は彼れの顏のみではなくて、四肢に五體に滲み出てゐる。「父ペスタロッチー」を取り捲く多くの孤兒が、如何に虐げられし憐れなものであるかも一目見てわかる。畫中の子供

が冠つた頭巾、穿いた靴には、加特力教徒の風俗までこまかく表はして、作者の用意の如何に周到なるかを示してゐる。

暫らく繪の前に立つた私は、スタンツにおける「神人」ペスタロッチーの生活をいろ〳〵と回想した。ペスタロッチーがスタンツの孤兒院の經營を創めたのは一千七百九十九年の一月のことで、ペスタロッチーは其時五十四歳であつた。當時戰の後をうけて、スタンツの町には路頭に迷ふ孤兒が少くなかつた。その孤兒を拾ひ集めて出來たのが彼れの孤兒院である。この孤兒院は重なる受難の爲めに短命にも其の年の六月は閉鎖せざるを得なかつた。それでペスタロッチーがこゝで働いたのは僅か五ケ月の短かい期間であつた。それにも拘はらず、彼れの人類愛教育愛の情熱がこの時ほど高潮に達したことは彼が八十餘年の長い生涯のうちにも無かつたのである。後に友人ゲスナーに宛てた書信の中でペスタロッチーは述べてゐる。「私達は共に泣き、共に笑つた。子供達は世界も忘れ、スタンツも忘れて、たゞ私と共に居り、私は子供達と共に居た。私達は互に食事を分けあつた。私には一人の家族もなく、友人もなく、婢僕もなく、たゞ子供達があつた。子供達の健康な時は共に談笑し、病氣の時は側を離れなかつた。何時も私は子供達の間に寢た。夜は最も遲く眠り、朝は最も早く起きた。私は子供達と共に祈り、子供達の眠り終るまで教へた。」

ペスタロッチーが教育者としての眞の自覺に入つたのは實にこの間のことである、

地下室を出た私は、再び隣の事務室に歸つた。名畫の行末を案じる私は、女書記に言つた。「瑞西の國民に興味がないといふので、今物置にあるあの畫は驅ては反古にされぬとも限らない。日本はそれを買はなくてはならない。」書記は少しうろたへながら答へた。「賣るわけには行かない。……四五年後には大きな陳列館も出來るであらう。そのとき再び世に出す筈である。」私は此畫がバーゼルの美術館に置くべきものではなくて、當然チューリヒのペスタロッチー記念館に藏むべきものであるといふこと、そのことをペスタロッチー記念館長ステッドバハー教授にも認めてやりたいといふことを書記に話した、書記は事務室の棚から「スタンツのペスタロッチー」の複製を取り出して見せた。さうしてそれが恰も私の求めなくてはならない色刷であつたことは少からず私を喜ばせた。見ればウィーンで複製してゐる。ペスタロッチー百年祭に此畫を借りて行つて、教育品展覽會に陳列したウィーン市教育會の複製である。私はその六枚を頒けて貰つた。原畫の色のよくも其儘出てゐる色刷は、祖國への何よりの土產であると思つて私は微笑した。

ライプチヒだより

一

クリスマスもあと二三日におし迫つたので、アウグスツスの廣場は人で押し分けられないやうな騷ぎだ。電車の線路で二分された廣場の西側には四五日前からクリスマスの市が立つて、男や女や年寄りや子供はお祝に無くてはならない品物を買ふのに忙がしい。前景氣をつけようといふのか、朝早くからやつて來て、露店の前で茹でたての腸詰を頬ばりながら、ビールを飲んでゐる赤い顏の若者なども少くない。お祝用の駄菓子を包ませてゐる老婆もあれば、風船玉を買つて貰つて喜ぶ子供もゐる。私もついつりこまれて、今日は研究室の歸りに市場をぶらつき、煎りたての燒栗を買つて立ち食ひをした。電車線路の東側の廣場にはクリスマスのお飾に無くてはならない樅の市で俄かに林が出來た。その林の中をあちこち歩るきながら、枝振りのいゝのを探がしてゐたのは、確かに新婚後まだ間のない若夫婦にちがひない。

併し、もうクリスマスかと思へば、餘りに早く時の經つのに我れながら驚く。私がこのライプ

チヒに着いたのは、菩提樹や楓や櫟が漸く新芽をふきかけた四月の廿六日である。八ケ月は夢の間に過ぎた。私は長い西伯利亞の旅の垢を落す爲にエキセルシアといふ旅館に一泊したゞけで、伯林をば逃げるやうにして、ライプチヒにやつて來た。伯林は倫敦や巴里と同じやうに「個性なき町」である。人の心を引き付ける、床しい地方色といふものゝ極く稀薄な、國際的の都市である。その辯徒らにだゝつ廣くて却て要領を得ず、人の出這入りのみ繁くて、心に落付きを與へぬのは、凡そ斯の種の國際的の都市である。それでも就いて學ぶに足る碩學が外にないなら、息むを得ない。ところが少くともこの獨逸では、一代の碩學は却て多く地方に住み、伯林は功成り名遂げた老儒の隱退所といふ觀さへ無いでもない。フッサールにせよ、ハイデガーにせよ、リッケルトにせよ、カッシラーにせよ、リットにせよ、皆な田舍町に住むではないか。此夏逝いたシェーラーなどもケルンに若しくはフランクフルトに居た。尤も生活の中心を讀書に置かうとする私には、碩學が何處に居るかは唯一つの問題といふほどではない。

私は伯林ほど大きくなく、併し、マールブルヒやイェナほど少さくなく、而かも落付きある町を望んだ。折角獨逸までやつて來たのだから、よき音樂と歌劇とは是非聽きたいものだ。それには餘り田舍の小さな町は避けなくてはならない。讀書に飽きて外に出ても、足を運ぶに足るだ

けの美術館さへ無いやうな町もいやだ。その上落付いて本の讀める町であつて欲しいといふのである。それなら、音樂と歌劇と繪畫との施設ある靜かな町なら何處でもいゝといふのか。いゝえ、いゝえ。私が專門とする教育學の方面の成るべく立派な學者が居て、質問にも應じ、相談にも乘り、場合によつては指導もして欲しい。かういふ我儘極まる多くの註文は遂に私をしてこのライプチヒを選ばせた。

私は曾て一千九百二十一年の冬から翌二十二年の春にかけて暫らく獨逸に滯在した。あの時は仕事の都合で主として伯林に暮らしたが、それでもフォルケルトやリットにも是非會ひたいし、進歩したザクセン州の教育の實際も見たいといふので、私は小西先生と一所にライプチヒへもやつて來た。あの時小西先生はフォルケルト夫妻を「新劇場」の歌劇に招き、私は言はゞお相伴としてティーフランドを聽いた。そのティーフランドを、その「新劇場」で、二三日前に私は再び聽いた。私は六年前フォルケルト教授と一所に觀たときのことを想ひ起さずには居れなかつた。夜明けのビレニース山脈を背景として奏でるあの靜かな序曲に聽き入りながら、教授は輕く手足で調子を取つたりなどした。此歌劇の第二幕は、ペドロウとヌリーとのさゝやかな會話が、俄かにマルタの嫉妬心を唆るといふところに始まる。此の時のマルタの心は雪消えの庭に早くも若芽を用意してゐる北國の春にも似てゐる。ペドロウに對して今迄懷いて居た疑雲がすつかり晴れただけではなくて、早や遣る瀨なき戀慕の情さへうちに起つてゐるマルタの心は、我が妹のやうに愛して來たあのあどけなき少女ヌリーが僅かの言葉をペドロウと交はしたかどを以て、急轉直下闇魔の心に變じ、「ヌリー、わたしはお前を見るのもいやだ。あちらにお行き。」と突き出してしまふ。マルタの心に起つて來た戀慕の情を、ヌリーに對する嫉妬に讀ませるあたりは、此歌劇作者の力量と苦心の存する節で、何時觀ても私の興味を唆る個所の一つである。私がこんな感想の一端を教授と語り合つたのも六年前だ。短かい逗留にも拘はらず、私は幾度か教授をその私宅に訪れ、德高き人格にも接し、學術上の教も乞つた。ナトルプのペスタロッチー研究が稍々論理主義に偏してゐはせぬかといふやうな批評を教授から聞いたのも確かその時のことである。

私が初めてリットに會つたのも矢張り六年前だ。シュプランガーの後任としてボンの大學から轉じて間もないリットは、私達を教育學の研究室に案内し、貴重の圖書や雜誌などを指さしながら、色々と話してくれた。勞作教育に關する雜誌を取り出して、これは創刊以來廿五年になるとリットが言つたとき、私は學術上の一つの主義なり主張なりが眞に社會の力になるまでには、永年の雌伏と忍從とが必要であるといふことをしみ〴〵と感じた。「日本では此頃フッサールの現象學に

注意するものも少くない」と小西先生が話した時、「フッサールが早や日本へ行つてるのか」と言つて、驚いたリットの顔付きは、今も私の記憶に殘つてゐる。私は當時リットが公けにしてゐた「歴史と生活」とか「個人と社會」とかの外に、現代文化叢書の中に編み込まれてゐる「教育學」などを渉獵して、朧氣ながらもリットの學才の凡ならざるを知ることが出來た。さうしてこのことが私をして再遊の根城をこのライプチヒにトさせる一つの理由にもなつたのである。

二

ライプチヒは人口六十餘萬、京都より稍〻大きな町である。アウグスツスの廣場が町の眞ん中にあつて、此廣場の周圍に歌劇を專門に演ずる「新劇場」もあれば、大學もあり、美術館もあれば、フェルシェ・コルソオなどいふ一流のカフェーもある。ドレスデンやミュンヘンの美術館に比しては勿論此地の美術館は較べものにもならないだらう。それでも時代時代を語る一千餘點の傑作があり、ベックリンやツウィンガーの作では最も優れたものが此の美術館にある。あの有名な音樂家のバッハが三十年の久しい間働いてゐたトーマス教會はアウグスツスの廣場から僅か三四丁の近くにある。金曜の晩と土曜の午後と週に二回演奏するこの教會の「宗教樂」は市民の精神生活に缺くことの出來ない糧である。私は寧ろバッハを偲ぶよすがとして時々行つては聽いて見る。青年ゲーテが三年間入り浸つたといふアウエルバッハ酒場は、廣場からトーマス教會へ行く中程にある。ファウストに出て來る唯一つの酒場で、昔ながらに殘つてゐるあの煤けた多くの壁畫は、此の國の古い傳說や物語を描いたもので、それがファウストの材料となつてゐることは人のよく知るところである。ライプチヒの誇として忘れてならないものは、併し、何と言つても、ゲワントハウスの音樂だらう。獨逸は音樂の鄕土とさへ呼ばれてゐるが、その獨逸の音樂の名に價するものを聽かせてくれるは、このゲワントハウスである。音樂を聽く耳の幼稚な私は、尋常一年生としてよくこゝに來る。何かの先入主の爲でもあらうか、ベートーフェンを聽いても、ワグナーを聽いても、バッハを聽いても、私は獨逸の哲學を聽く思がしてならない。ゲーテやシルラーの作品を兎角綴りを變へた獨逸の哲學であるかのやうに讀む私には、獨逸の音樂も亦綴りを變へた獨逸の哲學として響いて來る。佛蘭西の音樂伊太利の音樂と言つても、勿論それを一概に論じ去ることは出來ないが、併し西歐南歐の音樂が人々の感覺的局所を纖細に刺戟するのに對して、少くも獨逸音樂の代表的のものは、感覺的ではなくて精神的であり、局部的ではなくて全體的である。尤もメンデルスゾーンの音樂などは輕ろく軟らかで、其れ故に嫌ふ一部の獨逸人もないではないが、併しその輕ろく軟らかなるにも拘はらず、依然として廣ろい精神の世界を展ろげて見せる。つい二三日

前にも私はゲワントハウスでメンデルスゾーンの交響樂第四番を聽いた。さうしてそこに一貫して私は「魂の逍遙」を感ずる外はなかつた。實際ゲワントハウスへ行つて獨逸の音樂に聽き入つてゐると、何かかう宇宙精神でも搖れ動いて來て、私達の魂の奥底の方へ喰ひ入つて來るやうな氣がしてならない。さういふときに私はよくヘーゲルの「世界精神」を聯想したり、ロゴスを思ひ出したりする。

ライプチヒの町は、併し、一面に於ては工業都市とも言はれてゐる。けれどもその工業の重なるものが圖書の出版といふ學藝に直接關係あるものであるといふことは、その工業都市にも拘はらず、私の心に一種の寛ろぎを與へる。六十餘萬の住民の三分の一以上が直接に若しくは間接に出版業で食つてゐるとさへ言はれてゐるではないか。出版國と呼ばれる獨逸の圖書の八割以上はライプチヒで出版する。日頃私達の親しんでゐる出版所の多くは何れもこのライプチヒにあるのである。レクラムの會社もインゼル町の私の宿の直ぐ隣りで、此夏は創業百年の盛んなお祝をした。美術出版で有名なゼーマン會社、教具の製作で有名なケーラー會社なども皆な私の宿の近くにある。世界的の古本屋と言へば、誰しもローレンツとフックとケーラーとを擧げるであらう。それがまた何れもこのライプチヒにある。ライプチヒに私の巣くつた一つの理由を私はこゝにも指摘する。讀書に飽きた午後の一二時間を私は日課のやうに、古本屋に費やす。ペスタロッチーの生前に出たコッタ版十三卷も僅か百五十馬克で背革の立派なのを私は手に入れた。ペスタロッチーのものでは此の外「リーンハルトとゲールトルート」、「探究」、「母の爲の書」など何れもその初版を見つけることが出來た。一千七百九十七年にシュネッペンタールの學園から出したザルツマンの「地上の天國」の初版なども私を喜ばせたものゝ一つである。つい二三日前公園をぶらついて家に歸つて見ると、机の上に書店エミール、グレーフェから配達された小さな紙包がある。開いて私は驚喜した。墨痕鮮かに一代の大教育家ザルツマンが自筆の一通の手紙が入れてあつた。エミール、グレーフェといふのは、私が時々用を命ずる大學町の古本屋で、ふとしたことで相識つたこの古本屋の主人は私の爲に言はゞ犧牲的に色々探してくれる。ザルツマンの手紙も亦この主人の心づくしの一つである。ライプチヒの町に對する私の親しみは、かうして日一日と深くなる。

三

私は大學の樣子も少しこゝに書きつけて見たい。自然科學の方では實驗物理學のデバイとか、理論物理學のハイゼンベルグとか、化學のハンチュとかいふやうな大家が居て、中でもハイゼンベルグは世界の物理學を指揮して立つてゐると言ふ。併し、私は專門外の畠に入るを避けなくては

ならない。私の專門に直接に若しくは間接に關係ある精神科學の方面では、哲學のドリーシュ、教育學のリット、心理學のクリューガーの三人が、この大學の輿望を負つてゐると言つても差支へはないであらう。此夏八十歳の祝賀をしたフォルケルト教授が夏の學期には「ソクラテスとプラトン」を、冬の學期には「ニーチェ哲學の敍述と批評」を講じてゐるといふことなどは、久しい以前から教授に親しみある日本の學界には興味あることかと私は思ふ。哲學のドリーシュは曾て日本に來たこともある一代の碩學でハその「新生命論 Neovitalismus」を聽かうとして各地から集まる學生達は、彼れの講堂に、演習室に、殺到して、全く立錐の餘地もない。私の直接就いて學んでゐるのは、併し、このドリーシュではなくて、教育學のリットである。

第十九世紀の中葉以來踵を繼いで起つた多くの學派、種々なる意味の對立關係に立つとも言ひ得るやうな多くの學派の間に立つて、今や「綜合への途」を切り開かうとして居るやうなのがリットである。私はいまリットの「現代哲學の主潮」を聽いてゐる。この大學で一番大きな第三十六番講堂も學生で溢れ、座席爭は怪我人を出すかとさへ氣遣はれる。彼れの著作がシュプランガーのそれなどいと違つて、甚しく難解であるといふことは、此地の人も一般に評してゐる。それにも拘はらず、話上手の彼れの講義は平明にして組織立ち、而かも得意の比喩と諧謔とが隨所に織り込まれて行くので、聽く者の喜は一通でない。十一月の初めに開講した「現代哲學の主潮」は、先づ實證主義の哲學を、次いで新カント派の哲學を說き、先週の火曜日には生命哲學の論に入り、ベルグソンの世界觀の敍述と批評とを終つて、それでクリスマスの休になつた。彼は生命哲學者としてのディルタイを如何に取扱ふであらうか。生命哲學と現象學との交渉を彼は如何に見るであらうか。此等の問題に關聯して、彼は自らの立場を如何に發展するであらうか。探究心の豐かな多くの學生達は、かうした期待をそれ〴〵胸に懷いて、二週間の休を家路へと辿つた。

リット教授の此冬の學期の演習は「ナトルプの教育學」で、「社會的教育學」をテッキストに使つてゐる。獨りライプチヒのリットのみに限られたことではない。カント哲學に出發しながら、少くともその晩年には深い生命哲學を把握してゐたやうな、あのナトルプを靜かに見直して行かうといふ傾向は他の大學にも見られ得る。聞けばハンブルヒの大學でもカッシラーは言ふまでもなく、ゲーラント・ノアクなど揃ひも揃つてナトルプの著作を演習に使つてゐると言ふ。何とはなしにゆかしい。遠く祖國の方を顧ると、凡てが「通り雨」のやうに、さつさと過ぎて行く。理想主義の教育學は既に逝いて文化教育學來り、文化教育學も早や逝いて、新たに現象學的教育學が訪れて來たと言ふ。種々なる客の來訪はそれ自身嬉しい。たゞ何等の足跡も遺さずに過ぎ行くあはれ

を思はずには居られない。勿論ナトルプを見直す多くの學徒が獨逸にあると言つて、私はナトルプに止まれと言ふのではない。發足點における彼れの論理主義と晩年に强調した彼れの生命哲學とは、それ自身相容れるを難しとするであらう。私達は、併し、その相容れるを難しとするものゝ統一を心私かに求めてゐたナトルプを見遁がしてはならない。たゞ時は彼が求めて未だ得ざるに、早くも彼を此世から奪つた。リットの如きはナトルプが求めて未だ得ざりしものを求めてゐるではなからうか。「古人の跡を求めず、古人の求めたところを求めよ」とは南山大師の遺訓だとか。我々はナトルプの單なる跡を求むべきではなくて、ナトルプが求めたものを求むべきではなからうか。現象學に行くもいゝ。辨證法に行くもいゝ。哲學的人間學に行くもいゝ。だゞその行く心こそ肝要である。

（一千九百二十八年十二月廿一日）

文化と地方都市

一

獨逸に來て誰しも氣付くことは、ひとり政治だけではなく一般に文化が深く地方に根ざしてゐることである。早い話が佛蘭西の觀光は巴里一市に盡きると言つてもいゝが、獨逸の觀光は決して伯林一市に盡きるものではない。否な伯林の如き十九世紀以來の言はゞ新開の都市は、よしそれが此の國最大の都市であり、現に中央政廳の所在地なるにも拘はらず、獨逸文化の本質的理解の上から決して重要な位置も占めるものとは言ふを得ない。學術なり文藝なり宗教なり產業なりの上から見た伯林の位置は殆ど言ふにも足りない。佛蘭西同樣日本の如く一國の文化が中央に集中してゐる國土に生れたものは、兎角伯林の文化が獨逸の文化を代表するかのやうに早呑み込みをするが、我々は伯林の文化なしに十分獨逸の文化を把握することが出來る。試みに問へ、伯林は獨逸文化を代表するに足る何物を所有してゐるかと。少しく獨逸の國情に通ずるものは、此問に答へて即座に否と言ふであらう。伯林の特色は凡そ大都市の特色たる感覺的享樂機關以外、特に取

り立てゝ言ふほどのものはない。だから眞に獨逸文化を解しようとするものは、努めて地方に旅行し、眞に獨逸の學術を研究しようとするものは笈を負ふて地方大學に遊ばなくてはならない。在留邦人にしても伯林に落ち付くものは少數の特殊研究者の外は多くは大都市特有の文化機關に關心を有つものであるだらう。試みに私は獨逸文化の代表としての哲學に就て此の事を考へたい。

伯林大學が現代の獨逸哲學に占める位置は決して高くはなく、之を學者において見れば、せいぐ〳〵のところ、シュプランガー一人を數へ得る程度のものである。伯林學派の名において呼ばれる少壯氣鋭のウェルトハイマー。ケーラーなどの形態心理學は確かに學界の尖端を行くものではあるが、漸く發展の首途に立つ學派であつて、「清新」の氣の掬すべきものはあつても、一大組織を成すまでには至らない。のみならずヴントの後繼者としてのライプチヒのクリューガーの如きは形態學派の先蹤を以て自ら任じ、その主情的な全體性心理學は、或意味において、早や伯林學派の及ばざる地點に進出してゐるとも言ふことが出來よう。さうしてそのクリューガーが最近獨逸哲學會を率ゐて活動しつゝあることも私はこゝに附記したい。心理學から哲學に還つて私は語らなくてはならない。第二十世紀の獨逸哲學をして世界的一覇業を營ませたものが新カント學派であることは今改めて言ふまでもないが、その新カント學派は西南學派にせよ、マールブルヒ學派にせよ、何れも片田舍の都市を根城としてゐた。コーエンとナトルプとを頭目として世界の哲學を指揮したマールブルヒの如きは人口二萬餘の見るからにあはれな田舍町ではないか。また西南學派の本壘ハイデルベルヒの如きも戲曲「アルト、ハイデルベルヒ」を通じて、若しくは獨逸最古の大學町として名こそ高けれ、不便な淋しい田舍町に過ぎない。曾てハイデルベルヒを訪れ、大學の門を叩き、リッカートの教室に入つたとき、その小さな部屋、低い天井、汚い机、まるで私が信州の田舍で三十餘年前に學んだ小學校そつくりの光景に私は驚いた。これが飛ぶ鳥を落したリッカートの講壇か、これが今も尙彼が新理想主義の哲學を說く講堂かと思つた。若し夫れ最近の世界哲學を支配する現象學派が根城とするフライブルヒに至つては、歷史的にも地理的にも何一つ人の心を引くものもない百姓町で、私はこれがフッサールやハイデガーの居城かと曾てしみ〴〵感じたこともある。ディルクイ學派の傳統を傳へるミッシュやノールのゲッティンゲンにしても名もない田舍の町である。さうしてこの地方都市をして、それぞれに世界哲學の發祥地たらしめるところに、獨逸文化學の若しくは獨逸民族の特色があるかと私は思ふ。「自由は獨逸の森から」といふ古諺に對して、私は今や「學術は獨逸の田舍から」を新たに加へなくてはならない。又必ずしも田舍町ではないにもせよ、オイケンのイェナも、カッシラーやウィリアム、シュテルンのハンブル

ヒもシェーラーやニコライ、ハルトマンのケルンも、フォルケルトやドリーシュやリットやクリュガーのライプチヒも、大凡權威ある學都はあげて地方都市であると言つていゝ。

ひとり學術だけではない、美術の如き兎角中央に集まり易い性質の文化においてさへ、此の國にあつては中心はすべて地方にある。伯林の美術館を見落しても人は後悔するには及ばないが、ドレスデンやミュンヘンの美術館を見ずには、人は獨逸の美術に就て語る資格がないであらう。ラファイエルのマドンナ一枚を見る爲に、遙々亞米利加からドレスデンに來るものさへあるではないか。産業に就いては私は語る資格のない者であるが、併し、伯林が獨逸産業の中心であるとは誰しも考へ得ないであらう。私は試みに今地方都市の中でも私に最も深い親しみあるこのライプチヒを語ることに依て、獨逸地方都市の文化的意義を明かにしたい。

二

ライプチヒは人口六十餘萬、伯林は勿論ハンブルヒやケルンよりも小さい一つの地方都市である。それでゐて全獨逸的な若しくは屢々世界的な特色あるものの幾つかを有つ。その世界的で思出すは「見本市(メッセ)」である。春秋二回世界各國の商人が見本市を開いて、取引きの契約をする。「見本市(メッセレヒツト)の町」とは驕てライプチヒを意味するほどライプチヒの見本市は聞えてゐる。見本市には日本商人の出品もある。今年の春の見本市には日本商品の取引が一番好成績であつたとは此の地の新聞も報じてゐた。全市見本市にうづもれ、各國の大商人がなだれこみ、民家はすべて宿所として市役所から徴發され、食料品は一時に二割も暴騰する。年二回のこの見本市の爲か、ライプチヒの停車場は英國のヴィクトリア停車場と共に歐羅巴最大の停車場で、プラットフォームの數は二十五の多きに上つてゐる。世界的は見本市と停車場とだけではなくて、毛皮製造と圖書出版とにおいても世界に知られてゐる。停車場附近に店を構へた毛皮商は歐羅巴だけではなく遠く亞米利の市場までも動かしてゐる。それにも增して著名なのは圖書の出版で、前にも述べたやうに全人口の三割は直接間接出版業で生きてゐると言ふ。成るほどレクラムも、トイブナーも、クェレ及マイヤーも皆な此の町にある。世界の古本屋として知れてゐる、ローレンツ・フォック・ケーラーなども皆なこのライプチヒの書店である。東洋圖書の出版を專門とするハラソウィッチは私も一二度尋ねて見たが、東京の丸善よりも大きいと思つた。美術の複製出版で名高いゼーマン會社も此の町にある。眞に世界の出版都市だ。此の出版都市が有つ、「印刷大學」と「獨逸圖書館」とも確かに世界的のものだらう。この印刷大學には今私の友人も一人留學してゐる。世界に類なき此の種の大學のこととて外國留學生の數が特別にも多い。「獨逸圖書館」は此の地の出版業者と市と州との

共同出費で一千九百十三年に出來た。その特色とするところは、一千九百十三年以後獨逸國内で活字になつたものは、田舍町の電車の切符まで、蒐集してあるといふ徹底的のものである。既に幾棟の五層樓を擁してゐるから、百年二百年の後には恐らく世界文化史上の一偉觀を呈するだらう。

「獨逸圖書館」で思出すはミュンヘンの「獨逸博物館」である。獨逸圖書館とか獨逸博物館とか言へば、人は誰でも主都伯林にあるべきものと思ふに拘はらず、何れもそれが地方にあるのが獨逸の國情である。ミュンヘンの「獨逸博物館」の見學に私は眩け足しで半日を費やした。ミュンヘンの誇りはビールと美術館「ピナコテー」とのみではなくて、この博物館である。たゞその規模の宏大の故ではなくて、陳列品の學術的に精選されてゐるのと、施設の一々が十分教育的なのとで、恐らくこれも世界第一と言つていゝだらう。その世界第一が伯林でなくて邊鄙なミュンヘンにあることなどが獨逸式だ。私は話をミュンヘンからライプチヒに還さなくてはならない。町の郊外に雲と聳える「戰勝記念碑」は那翁擊破の祖國の榮光として一千九百十三年の建立であるが、曾て私がサハラの沙漠に仰ぎ見たピラミッドを想起して「噫！現代のピラミッドよ！」と思はず叫んだやうな大記念碑である。ライプチヒにはまた獨逸に唯だ一つの大審院がある。これも國情の反映ではなからうか。此の地の大學が獨逸學術に如何なる位置を占めるかは今は略し、私は少しく「藝術鄕」としてのライプチヒに就いて記して見よう。

三

藝術鄕ライプチヒの誇として私は先づ此の地がリヒャード、ワグナーの生誕地であることをあげる。私の假寓してゐるこのレッシング町一番地から程遠からぬプロメナードの中にワグナーの記念碑が建つといふので、敷地は既に決めてある。ワグナーと言へば誰でも先づ歌劇を思ひ出す。歌劇を聽くことは——歌劇は見るものではなくて、聽くものである。音樂が主だからだ。それで獨逸語でも歌劇は必ずヘーレン(聽く)と言ふ——私が外遊の一つの主なる目的でさへあつたので、私は可なり根氣よく歌劇座「新劇場」に通つたものだ。今日も日記を繰れば、圖書費よりは歌劇の切符代の方が嵩んでゐる。私は「ワグナーの歌劇か、歌劇のワグナーか」とさへ言ひたいやうな、そのワグナーの歌劇を、彼が生誕のこのライプチヒの劇場で聽く幸福を喜んだ。フリーゲンデ、ホレンダー・ゲッターデンメルング・ローエングリン・マイスタージンガー・パーシファル・ラインゴルト・リエンチ・ジーグフリート・タンホイザー・ワルキューレなど、彼れが代表作は何れも今日廣く行はれてゐるが、私は矢張りフリーゲンデホレンダーとタンホイザーが一番好きだ。ラインゴルトは私には十分分らない。クリスマスの季節に演ずるパーシファルは二度の外遊を通じて唯だ一

度聽く機會を有ち得ただけではあるが、宗教的氣分を激動させることにおいて、私の知るあらゆる藝術中の第一である。謠曲隅田川などもその宗教的の點で似通ふ節もないではないが、結構の宏大なことにおいて、心を打つ力の强さにおいて、とても同日の論ではない。ビゼーのカルメン、グノーのマーガレット、セントザエンスのサムソンとダリラなど、皆それ〴〵の意味で面白くはあるが、總じてワグナーの作の如きは私にはない。

ワグナーのパーシファルで思ひ出すのは矢張りクリスマスの季節物のマテウス、パションである。去年の十二月末私は宿のフォン、ウェーデル夫人と一所にトーマス教會で此の宗教樂を聽いた。バッハは人の知るやうに、三十年の藝術的生涯をトーマス教會に捧げることに依て、獨逸音樂の一人の父となつたゞけではなくて、獨逸宗教音樂の最大の父ともなつた。そのバッハの名と共に何時も私の想起するものは實にこのマテウス、パションである。五時間の長きに亘るも、なほ幾ケ所かを省かなくてはならぬといふマテウス、パションはその組織の大きなことに於てもワグナーのパーシファルと並ぶべきものであるが、その聖感の强く豐かなことにおいても相並ぶべきものである。トーマス教會は此町で一番古くて大きな教會で、バッハは前にも言つたやうに、此教會に生涯の盛時三十年を送つて、彼が畢生の事業を完成した。バッハを思ふ心は私をして週に二回木曜の午後と金曜の晩とに此の教會を訪れ、聖樂モテッテを聽かせる。トーマス學校の生徒が歌ふこのモテッテは聖樂の本土獨逸でもこのトーマス教會を外にしては、斯く權威あるものを聽くことが出來ない。恐らくそれは世界における唯一つのさうして最大の宗教音樂と言つてよからう。バッハの歩んだ世界は、併し、決して狹く宗教音樂に限られたものではなくて、彼が多方面の天才は多くの樂器の改良さへもさせたといふ。そのバッハの作を奏でる技倆において今日有數のクライスラーを偶々「バッハのライプチヒ」で此の春聽くことの出來たのは、私に取つて何よりのいゝ思出だ。

其の日其の日のこと

一

ライプチヒに落付いて早や一年になる。自分はどんな行事に其の日其の日を過ごしてゐるのか。「僕は雜用を達しに西洋へ來てゐるのかと時々思ふ。」とは、矢張りこの町に在留してゐる友人T君の言葉だ。身のまはりのことは一から十まで家族のものにさせる習慣の日本から西洋へ來て、下宿住居でもすると、其の日其の日の行事の煩をつくづくと感ずる。記して後日の思出にしよう。

「時間に束縛されず逆に時間を束縛する」ことを心に掛けてゐる私には、朝何時に起きるといふ定めもない。けれども齡四十を超え五臟六腑の居据わりも折合つた爲か、私は大抵七時に起きる。部屋の戸口にそつと女中が運んである湯を取り入れ、寢卷のまゝで、髯を剃り、齒をすゝぎ、顏を洗ひ、服を着換へて、食堂に行けば、主婦のフォン、ウェーデル夫人は早や卓に着いてゐる。ミュンヘンから圖書館學の研究に來てゐるS嬢は講義が八時からあるので、何時も私よりは少し早く食堂に出るが、ニュルンベルグからこゝの音樂學校に來てゐるN嬢は授業が多くは午後なのと、そ

れに踊が好きで夜更かしをすることが多いので、私よりは遲く食堂に出る。何時も一番遲れて食堂に來るのは主人のフォン、ウェーデルだ。六十二歳の老人で、獨逸農會ライプチヒ支會長をしてゐて、毎日事務所に出る。ビスマークと親しかつたといふ某將軍を祖先とするだけあつて、フォン、ウェーデルにも何處となく獨逸古武士の俤があり、且つ親切で、優しくて、諧謔に富む。敎養あり、快活で、上品で、聰明なフォン、ウェーデル夫人は初めから終りまで食卓に侍つて、入り代り立ち代る四人の者のお相手をする。獨逸の朝食には普通ブローチェンといふ握拳の形をした小さな麵麭を用ゐる。女中は毎朝起き拔けに麵麭屋へ行つて、出來たての、そのブローチェンを仕入れて來る。日曜は麵麭屋が休むので、何處の家庭でも土曜に仕入れた蓄い麵麭を食ふ。その日曜の朝食の舊い堅い麵麭こそ私にはぞつとするほど不快なものの一つである。麵麭は一般に指でちぎるが作法であるが、この朝のブローチェンだけは眞ん中から二つに割り、切り口に厚くバタを塗る。私はそのブローチェン二個か二個半で足りる。飲物には稀には紅茶を選ぶ者もあるが、私は朝は珈琲を取る。こまかく注意の屆くウェーデル夫人がアルコールランプで冷やさずにおく熱い珈琲を私は三杯位やる。ジャムには種類が多いが、私は英吉利製のオレジのジャムの、あのほろ苦い香氣高きを好きなので、朝の食卓には何時もそれが用意してある。獨逸の朝食も日本のやうに一般に斯

く簡素である。朝食が濟み、食堂のソーファで、「ライプチヒ最新日報」に目を通して部屋に歸ると九時近い。朝の九時から午後の一時まで私は讀んだり、考へたり、書いたりする。飽きた時間を利用しては、郵便を出したり、買物をしたりして、所謂雜用を達す。午後一時には食堂の用意が出來、女中が知らせに來る。此の國は英國あたりと違つて、晝食が一日中の主食なので、主人も役所から歸り、下宿人も皆な一所に卓に着く。獨逸の主婦は大抵料理自慢で、よくもこんなに毎日變つた料理が出來るものと、私などは驚いてしまふ。スープの外に、肉・魚其他のものが二品出る。品數は少ないが、西洋の西洋料理は同じ一品でも量が日本の西洋料理の二三倍あるから、健啖の者でなくては食ひ過ぎになる。英米などゞ違つて、生まの果物の得難い此の國では、食後にコンポートと言つて砂糖煮にしてある果物が多く食膳に上る。たしなみある主婦はまた樣々の果物の液汁を作つておいて食膳に出すが、私の好きな飲みものゝ一つである。ビールを水と同一視するなど言はれる此の國でも、家庭の食卓には多くはビールが出ないやうに私は觀察した。併し食後の珈琲は普通出る。私の家では晝は必ずいゝモッカを出す。そのモッカの香をかぎながら五人は小一時間も話す。食後のこの小一時間は西洋事情を知ることを一つの目的として、この家庭に假寓してゐる私には收穫多い大事な、併し、趣味の時間である。獨逸及び獨逸人に就ての私の理解の一半は晝の食卓のこの一時間の收穫であるとさへも言ふことが出來る。教養の廣い主婦、諧謔に富む主人、音樂修業のN孃、圖書館學專攻のS孃、それに遠い日本から來てゐる一人の小學究、會話の主題は自在に選ばれる。文藝に、宗教に、哲學に、道德に、教育に、風俗習慣に、國際問題に、景氣不景氣に、結婚問題に、歌劇に、音樂に、活動寫眞に、踊りに、ヂャズに、汽車の衝突に、西藏探見に、共產黨の示威運動に。時には五人が平和論と主戰論とに分かれて、口角泡を飛ばすこともあれば、鰐魚の產地が問題になつて、マイヤーの百科辭典を棚からおろしてくることもある。男女の結婚に兩親の意志が加はることの可否の論は二日に亘り、私は國際代表の氣持ちで、日本の制度の美點を力說し、全獨逸代表を沈默させたことなどもある。

晝食を濟ました私は一旦自室に歸り、寢椅子にごろつとして新刊雜誌などをぱらぱらとめくり、間もなく散步に出る。「森の獨逸」といはれる此の國の町には町の大きさの幾倍もある大きな公園が二つ三つ郊外につらなり、その公園がまた巨木生ひ茂る森林につらなつてゐる。春夏秋冬それぞれに趣あるこの公園この森林をぶらつくことは、三度の食事にも增して私には缺くことの出來ないものになつてゐる。好きなヨハンナ公園アルバート公園などを步き、歸りにカフェーで午後の茶を飲んで家に着くと四時近い。四時から六時半まで私はまた仕事をする。仕事が濟んで夕

食。

獨逸の夕食は淡泊であつて、夜の勉強にも衛生にも世界で最もよき夕食の一つであるとは、凡そ世界を歴遊した誰れもが一致するところのやうに私は思ふ。輪切りにした厚さ二分位の白麵麭又は黒麵麭・バタ・燻製の魚類・ハム・鰯の罐詰・ゆで卵の輪切り・チーズなどを適宜に各自の皿に取り、砂糖も牛乳も入れない薄い紅茶で用を達す。茶の外にあつものが無いので、此の國の夕食は「冷食」と言はれる。少量で營養價の十分ある、あつさりした獨逸のこの冷食は精神勞働をする我々の如きものには眞に誂へ向きである。それでカントが出、ヘーゲルが生れて獨逸が哲學の郷土になつたとまでは言はないが、養分に乏しい消化に時間のかゝる食物を大きな胃袋と長い腸腑に一杯詰め込んで、二時間も唸つて居ては、假令菜食が長壽の秘訣であつても、思索文化は發展しないであらう。

二

夕食後週に二日は私は大學に行く。私はリットの「現代教育思潮」の特殊講義と「マックス、シェーラーの文化哲學」の演習とシェーネバウムの「ベスタロッチーの探究」の演習の三科だけ聽いてゐるが、リットの演習とシェーネバウムの演習とは何れも夕食後の二時間である。演習が濟むと私

は大抵カフェーコルソーかカフェーバウムに寄つて、音樂を聽き、疲れを休めて宿に歸つて行く。コルソーといふカフェーは大學に近く、アウグスツスの廣場に面した、市の目抜きの場所にある一流のカフェーで、音樂もよく、客筋も上品で、何となく氣持ちがいゝ。長い冬の夜寒むを蒸汽で溫めたコルソーの二階で、珈琲を啜りながら、輕るい短かな音樂を聽くことなどは、恐らく忘れ得ぬ私の生涯の思出にもならう。カフェーバウムといふのは獨逸でも舊いこのライプチヒの町で、而も一番古いカフェーで、建物から、間取り、家具に至るまで幾百年の昔を偲ぶに十分である。私がこのカフェーに親しみを有ち、時々知人や友人をさへ案内して行くやうになつたのは、たゞそれが此の町で最古のカフェーであるといふ單なる歴史的の興味だけではなくて、ロバート、シューマといふ獨逸音樂の開拓者にゆかりの深いカフェーであるからだ。その昔シューマンが來ては腰を掛けたといふ古びた椅子、壁間に掛けた彼れの肖像畫、それと並べた愛人で後夫人になつたクララ、ヴィークの肖像、乃至しげ〳〵此のカフェーに來てはシューマンと音樂を語つたといふあの有名なメンデルスゾーンの肖像畫などを見ながら、私はよくライプチヒ時代のシューマンが言はゞ叙情詩的の生涯の一節をそゞろに思ひ出す。

一千八百十年書籍商の子としてツウィカウに生れたシューマンは十八歳の時からこのライプチヒ

に來て、法律研究に從事した。音樂に天禀ある青年シューマンは何時しか此の町に住むピアノの大家フリードリヒ、ヴィークの門に出入りするやうになり、遂には法律の研究を捨てゝピアノの達人を志すやうになつた。彼がかくピアノの達人を志すに至つた有力な動機として、私はこゝに彼が師フリードリヒ、ヴィークの愛孃クララとシューマンとの間に芽生えた戀物語の一節を挿し挾まなくてはならない。シューマンが始めてヴィークの家でピアノを彈いた時、それに聽き入つてゐた令孃クララに「あなたも音樂がお好きで？」と尋ねたとき、クララが含羞の無言と赤らめた頰とに早くもやるせなき情感を彼が心臓の奥底に刻んだといふシューマンは、正に、始めてベアトリッチェを見たときのあのダンテの如きであつたであらう。其後父ヴィークとの關係はクララとの關係を深め行くばかりか、クララが父に似て有つ音樂の趣味と天才とはシューマンが有つ音樂の趣味と天才と共鳴し、斯くして法律より音樂への人生轉換はシューマンに於て容易く決行されたといふ。クララとの關係の深かまると共に愈々熱し行くシューマンが音樂修業は、併し、シューマンの健康を冒し「指頭痳痺症」をさへ發した。この「指頭痳痺症」は醫師の忠告と共に、シューマンが生涯のプログラムに再び一つの轉換を餘儀なくし、彼は意をピアノに斷つて、專ら作曲家を目指して新に運命の開拓に精進する外はなかつた。けれどもそれが却て彼を獨逸音樂の一人の父たらしめたといふのも神意に出たものではないであらうか。シューマンがクララと結婚したのは一千八百四十年の九月十三日とあるから、彼が三十歳の時である。爾來彼は作曲家として、就中獨逸歌謠の作曲に天分豐かなあの叙情詩的の深い情熱を放にした。彼と肝膽相照らした作曲家で、かねてライプチヒ「ゲワントハウス」のディリンゲント(樂長)メンデルスゾーンが始めてこのライプチヒに來たのは一千八百三十五年のことである。さうしてシューマンとクララとの間に熱し行く當時の情火を思へば、カフェーバウムに來ては語るこの二人の大藝術家の會話の主題も、恐らくは彼等が專門とする作曲のみではなかつたであらう。斯くてカフェーバウムに三人の肖像畫の並べてあるのも、當時のことを偲ぶに相應しい。

鐘の音と說教

國に居てはつい教會を覗いて見ようなどいふ氣の起らない私も、西洋に來てゐると不思議に教會に足が向く。鬚を剃り、顏を洗ひ、朝の珈琲を取つてゐると、方々の教會から鐘の音が響けて來る。日本の元日を思はせるやうな西洋の日曜の町に響き渡る鐘の音。この鐘の音のやうに私の心を引くものはない。西洋を忘れても私は此の日曜の鐘の音は、忘れることが出來ないであらう。

麗かな京の町に餘韻を長く漂はせるやうなあの智恩院の鐘は、今も懷かしい私の京都時代の思出である。「花の雲鐘は上野か淺草か。」東京の花時の、あの美くしく壯んな光景を偲ぶに十分ではないか。レオナルド、ダヴィンチは弟子達に、「あの鐘の音を聞け、聞くものゝ心々に響けて來るではないか」と言つたとか。併し、聞くものゝ心々に異なるだけではなく、東西によつて音の異なるも爭ひ難い。日本の方の鐘は音色が複雜で底が深く且つ餘韻が長い。それに比べると西洋の鐘は單純である。併しあの單純な音色には邪氣が少しもなく、心の淨い處女のしとやかさがあつて嬉しい。珈琲を啜りながらその鐘の音を聞いてゐると、信仰心もない私如き自由思想家にも教會

に行きたいやうな衝動が起る。私の行くのは昔はライプチヒの大學に附屬してゐた「パウリーナー教會」である。別に名僧智識の教を聽いて迷を去らうといふわけで行くのではない。併し、西洋の教會は私に取つて決して不快のものではない。第一建築が一大美術である。外觀だけではなくて、會堂の中も善美を盡くしたもので、日本の教會のやうな殺風景のものは何處にもない。旭日に照る裝飾窓はすが〳〵しい朝の心を愈々すが〳〵しくする。さういふ會堂でパイプオルガンに合せて讃歌を歌ふは何よりも嬉しい。

一體人は週に一度位は皆で一所に歌ふ機會がありたいものだ。獨逸の讃歌は英米のそれとは歌曲も歌詞も違つてゐる。音樂の本土としての獨逸の讃歌は、たゞその歌曲において英米のそれに優つてゐるだけではない。深い內觀的の精神を表はすに適切な良き多くの語彙を有する獨逸語は、讃歌の歌詞をも驚くべき有力なものにしてゐるやうだ。教會生活は眞に善き意味における藝術生活である。此の國では牧師の說教がまた洗練し切つた獨逸語で語られる。良き獨逸語を聽かうとするものは教會へ行け、とさへ此の國では言はれてゐる。獨逸國語の確立者としてルターを開山に有つ此の國の教會には寧ろ相應はしいことでもあらう。多少の說教口調もないではないが、それにしても我國の僧侶の說教に見るやうな不快な調子は少しもない。いや、牧師の說教そのもの

が既に立派な一個の藝術品なのだ。

たゞ併し、私の物足らなく思ふ一事は、――さうしてそれを私はこゝに特筆しようとするのであるが――牧師が教會において說く教が餘りに明かる過ぎるといふことだ。彼等の說くところには總じて人生の陰影といふものがない。徒らに光明のみであり過ぎる彼等の說教は私をして何時もその効果を疑はしめる。我々の生活は屢々暗黑にして、慘澹たる分子をさへ相當多量に含有してゐるではなからうか。少くも新生の扶助者を以て任すべき宗教家の說くところは、光明のみで綴られた錦繪の如きものであつてはならない。何故なれば我々が新生の道行には必然的に人生の暗黑面が隨伴してゐるから。餘りに光明ある言葉は寧ろ我々をして失望させるであらう。

繪にかいたやうな學校の修身教授と牧師の說教とは、現代において私の最も嫌惡する二大對象物である。（一千九百二十九年二月十九日）

獨逸精神の片影

一

今年の冬は近年稀れな寒氣で、ライプチヒの氣溫は攝氏零下三十度を示した。石炭も缺乏し、一家擧つて近くのカフェーで暖を取るものもあつたといふ。新聞を見れば頻りに燃料の「合理化」が叫ばれてゐる。この合理化は確かに獨逸精神の大事な一つの指標である。京都の朝永先生は曾て獨逸哲學を「理性の哲學」として說かれたこともある。獨逸哲學は理性の哲學たるところにその本領があらうが、凡そ哲學が獨逸文化の王者たるところに、人はまた此の民族を「理性の民族」として解することが出來るではなからうか。勿論獨逸民族も偉大な文學を有つ。けれどもその文學がまた例へばゲーテやシルラーにおいて容易に人は納得することが出來るやうに、哲學的の香が高い。さういふ風に哲學的であり理性的であるところに、私は此の民族の優れた一つの天分を見る。或る日宿の晝の食卓で私がそのことを言へば、主人のフォン、ヴェーデルは私の說に贊成し、私の廻はしてやつた料理の皿を受けるとき、もう腹一杯で食べられないと言ふ代りに、「そ

れは空間的に不可能である、Es ist räumlich unmöglich.」と、例の諧謔振りを發揮した。その後暫らく宿の食卓ではこの「空間的に不可能」が流行した。假令それが諧謔であるにもせよ、滿腹で食へないといふ意を「空間的に不可能」と言つて見たいやうなのが、此の獨逸民族ではないであらうか。だから隨分議論の多い國民で、此の間も獨逸銀行へ用達しに私の行つたとき、銀行の角の出會ひ頭で衝突した二人の自轉車人は私が用事を濟まして出て來るまで三四十分間も「おれは正しい、貴樣が惡るい」の口論を續けてゐた。併しこの議論好きが獨逸を哲學の王國にし、科學の王國にし、合理化の王國にしたのではないだらうか。

此の前獨逸に來た時のことである。私が伯林の下宿で初めて風呂の用意を命じた時、宿の女將に何度の風呂を湧かせばいゝかで私は困らせられた。その同じ伯林の下宿の金曜の茶の會に、骨牌の始まつた時、各自の前に消毒液を入れた小さな硝子の壺の並べられたのを見て、私は衛生思想の餘りにも鋭いのに驚いた。今度獨逸に來て、私がライプチヒのインゼル町に始めて下宿を取つたブレヒシュミット夫人の宅で、私は電燈の使用時間を記錄させられて困つたことがある。母子二人暮らしで、私の外に中央郵便局に勤める役人が一人下宿してゐる。月々の電燈料を決めるのに、標準がないから、最初の二ヶ月ばかり、時間を記錄して欲しいといふ夫人の注文である。

私も頗を恐れて、人並でいゝと一應は言つたものゝ、凡てを合理化せねば氣の濟まぬ獨逸氣質の權威の爲に、意を釀して快くその記錄の實驗を引き受けた。獨逸の學生などが下宿を決めるときの約束を聞けば、朝食ふ麵麭の大きさから、バタの純否までも條件にするといふ。萬事いゝから加減に片付ける日本人とは大分違ふ。道を尋ねても、五分で行けるとか、十五分かゝるとか答へるが常で、日本人のやうに一丁も十丁も同時に意味するやうな「直ぐ其處」は言はない。七月の學校などは氣溫何度になれば休業といふ風に、すべてが數理的に決まつてゐるから、日本の學校のやうに、夏服を何日から着せるかまで職員會議を開き、校長の「皆樣何か御意見は？」で、口角泡を飛ばすやうなことはない。

さて斯くすべてが合理的であつては、息もつまりはせぬかといふ懸念もあらう。けれども人の心にかげひなたあるは神の攝理であつて、理性の哲學の此の國の思想の歴史に神秘主義の流もあつたやうに、此の國民の普段の生活にも、人情を解する優しい心の閃きは、例へば麵麭のかけらを窓際に撒いて雀を喜ばせ、連日の積雪に野禽の餓死が新聞に報ぜられると、競つて、森に野原に餌を運んで、鳥や鳩を慰め、人をしてあの小鳥に説教をしたといふアッシジの聖者のゆかしい物語をさへ想ひ起させる。此の國の人達が亡き靈に仕へる心の濃やかさも有名なもので、獨逸の

盂蘭盆會（トーナンフェスト）の如く盛んな光景は、佛敎の本土としての日本などにも見られない。第一墓場そのものが何處の町でも公園と並べるほどの名所の一つで、家族本位の各家の墓場は面積も廣く、碑も美しく、草花は四季絶えることなく、白砂を敷いた墓碑の廻りにはペンキ塗の長椅子などが据ゑられ、亡き人の命日には家族の者はその椅子に腰をおろして、聖書などを繰る。三年喪に服すなどとその言葉のみ徒らに美しくて、墓場のこ汚（きた）ない日本などとは比較にならない。私は東京時代を多くは雜司ヶ谷に住まつて、好きな散歩をよくあの墓地にしたものだが、掃除は屆かず、塔婆は倒れるまゝに捨てゝあり、その上をなめくぢが這ひ、藪蚊は人足に驚いてがあんと騷ぐ。これをライプチヒの南墓地—私がよく日本人を案内しては日比谷の公園に比較して話すライプチヒの南墓地などに較べたら、正に天地の差があるだらう。

二

ライプチヒに着いた其の夜であつたか、私はかねて知人のシュパーマー夫人母子（おやこ）に案内されて、此の町で先づ一流食堂と言つていゝブルグケラーで夕食を食べた。其夜の私の印象は、食堂の一隅に陣取つて下品にさゞめく男女の一群の爲に可なり不快なものであつた。中年以上の夫婦らしい四組か五組のその男女の群は、大きな食堂に鳴り響くやうな高か聲で笑ひどうしであるだけではなく、デザートに入つての餘興の意味か、食器をおもちやにして、投げたり受けたり、手品の眞似をしたりする。敎養なきこの一群の食卓は見るものうしとしてゐた私の目にふと映じたのは、頰の赤黑く日燒けた太とぺつちようの五十女が出つ齒を白くむき出して、大きな鼻のてつぺんに嚙んで丸めた紙粒を乘せて、きやつきやと騷ぐ場面であつた。私達三人は顏見合はせて苦笑した。其の時私の胸に浮んだのは、八年前矢張り始めて英京倫敦に就いた其夜のグローヴナーホテルの食堂の光景であつた。巴里を午前の汽車で立ち、ドーヴァーを渡つて、倫敦のヴィクトリア停車場にあるスティションホテル、グローヴナーに私達の着いたのは午後八時に近かつた。食堂は午後九時閉鎖とのボーイの注意で、私達は洗面もそこ〳〵にして食堂に急いだ。照り輝くやうな、さうして千人も這入れるやうな立派な食堂には、流石に夕を樂しむ英國の紳士淑女の幾十組かゞ食事をしてゐる。それでゐて床に落ちるピンの音をも聞き取る靜けさ。相並ぶ卓にゐて他の卓の會話の一語さへ響けて來ぬほど、注意深いたしなみ。他に迷惑をかけるは、スープを吸ふ音、ナイフ・フォークの雜音さへも絶對に愼しむといふ英人氣質は、同じ西洋人ではあるが、獨逸人の氣質とは餘程違ふと私は思つた。獨逸人の血液の中には確かまだ曾て羅馬を破つた當時のゲルマン氣質がそのまゝ殘つてゐるではなからうか。さうだ。あの獨逸の學生が今に誇としてゐる

決闘(メンズール)などは、世界の何處の大學にも類を見ない。久しく見たいと思つてゐたその決闘を、私はラップ君の好意で此の夏見ることが出來た。

ラップ君はライプチヒ大學の研究科にゐる農學專攻の學生で、曾て日本にも暫らく留學し、ライプチヒの親日黨の頭目である。君はよく訪ねて來ては、日獨學生交換を目論まうではないか、伯林東京中心でなく、全獨逸と全日本との間に學生交換制度を設け、兩國文化の接觸融合を圖らうではないか、それには先づ近きよりで、ライプチヒと京都との間に實現しよう、さうだ獨逸には既に外國との學生交換制度が出來てゐるから、日本では京都の荒木總長かさなくば民間の佐多博士でも煩はして、早速着手しようではないか、といふやうな議を起したライプチヒ側の主唱者は實にこのラップ君である。自分の仕事に忙がしい私は言はゞ全くの受身で、このラップ君に叱られながら、後について行く格であつた。將來若し日獨學生交換のことが實現したら、私達はこのラップ君の功績を忘れてはなるまい。

私は話を決闘に戻す。ラップ君の案内で私達が町外れのあるレストラントに着いたのは午前十時であつた。食堂の椅子テーブルを片付けた廣間に入れば、早や血を洗つたり、繃帶を卷いたりしてゐる幾組かの學生が目につく。中央に凄愴な掛け聲をしてゐる一組は、こゝをせんどと猛り狂ふ闘士だ。顏は血潮のかたまりで目や鼻や口の所在(ありか)もあやしく、背を傳つてズボンの裾から流れ出る熱血は闘士の足元廣さ一坪を渦卷き流れてゐる。私達が着いて十五分ばかりして此一組の雌雄は決した。次ぎの一組が立ち合ふ直前、ラップ君は胸をそらして滿堂の學生に呼び掛けた。「ここに案内するは日本から來て、我がライプチヒに留學してゐる長田教授である。獨逸精神の研究に特に興味を懷くところから、我が獨逸學生の古來誇としてゐるこのメンズールを是非お目にかけ、御所感も承はり度く思つて今案内して來た。ものども尋常に勝負せい！。」これには私も辟易した。

メンズールは非文明の行爲であるといふので、警察でも表面禁じてゐるが、如何樣(どうか)獨逸魂を鍛える大事な國粹的風習とあつて、言はゞ公然の秘密で、かうして町外れの學生宿で、毎週のやうに行はれる。決闘と言つても怨の果たし合ひではなく、偏へに男性的諸德の涵養を目的とすることは、味方ながらも闘士の態度の卑怯未練を責め立てるのに徵しても明かである。全獨逸大學生間に古來發達してゐる、數多い倶樂部の行事のうちで、メンズールは最も大事の行事である。メンズールの回を重ねるに從ひ、倶樂部員として着ける肩章の筋も增すのである。大學の講堂に入ると必ず百人に一人か二人はまだ血生ま息い繃帶を捲いてゐる。

巴里のソルボンヌ大學を訪ね、英吉利の牛津や劍橋の大學をのぞき、また亞米利加のコロンビア大學やボストン大學に立ち寄つて、誰しも刻む印象は禮容つゝましやかな「文明の紳士」といふことである。獨逸の大學生はシルクハットを頂くやうな禮容ある紳士ではなくて、全く粗野な野武士である。さうして此の「粗野な野武士」が狹く獨逸の大學生の象徴ではなくて、全獨逸民族の象徴ではないであらうか。併し、この粗野な野武士は哲學と宗教と藝術とを胸底奥深く祕めてゐる。曾てはルターとカントとゲーテとベートーフェンとを産んだこともあるやうな、粗野な野武士の民族である。ルソーは曾て文明の中毒をしみ〴〵と感じて「自然に還れ」と敎へ、今はシュペングラーの如き一代の木鐸が、宛も「墮落」の著者ノルドーが神經衰弱の世紀末を叫んだやうに、「西洋文化の沒落」を叫んでゐる。けれども此等くさ〴〵の警告も、粗野な野武士の民族としての獨逸國民に對するものではなく、すべては主として西歐羅巴の諸國民に對する苦言ではないであらうか。學藝において依然として現代の世界を導くほどの內面の力を具へながら、「文明の野蠻人」と呼び得るほどの野性を帶びた獨逸國民こそ、「沙漠に放たれた野蠻人」ではなくて、ルソーが望んだ、「都會に住む眞の文化人」としてのエミールにも比すべき國民ではないであらうか。敎育の秘訣は文明の野蠻人を作るにありとまでは言はないにせよ、末梢神經のみ徒らに鋭い小悧口な人間を作るにこれ日も足らないやうな現代敎育を目のあたり見ては、人はルソーと共に「自然に還れ！」と叫びたくもある。さうしてルソーのその叫びに、正しくも相應ずるやうな獨逸國民の性格こそは、他山の石として我が祖國の敎育者に語り傳へる要はないであらうか。

神々しい粗野

シューベルトの百年祭が濟むかと思ふと、今度はレッシングの二百年祭がやつて來た。レッシングから私達は何を學ぶべきであらうか。彼れの著作における、若しくは彼れの思想そのものにおける、簡潔・明瞭・嚴密もさることながら、自己の所信を忌憚なく言ひ表はす勇氣とさうしてあの獨逸的の「神々しい粗野」とを學ぶことを私達は忘れてはならない。併し「神々しい粗野」とは何か。愚かなもの、拙きもの、醜きもの、卑きものに對しては、それが何人の口から出ようが、何人の筆にならうが、默することなく、その愚、その拙、その醜、その卑を指摘することの出來る虚心と率直との謂である。レッシングに見る「この神々しい粗野」は併し決してレッシングの私するものではなくて、それは同時にまたこの獨逸民族に共通の心である。ルターの宗教改革の如きもこの「神々しい粗野」なしにはあり得なかつたであらう。

私が聽講してゐるリット教授は先週及び先々週の二回都合四時間に亘つて、同僚ドリーシュ教授の「新生命論（ネオヴィタリズムス）」が哲學として到底成立し難き所以を、殆ど完膚なきまでに論評し盡した。リットとドリイシュとは共にライプチヒ大學を代表してゐるやうな學者であつて、その個人的關係は極めて美しいといふ。それにも拘はらず、リットが虚心に且又率直にドリーシュの立場を論評し盡したことなども、レッシングの「神々しい粗野」なしには出來ないわざであらう。さうしてリットの講筵に侍す五百の學生が多くは同時にドリーシュの講筵にも侍する學生であるのに、彼等もまた虚心に且又率直に、リットのドリーシュ攻撃を聽いてゐたことも私の心を打つた。私は自らに問つた。リットの如き態度に出ることは、我が日本の講壇に於ても出來るであらうかと。同じ學園にあつて、同僚の立場を公然壇上に批評し、且つその取るに足らざる所以を完膚なきまでに論じ盡すほど純朴な教授もないが、教授にして若し斯かる態度に出たとすれば、恐らく學生は教授の人格を疑ひ、同盟して辭職勸告をするかも知れない。教授もそれを恐れてか、「さはらぬ神に祟りなし」でやつて行く。併したゞそれだけではない。講壇において公然批評することを憚かるだけ、それだけ窃かに彼は他人の立場を嘲笑する。これはたゞ學徒の心理ではなくて、國民一般の心理ではないであらうか。日本人は決して單純ではない、素朴ではない。獨逸人に「神々しい粗野」があるとすれば、日本人には御殿女中式の複雜さがある。御殿女中式の複雜さのあるところには、眞理も來ず、美も亦訪れないであらう。私達はもつと單純にならなくてはならない、もつと素朴にな

らなくてはならない。

ボアンカレーは「學者と作家」の序言において、「余は學者の缺點を若干指摘しようと思ふ。……學者は全體としては余がその缺點を指摘しても怒りはしないが、近ける、己が同僚の誰れかに就て、特にその缺點を指摘でもしたら、必ず感情を害するだらう。」と述べてゐる。その心術のゆかしさを思はずには居られない。陽には適宜に和しながら、陰には非難に熱心な日本人氣質とボアンカレーが洩らす佛蘭人氣質とも丁度逆だ。萬葉の諸歌人などが寫してゐる私達の祖先の心の姿は、今日私達の見るやうな歪んだものではなくて、其處にはもつと素直な明るさがあつた。その素直な明るさが今見る如く歪みもすれば暗くもなつたことを思へば、儒教の形式的僞善と佛教の感傷的卑屈とが與へた影響も決して少くはないやうだ。

學藝の流行

男の旅行は倫敦から、女の流行は巴里から、とはよく聞く西洋の俚諺であるが、「學藝の流行は獨逸から」と私は言ひたい。親しく獨逸の學界に身を置いて、その流行のあはたゞしさをしみじみと感ずる。私はよく「モーデ」といふ言葉を持つて來て、そのあはたゞしい流行を考へることがある。リット教授が講義中、「とても新らしい(ガンツモデルン)」といふ形容詞を附けては「哲學的人間學」などに就て語るを時折り私は耳にする。眞に一瞬の停滯もなく流動する、此の國の學界の如きはないであらう。それゆゑにまた群雄割據は獨逸學界の顯著な特色であるかにも思はれる。一つには最高學府としての大學が二十有三の多きに登る爲でもあらうか。それに較べると最近の佛蘭西や英吉利や亞米利加の學界は居眠りでもしてゐるやうなものだ。獨逸ではこの流行が一面また學派といふものを生じ、學問を生動させる。恰も政界に黨派があるやうに、獨逸では各自その立つ立場を異にする學派の發達の顯著なことは人のよく知るところである。學派の對立が學術に生動性を與へ、學術の生動性が更らに學派の對立を鋭くする。斯くして獨逸は學問の王國たるを致すのであるが、

併し光あるところ自らまた陰影もなくはない。時めく學派に籍をおくものは亞流の徒もよく一代に盛名をはせ、然らざる者は優れた天分を懷きながら決して美しい日を見ることが出來ない。ライプチヒ大學の史學研究室などにも、我はランプレヒトの高弟なりと豪語しつゝ五十の坂を越えても一助手として不遇をかこつものもある。イェナ大學の教育學なども新カント派と社會派とヘルバルト派とが雜居して渦卷を卷き、ヘルバルト派の如きは見るも憐れな立場に居る。その事情を少しくこゝに書きつけて、私は此の國の學派爭の如何に露骨なものであるかを明かにしたい。

ブルーノー、バウフは人も知るやうに現代における新カント學派の一人の代表であつて、教育學の方では批判哲學に依る教育學の論理的基礎付けに貢獻してゐる。去年の春私はイェナを訪れ、そのバウフが頻りにカントを講述し、學位試驗其他の國家試驗で、カント哲學で受驗者を苦しめる模樣などを具さに聞いた。バウフの下にはヘルマン、ヨハンゼンがゐる。少壯學徒として一千九百二十五年には「教育のロゴス」及び「文化概念と教育科學」を書き、西南學派の立場から、教育學の組織と發展とに努めてゐる。ライン教授の墓參を主なる目的としてイェナを訪れた私は、端なくも大學の研究室にそのヨハンゼンに會ひ、一二時間の樂しい會話を有つことが出來た。後にそのことをリットに話せば、あれは「小バウフ Bauchchen」と綽名され、バウフ一味の徒としてカントの立場を支へるにこれ日も足らないと。この「小バウフ」が私を喜ばせた。併しイェナ大學の教育學の主任教授はペーター、ペーターセンである。主として此地の政治的事情から、社會的な立場に立つ自由教育學者としての彼をハンブルヒから呼んだのだと言ふ。バウフ一派とペーターセンとはその學派的立場において、假令對立とまでは行かないにせよ、融合し難き關係にあるは察するに難くない。而かもその間にあつてヘルバルト學派の殿將、獨逸教育學の「長老」ウィルヘルム、ライン教授は一千八百八十六年以來イェナに根城を構へてゐる。ライン教授の下にはライン教授の女婿ワイツが助教授で教育學を講じてゐる。ライン教授の亡き跡を弔ふ爲にカーライシェ町七番地の私宅をさして行つた私は、木戸崎で一人の紳士に會ひ、ライン教授の邸を尋ねると、「私はゲオルグ、ワイツと言ひ、ライン教授と同居してゐた近親のもの、家は直ぐ其處、遙々の御來訪と聞いては、用向はさておき、亡き跡の住居を案内申さう」との事で私をつれてゆく。幸福な私はワイツ教授の案内でライン先生の客間・居間・寢室・書齋を一々巡禮した。教育制度に關する絶筆の原稿の一部は文字通り墨跟淋漓のまゝで今尙ほ机の上に置かれてある。明日の講義の準備を濟まし、風呂に入り、暫らくして急死したとは、ワイツ教授が故人の臨終に就いて語つ

た哀話の一節である。

併しライン教授の晩年は學問的には決して幸福なものではなかつた。蓋しヘルバルト學派を擊つたものは決して新カント學派のナトルプ一人ではなかつた。シュプランガーを始め其後新たに興つた教育學徒は概ねヘルバルト學派を攻めたので、私がイェナで親しく聞き知つたところでも、ラインを中心とする此地のヘルバルト學派の殘黨は世にも慘めな境地に立ち、教をライン教授に受けたものは就職口が得られぬとのことであつた。雪消えの大地の上に花環といふは名のみの小さきものが唯だ一つ投げるやうに棄てゝあるライン教授の墓所に詣でた時、さうして獨逸教育學の「長老」の名のみ徒らに高く尊くして、葬儀に列する同僚學生の數僅かに十餘名に過ぎなかつたといふことを案内の墓守の口から聞いた時、私はそゞろに晴涙を禁ずることが出來なかつた。墓參を終へて歸路私は學派の競ひ起ることが此國の學術に光輝あらしめる他面、その光輝に伴ふ暗影の如何に痛ましきものであるかを樣々と考へた。マールブルヒ學派の一主將として、而かも教育學においては歴史を通じて第一人者と數へるに誰もが躊躇しないあのナトルプさへ、書き遺した一部の原稿は引受けて出さうといふ出版所がないといふではないか。總じて學派が物言ふ獨逸においては學派に屬せぬ、言はゞ超越的の立場を立つ者は、假令天禀において優れ、業績において顯著な者でも、埋木として世を終る例は少くない。フォルケルト教授の如きも或は此の部類に屬する實例の一人ではないであらうか。

第十九世紀の中葉以後における獨逸の學界にウイルヘルム、ヴントの像の如何に雄々しく聳えてゐたかは人のよく知る如くである。そのヴントに比して、天禀において學殖において誰かヨハネス、フォルケルトが劣ると言はうぞ。誠に第十九世紀中葉以後のライプチヒは全獨逸に誇るに足る、さうして互に相伯仲する二大碩學を擁してゐた。たゞヴントがあの盛名を恣にしたのに對して、フォルケルトの位置の著しく低きものゝあつたのは、主として、前者が時代を叱咤する實證主義の潮流に棹ざしたのに對して、後者は時代の外に獨り超然として立つた故であると見るのは果して僻目であらうか。あれだけの天禀と學殖とを有ちながら、兎角ヴントの陰に蓋はれ勝ちであつた主なる理由の一つは、恐らくフォルケルトが斷えず超學派的の立場に立つたところにある。そのフォルケルトがヴントの學的生涯に人知れず一大轉向を與へたといふ、言はゞ學界の一秘事を私は想起せずには居られない。

フォルケルト教授が「現代心理學の論爭問題」と題して心理學の方法が就中自己觀察に基づくべきを說くや、ヴント教授は二十年の久しきに亘つて用ひて來たあの實驗方法を放棄して、新たな

方法概念を採り入れた。蓋しヴント教授は人間心意の研究に精密な實驗方法の可能でもあれば、有效でもあることを信じて、自然科學的諸學の慣用手段を使用してゐたのであるが、フォルケルトの反實驗論に會つて、斷然前非を悔い、「心理學の概念に就て」の一篇を公けにして懺悔の意志を表明し、新生の一路を辿つた。フォルケルト教授を私宅に訪ねて、或る日私がそのことを言へば、「わしの如き小學究の論文がどうしてあの大ヴントを動かさうや。」と例の謙讓の間にも、會心の微笑を洩らして、早速書架から問題の舊稿をおろし來つて、私の前に繰り廣ろげるのであつた。

古書の香

ライプチヒは新刊書の出版で名高いだけではなくて、前にも述べたやうに古本王國としても著名である。ローレンツとかフォックとかケーラーとかいふやうな世界に名のある古本屋は皆なこのライプチヒにある。私を此の町に落付かせた理由の一つは、既にライプチヒだよりにも書きつけておいたやうに、此の町が世界の古本王國であるからだ。着獨以來私は讀書に飽きた時間を多くは公園の散歩と古本あさりに割り當てた。もう近く歸國の荷作りをしなくてはならないやうになつた私は、あさり得た重なる古書を書棚の一隅に集めて、一應それに目を通した。私は今其等の古書の香をかぎながら後日の爲に覺書を作つておかう。

一ルソー著エミール初版一千七百六十二年和蘭國アンステルダム出版

ルソーがエミールを書いたのは一千七百六十二年である。巴里出版とのみ思つてゐた私はそれがアンステルダムで發刊されてゐるのを初めて知つた。此の書は初版の出た翌、一千七百六十三年佛蘭西當局に依て燒き捨てられた。此初版こそ當時のことを偲ぶにいゝよすがである。

二ザルツマン著　我が子の惡德一名蟹の書、初版一千七百八十八年エルフルト出版。

此の書を私は書肆エミール、グレーフェの主人の特別の骨折りで手に入れた。表紙をあけた第一頁に例の蟹の繪がある。讀んだり聞いたりしただけで、曾て見たことのない、あの蟹の繪を、而かも初版の口繪に見付けた私の喜は尋常ではない。成るほど一疋の親蟹が三疋の子蟹をつれてゐる。「お前達はどうして皆んなそんなに横這ひなのか？　眞直ぐにお這ひ！」と親蟹が言へば、子蟹は口々に答へるのであつた。「では眞直ぐに這ひませう。だけどどしたら眞直ぐに這へるでしやうか？　お母さん！　どうぞ眞直ぐに這つて頂戴！　私達はお母さんを眞似るの外はありません。今迄さうであつたやうに、これからも。」何といふ暗示深い畫であることよ。

三ザルツマン自筆、書簡一通。

これもエミール、グレーフェの主人が骨折りの賜物だ。さうして全く意外の賜物だ。曾て手に入れたペスタロッチーとフレーベルの自筆の書簡と共にこれは私の國寶だ。フレーベルが筆蹟の美事なのに比して、ザルツマンの筆蹟が宛かもペスタロッチーのそれのやうに甚だしく拙ないのも面白い。

四フイヒテ著　獨逸國民に告ぐ、初版一千八百八年伯林出版。

教育立國を說く文獻の史上決して少なしとせざる間にあつて、フィヒテのこの「獨逸國民に告ぐ」は、ペスタロッチーの「リーンハルトとゲルトルート」並びにナトルプの「社會的理想主義」と共に、人類歷史における教育立國論三部作と私は思ふ。これはその初版で愛國の至情に燃える當年のフイヒテが舌端火を吐く慨を偲ぶに十分ではないか。

五ペスタロッチー著　ゲルトルートは如何にして其の子を敎ふるか、初版一千八百一年ベルン及びチューリヒ出版。

ノイホーフに始まつたペスタロッチーが教育の實驗研究がスタンに孤兒の敎育を試みるに及んで一段の進境に入つたことは、彼が「スタンの手紙」からも十分これを窺ふことが出來る。併し彼が敎育研究の黃金時代はブルグドルフである。ブルグドルフに學園を營んで彼は人間敎育のあらゆる秘訣を體驗自得した。「ゲルトルートは如何にして其の子を敎ふるか」は實にその體驗自得せる全秘訣の包括的な記錄である。此の書の著作に從事したといふ一棟の方丈は今もブルグドルフの古城の中腹に昔ながらの名殘を留めてゐる。去年夏ペスタロッチーの遺跡を巡つた私はブルグドルフを訪ね、その方丈に杖を曳いて、成る程こゝでペスタロッチーがあの不朽の名著を書いたのかと低徊去るに忍びかなつた。

六ペスタロッチー著　クリストフとエルゼ、初版一千七百八十二年チューリヒ及びデッサウ出版。

ペスタロッチーが「リンハルトとゲルトルート」を書いたのは一千七百八十一年のことである。この書は人も知るやうに洛陽の紙價を高からしめたゞけではなく、多くの識者の胸を打ち、フィヒテの如きは讀んで「夜もすがら眠れず」とさへ記してゐる。それだのに「懺悔懲」の人とリットを して評させたやうなペスタロッチー其人は、此の書を尙ほもあきたらずとなし、且つ此の書の中で彼が說き明かさうとしてゐる諸々の敎訓が戲曲としての此の書の形の故に兎角光を蔽はれ勝ちであつたを遺憾とし、その諸々の敎訓をクリストフとエルゼの端的な對話の間に語つてゐるのが此の書である。

七ペスタロッチー著　人類發展の自然の行路に就ての余が探究、初版一千七百九十七年チューリヒ出版。

此の書は一代の詩人ヘルダーをして「余は此の書において獨逸的哲學的天才の誕生を見る」と三嘆させた名著である。ブヘナウといふ新カント學派の敎育學者は此の書の思想を表はすに「社會哲學」を以てしたが私は寧ろ「文化哲學」を以てするであらう。何故なればペスタロッチーは此一卷の中で假令其の方法が例に依て所謂學的ではないにもせよ、社會國家のあらゆる事象の文化的意味を明かにするのを主要課題としてゐるから。恐らくそれは文化哲學の古典として史上稀なる著作の一つであるであらう。たゞ此の書がリヒタースウィールにペスタロッチーを訪れた哲學者フィヒテの勸めに依て書かれたといふ通說の今や支へるべくもないといふことを私はこゝに附記したい。蓋しペスタロッチーが物故百年の記念出版としてシュプランガーやシュテットバハーに依て新に企てられたペスタロッチー全集編纂の實地の事に當るドクトル、シューネバウムはチューリヒ博物館の古文書整理中ふとペスタロッチーが「探究」の試筆を發見したのである。この意外の發見に依てペスタロッチーはフィヒテとの會見以前既に「探究」の著作に從事してゐたことが立證された。ドクトル、シューネバウムは有名な史學者ランプレヒトの最後の門下生であつて、今ライプチヒ大學の史學の講師である。ペスタロッチー研究のことから私は彼と相識ることを得た。會々「探究」の試筆整理中の彼はペスタロッチーの例の拙く讀み惡くい、而かも百數十年前のちぎれ〳〵の原稿を一々補讀し活字にしてゐた。その活字を臺本にして彼はペスタロッチーの演習をしてゐた。私も此の演習には客分扱ながら最も熱心に出席した一人である。

八フレーベル著　人間敎育、初版一千八百二十六年カイルハウ出版。

私が此の書をブランケルブルグのフレーベル記念館で手に入れたことは「フレーベル遺跡巡り」

の中に出てゐる。私は此の書を私に惠んだ館主ロイトホイザー嬢に改めて感謝の意志を表したい。

九ペスタロッチー著　母の書　第一篇　初版一千八百三年チューリヒ及びベルン出版。

これは直觀主義に基づくペスタロッチーが創始の教授書である。彼れの直觀教授も一般教育史の說くところは、餘りに抽象的であつて、その眞相を解するに苦しむ節もなくはない。けれどもかうした著作を手にして見ると、流石に彼が苦心のほども思はれて興趣一入に深い。

十ペスタロッチー全集、コッタ版全十三冊一千八百十九年シュツットガルト及びチュービンゲン出版。

これはペスタロッチーの生前に出版された有名な全集である。私の知る限りでは京都の龍谷大學に一部、小西先生に一部、廣島文理科大學に一部ある。得ることの殆ど絶望とさへ思はれてゐたものが、僅か數年の間に斯く幾部も日本に傳來するに至つたことを、私は不思議とさへも思はずには居られない。

十一ヅガン著　ペスタロッチー傳、初版一千八百七十四年ローザンヌ出版。

親しくペスタロッチーに師事すること九年の長きに及んだ人の、師ペスタロッチーの傳記であるだけ特色に富む。數あるペスタロッチーの傳記のうちで、最も優れたもの〻一つである。人及び教育者としてのペスタロッチーを知らうとするものに私は何時もこの書を勸める。その英譯は教科書として數年に亘つて私なども使用した。ペスタロッチー百年祭に永野芳夫君の骨折りで東京の書肆モナスから邦譯が出た。今私の手に入れたのは原著佛蘭西語の初版である。私は此の書を手に入れた奇しき經路を附記して後日の思出にしたい。

一千九百二十八年十二月二十四日、それは宛もクリスマスの前夜であつた。差出人の名のない、英京倫敦投函の小包が私に屆いた。開けばヅガンのペスタロッチー傳の初版である。このサンタクローズの叔父さんは誰れかと、考へても考へても今に考へ付かない。恐らく私を知る人、私がペスタロッチーに興味を懷いてゐることを知る人が、矢張り古本あさりの夕まぐれ、ふと倫敦の書店で〻も見付けたものを送つてくれたのであらう。求めて久しく得られずにゐたものを、斯くして私は難なく得た。「積善の家に餘慶あり」とは我が東洋の古い言葉であるが、私は生れて四十有二年、まだ身に善行を積んだ覺えもない。不思議といふの外はない。併し私は誰れに向つて感謝していゝか。天に向つて感謝する外よしもない。

現象學と教育學

一

現象學は既に其の創始者フッサールがロゴス第一卷「嚴密科學としての哲學」の中で自ら言つてゐる樣に「第一哲學 philosophia prima」を以て自ら任じ、且つ唯一の嚴密な學として諸科學の基礎學たることを自己の本領とするのであるから、その意味に於て現象學が教育學に對する關係は從來の哲學一般が教育學に對する關係に較べて一層密接なものがなくてはならない。フッサール自身にあつては現象學と他の諸科學との關係、言ひ換へれば現象學が如何なる意味に於て他の諸科學の基礎學たり得るかの詳細なる詮議立ては未だ刊行されない「イデーン」第二卷の主要課題として豫約されてゐるのではあるが、併し彼及び彼れの學徒が既に世に問つてゐるところのものから、現象學が諸科學從つて教育學に對して如何なる交渉を有ち得るかの考察は今日既に可能であるといふだけではなくて、事實既に種々なる意味に於て目論まれてゐる。私の此一篇は現象學と教育學との間のあり得る種々な意味深き交渉のうち、現象學的方法が教育學的思惟に對して有ち得る交渉如何の探究である。

現象學的方法は如何なる種類の教育學的研究に對して效果的に適用さる可きであるか。元來教育學といふ名稱は必ずしも教育學的知識の統一的な範圍を總括するものではなくて、寧ろ教育上異質的な多くの部門に對する一種綜合的の名稱に過ぎない。たゞその各部門が常に教育學的對象に對するそれの關係の故に、教育學と呼ばれ得るのは勿論である。然るに自ら教育學と名乘るところの此等の諸部門は、現象學的方法に對して決して一樣の關係を有つものではない。故に現象學と教育學との關係を明かにしようとすれば、我々は先づ教育學の諸部門の中で何れの部門に對して現象學的方法が效果的に適用されるかといふことを吟味しなくてはならない。私の見るところでは對象の本質を直觀し、分析し、且つそれを記載することの可能な、さうして必要な教育學の部門に對して、現象學的方法は適用されなくてはならない。さうして其處に成り立つ部門は、「教育の現象學 Phänomenologie der Erziehung」或は「現象學的教育學 phänomenologische Pädagogik」或はまた「敍述的教育學 deskriptive pädagogik」と呼ばれていゝであらう。教育學の仕事は他の精神科學と同樣に、教育學的價値又は理念が依つて立つ基礎又は根據を論證する外に、就中先づ教育活動そのものが何であるかといふこと即ち教育活動の本質の探究といふことが必要である。さうしてこのことは基礎付けを本領とする教育學に先行することを必要とするだけでは

なくて、一般にあらゆる教育學的研究の焦點をなさなくてはならない。即ち如何なる教育學的研究もこゝに出立し若しくはこゝに歸着しなくてはならない。何故なれば教育學の仕事は何よりも先づ教育活動の本質を明かにすることを以て第一の任務としなくてはならないから。さうして直接この任務に當らうとするものが所謂第一哲學でもあれば、本質學でもあるところの現象學の方法ではなからうか。惟ふに現象學的方法が教育學に於て占むべき位置は、此處に卜されなくてはならない。この意味の任務を果す爲に、我々は教育學的體驗の事實から、若しくはその事實の分析から出立しなくてはならない。其處で對象其のものの分析が問題になつて來る。今この仕事を試みに美學に於ける最近の運動に較べて見れば、恰も十年の昔かのデソアが僅かにプログラムとして注意を喚起し、續いてウーティッツやガイガー等が心理學の上に立つ主觀主義の美學に對して、客觀主義の基礎に立つ現象學的美學を打ち建てようとしたのと同じ意味に於て、現象學的教育學の一體系が打ち建てられなくてはならない。

さて教育學者にとつては一般に教育活動・教育の事實若しくは教育の現象から出立するといふことが、常に必要である。けれども教育學者が關心の的は個々の教育活動や教育事實や教育現象ではなくて、實にそれの本質でなくてはならない。教育學者は他の理論人と等しく、個々の事實に興味を懷くものではなくて、ひとへに普遍的構成に興味を懷くものでなくてはならない。斯く教育學者の興味は教育學的價値の普遍的合法則性に對してではあるが、たゞその普遍的合法則性は教育の事實においてそれの土臺を見出すが如きたぐひのものでなくてはならない。併し我々は教育の事實を土臺とし、教育の事實を分析することから、果して要求せらるゝが如き普遍的合法則性を捕へることが出來るであらうか。「上から」の道を辿る教育學はそれが古い形而上學的立場に立つものにせよ、若しくは論理的演繹に基くものにせよ、教育の事實そのものに即せざる唯一最高の原理から總ての結果を得ようとするあの高踏的な態度の故に、我々が取敢ず求めなくてはならない教育活動そのものの本質を明かにすることが出來ない。我々の取敢ず求めるものは、教育活動の形而上學的若しくは論理的の基礎ではなくて、教育活動そのものの本質であり、やがて其れの形而上學的若しくは論理的の基礎をもそれ〴〵の理由で吟味もしなくてはならないであらうところの教育活動そのものの本質の何であるかといふことである。何故なれば本質不明なものの基礎如何を探究するといふことは、何人にとつても一般に無意味でもあればまた不可能でもあるから。

ユリウス、ワグナーは「現代教育學の科學的方法の諸傾向」の中で、現象學と教育學との關係

を說かうとして、先づ所謂哲學的教育學を批評し、カントに基く批判哲學の方法は曾てはナトルプに於て今は又ヨハンゼンに於て、教育學の科學的基礎付に適用され、ヨハンゼンの如きはカント哲學から「教育學的理性批判 Kritik der pädagogischen Vernunft」といふやうなものを導き出さうとしてゐるが、併しナトルプの教育學に於ける哲學的基礎付けのあの深さを以てしても、又ヨハンゼンの清新なあの教育學的價値論を以てしても、今尙本質的の地點に於ける教育學への眞の關係が缺けてゐると言つてゐる。又グルンワルトは「第二十世紀の教育學」の中で、新カント學徒は眞の教育學に對する何等密接の關係もない批判哲學を以て教育の哲學と解してゐるが、これは「教育の哲學」ではなくて「哲學的教育學」であると言つていいと言つて居る。グルンワルドによれば、哲學的教育學とは全く性質を異にする所の教育の哲學――それは事實、教育の現象學でなければならないのであるが、――其れが教育に對する關係は恰かも自然哲學が自然研究に對するが如く、若しくは歷史哲學が歷史研究に對するが如く、若しくは國家哲學が國家研究に對するが如くでなくてはならないといふのである。

さて所謂「上から」の道を辿る哲學的教育學が若し教育活動の本質を明かにする任に堪え得ないとするならば、上からではなくて、「下から」の道を辿る經驗的な歸納的な教育學はどうであらうか。教育活動の普遍的本質を多くの個々の場合、若くは到る所に見出さるゝ共通點の抽出によつて明かにしようとする教育學は、第十九世紀から二十世紀の初頭にかけて顯著な發達をした。併し本質とは共通點の謂であらうか。私の見るところでは本質とはそれ自身獨自な意味の統一性でなくてはならない。それが多くのものに共通してゐるか否かは本質そのものの概念にとつては何のかゝはりもない。だから私は共通なるが故に本質であるのではなくて、逆に本質なるが故に凡てに共通であると言ひたい。假りに讓つて多くの教育事實に共通するところの本質的なものを抽出する事が出來るとすれば、此の事實は實に先づ個々の教育活動に於ける普遍的なもの若くは本質的なものの把握の可能性の主張になつて來る。何故なれば若し個々の教育活動に於て本質的なものの把握が不可能であるとするならば、多くの個々の教育活動に於ても亦本質的なものの把握は不可能といはなくてはならないから。一つに於て不可能なことは多に於ても亦不可能ならざるを得ないのである。斯く考へて教育活動の本質の歸納的把握の可能といふことは、先づ以て個々の教育活動における本質把握の可能を前提するものと言ふ外はない。幾何學者は二つの相交る直線を引き、此等二つの直線が何れの角に於て交るかを例證して、二つの直線は常にある一點に於てのみ交るといふ命題を理解する。即ちこの幾何學者は個々の事例に於てユークリッドの空間に

於ける點と直線との關係の本質を捉へることが出來るのである。同樣に我々は個々の教育活動に於て直下に若しくは一擧に教育活動の普遍的本質を捉へる。即ち個々の教育活動は我々がその中に教育活動の本質を捉へるところの言はば象徴であつて、我々はこの象徴としての個々の教育活動を透視して、教育活動の本質を捉へるのである。現象學的方法の特色は此處にある。現象學的方法は普遍的合法則性をば唯一最高の原理から演繹的に獲得せず、さればといつて多くの個々の例證の集積から歸納的に獲得もせず、實に個々の例證に於て直下に、一擧に、普遍的本質或は普遍的合法則性を捉へるのである。惟ふに現象學的方法の特色とするところは、第一その方法が飽く迄も現象の下に留まり、現象そのものの探究を目的とすること、第二その方法は現象をばそれの偶然的な個別的な特殊的な制約性に於てでなく、實にそれの本質契機に於て把握しようとすること、第三その方法は演繹によつてでもなければまた歸納によつてでもなく、實に直觀によつて本質を把握せんとするところにある。

二

併し現象學的方法の適用に就ては、從來種々の異論が提出されてゐる。曾て世人はこの方法は概念を小喧しく喋々し、言葉の意味を確定する外、何事をも辨へず、その爲にこの方法は徒らに論理的なものの中に働き得るだけで、事態そのものには接近すべくもないといふ批難をした。彼のヴントはかくの如き非難の張本人の一人であつた。次いで起つた非難は直觀的な本質把握の方法は、凡そあり得る方法中で最も單純であり最も幼稚であるといふことである。即ち其處では該博な知識も、久しきに渡る研究の集積も無用である。特殊な一個の教育事實の中に、人はよく教育活動の本質を捉へることが出來るから、所謂研究の代りに直觀、知識の代りに直觀、證明の代りに又直觀といふことになると言ふのである。現象學が意味する直觀は、併しそのやうな無造作なものであらうか。勿論それは靈妙不可思議な何等神秘的のものではないが、對象に於て普遍的な本質を捉へる爲には先づ第一にその對象が正しき狀態に置かれなくてはならないし、第二に主觀は純粹直觀をなし得る爲に、豫め自らを正しき狀態に置かなくてはならない。對象をたゞ見つめるのみでは、何等の本質把握も可能でない。本質把握がその目的を達する爲には、その對象は嚴密に分析されなくてはならない。現象學的方法は複雜な對象を唯だ傍觀するのではなく、世にも嚴密な學的分析を意味する。從つて現象學的教育學に於ける教育活動の本質把握は、例へば幾何學者が二つの直線はたゞ一點に於てのみ交るといふ普遍的な命題を得る爲に、圖形を一目見ればいいといふが如き單純な無造作なものでは實はないのである。我々は教育活動を構成する本

質契機の何であるかの詮鑿を具體的な教育現象そのものに於ける嚴密な勞苦多き研究によつて、徐々に分析しなくてはならない。蓋し嚴密なる分析こそは、現象學的方法の本質的な契機である。各科の教授や學習や訓練に於けるそれ〴〵の本質契機を見出す爲に、我々は教授なり訓練なりの出來事を、思考上種々に變化しなくてはならない。「排除作用」「括弧付」若しくは「現象學的還元」等の言葉が意味する手續の用心深き過程は、現象學的方法の如何に嚴密な分析を意味するかを語つて餘りあるではないか。人のよく知るやうに現象學的直觀は自然的立場の根本的變更を必要の條件とするが故に、先づ自然狀態を排除したり、括弧に入れたりすることによつて、所謂「現象學的判斷中止」を行ひ、斯くすることによつて存在をば事實的にたゞ其處にあるものとしてゞはなくて、存在を存在として純粹に認めなくてはならない。即ち判斷中止によつて我々は初めて自然的立場から本質的な立場に移り、事實の世界に於て所謂本質化の作用を營まうとする。これが即ち現象學的還元作用である。又他面に於ては一定の教育活動の本質契機を純粹に捉へる爲には、他の場合に於ける同じ教育活動乃至他の種類の教育活動との比較も必要である。然らざれば人は一定の教育活動に於ける特殊的な偶然性を以て教育活動一般の本質と誤ることもあらうし、又教師なり兒童なりの單なる主觀的な特殊性から來る偶然的なものを、誤つて本質的なもの、普遍的なものと信ずることもあらう。斯く考へると現象學的本質直觀は對象に對して袖手傍觀するものではなくて、實は多種多樣な經驗乃至は其れから來る該博な知識も事實必要とすることになる。此處に於てかヨハネス、フォルケルトが現象學的方法に對して提出したるが如き抗議も亦決して理由なしとはしない。フォルケルトの言ふところによれば、現象學的方法は總てのそれの直觀を以てして、尙且つその本質認識といふものは歸納的性質を受理するものでなくてはならない。蓋し現象學的本質認識にも種々なる經驗が協働する。即ち多かれ少かれ明瞭に眼前に彷彿して、そのために研究者をして現前する體驗の中に、それの識別を可能ならしめる狀態に移すといふ確かな結果は、必然的にそれ等種々なる經驗から生じて來るのである。故に總べての直觀性を以てして尙且つ其處には歸納的な方法の存在してゐるといふ事が明らかではないか。

併しフォルケルトの此の抗議にも拘らず、私は現象學的方法の竟に所謂歸納法と混同すべからざるものであることを主張する。本質直觀にも主觀に於ける種々なる經驗の必要なことは正にフォルケルトの言ふが如くである。併し、この經驗が働く働き方は歸納法と現象學的方法との兩者に於て、著しく其の性質を異にする。即ち歸納法にあつては、經驗が認識作用の前景にあらはれて主役を演ずるのに對して、現象學的方法にあつては經驗は寧ろ認識作用の背景に奥深く祕め

られ、これに反し認識主觀の直觀が直接認識作用の前景に持來されなくてはならない。つまり現象學的方法にあつては、多樣な經驗から來る該博な知識は、本質直觀の豫備又は人格的な基礎として、間接的な若しくは消極的な役割を演じ、主役としての直觀が特殊な對象に於てそれの本質を一擧に把握するのである。本質の直觀に於ては、多樣な經驗や該博な知識は人格化されて間接的な豫備もしくは基礎をなすのであるから、斯くの如き認識に堪え得る主觀は平生十分の訓練を積むことを必要とする。だから「研究の代りに直觀、知識の代りに直觀、證明の代りに直觀」ではなくて、その直觀の可能な基礎として、言はゞ暗默の間に廣汎に渡る平生の體驗や研究が人格化されてゐることを必要とする。斯くの如き廣汎にして深遠な基礎ある主觀にして始めてよく對象に於て嚴密な分析を行ひ、それの本質をば他の總てから區別して正しく把握することが出來る。主觀にして若し對象の嚴密な分析と一切の他からの區別とを行ひ得るならば、本質直觀はさして困難なことではない。たゞ本質直觀の準備こそ長きに渡る訓練を必要とする。だから我々は現象學に於ける本質直觀を以て餘りに容易のことと考へてはならない。實際この直觀が遂行される過程を見ても、それは例へば東洋の思想が常とする非論理的な素朴な直觀とは著しく其の趣を異にするだけではなくて、これをかのディルタイ一派の生命哲學が意味するやうな全人的體驗といふが如き、方法的省察の乏しい認識過程に較べても著しくその趣を異にする。現象學に於ける本質直觀は、夫れ故に、人をして彼のスコラ哲學を想起せしめるに足る樣な、複雜にして嚴密な論理的認識的手續を必要とする。生命哲學は對象も方法も共に非合理的と考へてゐるが、併し、現象學はよし對象は非合理的であつても、これを捉へる方法は決して非合理的ではないと考へる。生命は非合理的であつても、その生命の本質を認識し且つその認識が妥當なものたる爲には、認識の方法は嚴密な方法的合理的のものでなくてはならない。現象學は幸にも對象の非合理性と方法の非合理性とを混同するが如き弊に陷る事を免れたのである。本質直觀とともに「現象學的分析」といふ言葉が現象學的方法の標語として併せ用ひられるのも決して偶然ではない。認識方法の嚴密な方法的論理的分析といふことに於て、少くとも現象學は生命哲學と著しくその立場を異にするのである。

我々は今、本質直觀といふことが一見するところ、特殊的な偶然的な個々の事象に於て無造作に出來るが如きにも拘らず、その根柢には主觀に於ける優れた天稟と久しきに渡る訓練とがなくてはならないといふことを、マックス、シェーラーが示した二二の實例に就いて考へて見たい。宮殿の奥深く居て浮世の空氣に少しも觸れなかつた若き佛陀は或日偶然門外に出て一人の病者と一人

の貧者と一人の死者とを見た。彼は此等三個の偶然の事實を單にそういふものとして見過すことなく、一擧にそれに於て世界の本質を把握した。デカルトが一片の蜜蠟に於て物體の本質と構造とを直觀したといふのもそれである。更に我々が數學に於て三個の事物から數としての三を分離し、これを獨自な對象と見、それ自身の法則に從つてこれを取扱ふが如きも本質直觀のよき例であらう。このやうに本質の直觀といふことは觀察の回數であるとか歸納的な推理であるとかいふやうなこととは全く無關係に行はれ、而かもその爲に唯一個の事例にて事足るのである。而かも本質直觀に依つて得られた認識はその本質を有するものに就ては普遍的に妥當する。即ち先驗的(アプリオリ)である。先驗的(アプリオリ)なる認識が斯くの如くに唯一個の事例に於ける直觀で可能であるにも拘らず、その直觀が營まれる過程は決して單純無造作といふわけには行かない。否、夫れ故に却つて困難であると言つた方が當つてゐるであらう。佛陀が戸外に於ける貧者・病者・死者の觀察において忽然として世界の本質を把握し、デカルトが一片の蜜蠟において物體の本質と構造とを直觀したといふのは、その佛陀なりデカルトなりにおける宗教的乃至科學的な優れた天禀に加ふるに久しきに渡る訓練を基礎としてゐる。林檎の落下をニュートンが見たのは偶然の一つの觀察ではあるが、而かもその刹那に萬有引力の法則を把捉したといふのは、確かに彼れの優れた科學的良心と久しきに渡る學究的精進とが必要であつたであらう。併し久しきに渡る學究的訓練といつてもそれは唯種々なる概念的な知識を他人若しくは歴史から傳授されるといふ意味ではなくて、就中自己活動といふものを積み、その自己活動の分析によつて本質を捉へるといふ意味の訓練でなくてはならない。既成の學說や先入觀念に迷はされず、只管現象そのものを土臺として、所謂一擧にそれの本質を捉へることこそ肝要である。人は種々なる學說に煩はされることなく、また無用の構成を敢てすることなく、たゞ其處に與へられるものの中に直觀せらるるもの即ち與へられたるものの本質を謙虛に若しくは忠實に捉へなくてはならない。それが現象學に許された唯一つの課題である。斯く考へて現象學的本質直觀は決して單純無造作なものではなくて、却つて久しきに渡る特有の訓練や勝れた天禀やを必要とするわけにある。この意味に於て現象學的方法は所謂理解的精神科學の方法よりも一層貴族的の性質を有する。現象學的方法のこの貴族的な性質は、確かにこの方法を廣く應用する上の一つの難點である。是に於てか新カント學徒等も屢〻現象學のこの天才的直觀を非難して、この方法は基礎付の手續を省かんが爲に、天才的直觀を持來すものであると言つてゐる。實際、方法が天才的直觀であつては廣くこれを應用することは出來ない。併しこの難點たるや普遍的本質の把握といふ、事柄そのものの性質から來る避くべからざる必然性であ

る。而かも利用の容易でないといふことは、その方法の妥當性に對する何の抗議でもない。我々の問はんとする所は第一に方法の妥當なりや否やといふことである。さうして若し方法にして妥當であるならば、それから生じて來る弊害の如きは寛恕するに吝かであつてはならないではないか。

三

以上說くところによつて我々が教育活動の本質把握に適用しようとする現象學的方法の何であるかは、大方明かになつた。教育思想の歷史に於て眞に妥當な教育本質觀に到達することの出來たものは恐らくは期せずして且つ又勿論自ら標榜することもなくして、何れも何等かの意味合に於て上に述べたる如き方法を適用したものと私は思ふ。少くとも我々は所謂演繹的な方法にも依らず、さればと言つて歸納的な方法にも依らず、よく自己の教育的體驗其のものの中に、而かも決して既成の學說に迷はされることもなく、一種獨異な教育學的天才に訴へて人間教育の普遍的なもの、若しくは本質的なものを把握し得た一人の代表としてペスタロッチーを擧げなくてはならない。

教育思想家としてのペスタロッチーを見れば、其處には總て自己自身の教育的體驗に立脚しつゝ、少しも他から與へらるゝ概念的先入主の支配を受けてゐないといふことが先づ氣付かれる。彼には彼れの教育的體驗と其の體驗に於ける本質直觀とを妨げようとする殆んど何等の先入觀念がなかつた。ペスタロッチーはたゞ教育家ではなくて、政治家であり、經濟家であり、社會改良家であり、宗教家であり、又詩人でさへもあつた。併し、彼にあつては其等種々なる文化人たることが、決して專門的な意味に於てではなかつた。彼が一定特殊の文化人ではなくて、言はば全體的な文化人であつて、而かも如何なる意味に於ても專門家でなかつたといふことは、あらゆる傳統、あらゆる先入觀念から彼を解放して、對象に於て直下にものゝ本質を把握することを可能ならしめたのである。彼は或はノイホーフに於て、或はスタンツに於て、或はブルグドルフに於て、或は又イヴェルドンに於て、生涯教育の實驗的研究に從事した。彼をして教育活動の本質を把握させたものは　すべて此等の實驗的研究であつたのであるが、彼は自己の經驗即ち教育活動そのものの中に即座にその本質を見た。彼は哲學から演繹して教育活動の本質を捉へるといふことを極度に恐れ愼しむと同時に、今日謂ふところの自然科學的な歸納的な方法によつて、多くの場合の中から共通點を拾ひ集めて教育活動の本質を捉へようともしなかつた。我子ヤコブの「育兒日記」にも明かなやうに、特殊な具體的な教育事實そのものの中に、本質的なもの、普遍的なものを捉へようとした。つまり所謂「上から」の道によつてでもなく、又「下から」の道によ

つてでもなく、具體的な教育活動そのものの本質直觀を成し遂げたのである。だからペスタロッチーの教育學は哲學的な教育學でもなく、又心理學的な教育學でもなくて、それ等の中間に位する一種獨自の教育學――それは現象學的教育學以外の何物でもないのであるが――であつたのである。この消息を傳へる彼自らの文字として、私はペスタロッチーがその思想の圓熟の境にある一千八百十八年の十月三十一日グリーヴズといふ一人の祕藏の門下生に宛てた手紙をこゝに引用するであらう。

「けれども經驗が私に肝銘してくれたものや、實際が私に確認させてくれたものゝ證明に、學問體系を參照するやうには、私は學んで居ない。曾て殆ど注意されたこともない眞理や、一般に知られてはゐるが、併し殆ど實現されてゐない原理に光を投ずることは、私が心ひそかに望んだやうに、私の使命であつた。併し、私は確かな哲學的概念の財産に依つて此課題を解くには力を缺いてゐたと告白する。私は、併し、豐かな經驗の蓄積にたより、また私の心臓の刺戟に導かれることが出來た。」

教育研究の方法を哲學的概念の財産に求めず、只管豐かな經驗の蓄積と心臓の刺戟とに求めたペスタロッチーの心は端的ながら、この手紙の中に窺はれる。ペスタロッチーの教育學を哲學的教育學と言ふものはない。けれども教育活動の本質の把握に「心臓の刺戟」にたよつた以上、假令經驗の蓄積を重んじたとは言へ、彼れの教育學を經驗論的教育學と言ふことも出來ない。換言すれば哲學的教育學も行詰り、心理學的教育學も行詰つて、今や新たに我々が求めなくてはならないところの、實にその教育學を、敢て自ら教育學者たることを標榜することもなく、ひそかに用意して置いた豫言者のやうなのがペスタロッチーである。言ふまでもなく、彼が教育學は決して世人が想像してゐるやうな容易の仕方で成し遂げられたものではなくて、世にも優れた教育學的天稟と苦難多き長年月の訓練とを土臺として初めて成し遂げられた體驗の教育學であつた。

四

以上說くところによつて現象學的方法による教育學が、上からの教育學と下からの教育學との中間に位置する一種獨異な教育學であるといふことが大體明かになつた。この教育學は事實の精細な觀察に價値を置き、且つ事實の非構成的な記述に關心するといふ限りに於て、所謂下からの教育學に結合する。たゞ共處に獲得されるものは經驗的な歸納的な教育學に見るが如き、偶然的な個々特殊の觀察內容ではなくて、個々特殊のものの中に實現され且つ見出されるところの普遍的な本質である。この普遍的本質を以て現象學的教育學は更に又上からの、即ち哲學的の教育

學に結合する。たゞ上からの教育學は一般にその得意とする唯一最高の原理をば、形而上學的の思辨若しくは演繹的の思惟で獲得し、その獲得したものを普遍化して先づ教育學の冒頭に据ゑ、決して事實其のものの本質に對する認識を手引としない。かるが故に上からの教育學は所謂體系欲に忙殺されて、出來るだけ早急に教育學を完結した體系にしようとする。其の爲に教育學的價値契機の多樣性と教育學的形態の多樣性とに對しては、自らその眼を蔽ふことになる。現象學的教育學も又必しも體系を斷念するものではないが、たゞ體系を冒頭に振翳して教育學上の多種多樣の具體的內容を壓了することを恐れ愼しむのである。現象學的教育學は先づ第一に個々の事實に關心する。價値契機とそれの主要な形態とは具體的な教育活動そのものの中に求められなくてはならないからである。現象學的教育學は教育活動の種類なり構造なりの種々相に從つて、それぞれの仕方で教育學的原理を示さうとする。これが獨自な特殊科學としての教育學の究極の課題であつて、特殊科學としての教育學はこれ以上進むことは出來ないし、またその必要もないのである。言ひ換へれば特殊科學としての教育學が以上の仕方で自ら獲得した原理の意味乃至由來如何といふが如き問題は哲學的分科としての教育學に移管さるべきである。さうして哲學的分科としてのこの教育學が特殊科學としての現象學に對する關係は恰も自然哲學が自然科學に對する關係の如きである。蓋し自然科學は外的自然の存在を假定してその法則を探究する。特殊科學としての現象學的教育學は教育學的價値の事實を假定し、その原理を探究する。自然哲學は外的自然をば或は實在論的に或は觀念論的に把握し、物自體の現象としてこれを把握するのであるが、かくの如きは自然科學の全然關知せざるところである。自然哲學に比すべき哲學的教育學は、恰もかのプラトンが價値を地上的なものに於ける超地上的なものの反映として考へたり、或はかのシェリングが價値を有限なものに於ける無限なものの表現として考へたり、或は又かのカントに見るが如く、價値の哲學的所在を確定せんとするが如きものである。現象學的教育學は斯くの如き哲學的の課題に對して究極の發言權を要求しようとするものではない。現象學的教育學の課題は、併し、哲學的教育學に對して一定の避くべからざる先決問題として、必要缺くことを得ないところの課題の解決にある。蓋し教育學の世界即ち教育學的價値と教育學的對象とは具體的な現象として現前してゐる。現象學的教育學はその現前するものをたゞ現象として共れの本質を明かにしようとするのである。

斯く考へて教育學の全體系に於ける現象學的方法の第一の課題は、特殊科學としての教育學の構成といふことにある。この特殊科學としての教育學に於て、恐らく現象學的方法は最も重要に

して效果多き領域を見出すであらう。自然科學に於けるが如く實在そのものが問題になつたり、或は數學に於けるが如く推理的に證明すべき依屬關係そのものが問題になつたりするとき、教育學も又現象學的方法以外に問題解決の手がかりを求めなくてはならないであらう。たゞ教育學は前にも述べたやうに、本質上先づ以て對象の現象的狀態が決定的であるところの一科學として構成されなくてはならない。さうして此處こそ現象學的方法が成し遂げ得るところの、また成し遂げなくてはならないところの領域なのである。以上は現象學的方法が教育學に於て如何なることを成し遂げたかの考察ではなくて、それが如何なることを成し遂げ得るかといふこと、即ち此の方法の志向に就ての考察である。併し、斯かる方法の適用によつて既に着手されをる種々なる新教育學の建設運動を我々は目擊する。私は他の機會において、やゝ詳細にそれの敍述と批評とを試みたい。

辨證法と教育學

一

教育活動は兒童における意識の、若しくは人格の辨證法的發展に對する助成作用であると私は思ふ。此一篇は、併し、教育活動の斯かる一般的考察を目的とするものではなくて、最近の教育哲學に對して辨證法が如何なる役割を演じ得るかに就いての考察である。現代の教育思想界を鳥瞰すれば、そこには過ぎし年所の暴風的な激動のうちに、對立をその極點まで押し進めた原理の幾對かゞ渾沌として喘いでゐる。訓練における自由と權威の對立のみではない。教授においては、兒童と教師、學習と教授、能動と受動、創造と模倣、作業と學習、形式と實質。數へ來れば限りもない。教授訓練における此等の實際上の對立も少しくこれを追求すれば、その背後にはリツトが「個人と社會」の中に指摘してゐるやうな、一層一般的な哲學的の對立が横はつてゐる。個人と社會、我と汝、普遍と特殊、意識と內容、意味と心意、生命と理念、自然と理性、感性と道德性、理念的客觀性と感性的客觀性、體驗と表現、素質と環境、形式と內容、生命の統一性と體驗

の多様性、プシヒェとロゴス。數へ來ればこれまた限りもない。此等種々なる對立を眞に克服する途を明かにする順序として、私は凡そ對立に對してあり得る態度の種々相から先づ私の探究の歩武を進めたい。

其一は對立するものを袖手傍觀して、一種の無抵抗主義に出ようとする。そこにはたゞ雜居があるのみで、何の統一もあり得ない。其二は對立するものに對して「甲か乙か」の選擇を加へる態度である。個人と社會との對立において、社會を捨てゝ個人を取るか、個人を捨てゝ社會を取るかの如きは一例である。斯かる素朴にして反省なき態度に就ては今改めて批評する必要もない。其三は「眞理は中間にあり」とでも言ふやうな立場から、對立する兩者の結合を算術的の手段に訴へて、折衷し、妥協し、混合し、緩和し、若しくは平均しようとするものである。これは古來通俗社會に最も勢力のあつた立場であるが、その結局二元論の上に立つを思へば、深く批評する必要もない。世にはまた自由と權威とか、個人と社會とか、普遍と特殊とか、感性と精神とか、能動と受動とかいふ種々な對立に對して、其等は互に相容れないものではなくて、相提携すべきであるとか、相關的であるとか、兄弟姉妹の如くであるとか、言ふが如き口吻を以て臨むものも少くない。その多くは一種の折衷であり、若しくは妥協でなくてはならない。假りに折衷でもなく妥協でもないとすれば、それは曖昧にして非科學的な俗說でしかあり得ない。何故なれば相提携するとか、互に關聯して恰も兄弟姉妹の如くであるとか言つても、その如何にして相提携するを得るか、如何にして關聯して兄弟姉妹の如くであり得るかの根據を明かにするのでなくては、斷じて學術的の解答とは言ふことが出來ないから。

史上に表はれた凡ゆる二元論的な立場を斥ぞけて、自ら謂ふ「徹底的一元論」の立場から、對立の克服を試みたのはナトルプである。今個人と社會との關係に關するナトルプの所說に依れば、二元論を豫想する從來の敎育學はすべて個人と社會とは互に働らきかけあふ二個の因子であると考へた。個人と社會とを二個の因子として先づ存在させ、然る後に此等兩者の間に共同作用ありとするが如きは、併し、ナトルプの立場ではない。彼にありては社會は個人以外の何物でもない。その完全な概念に從へば、社會とは個々人の社會に外ならない。社會は普通個々人の結合に存すと言はれるが、併し、その結合は結合に加はる個々人の——嚴密に言へば個々人の意識の——うちに存するもの。斯くして社會は個人の意識のうちにある外ありようもない。同時にさうしてまた逆に個々人は人間社會において、人間社會を通じてある外ありようもない。社會においてでない個人をナトルプは物理學者のアトムにも比すべき單なる抽象と見てゐる。個人と社會との二元論

だけではなく、凡て二元論は抽象上可能な區別を以て誤つて直ちに實在するものゝ區別とするところに生れる迷であるといふのが、ナトルプの主張である。斯くして彼は「個人と社會」の中に自己の立場を約說して次のやうに言つてゐる。「個人と社會とは排他的の對立を意味することもなければ、また二個の常に互に作用し、併し、此作用において互に制約しあふところの人生構成の成素を意味することもない。兩者は嚴密な相互關係において、密接に一致し、深化せる社會は同時に深化せる個人を意味し、さうしてその逆も亦眞であると考へらるべきものである。」

ナトルプの徹底的一元論の所說は明瞭である。併し、深化せる社會は同時に深化せる個人を意味し、逆に深化せる個人は同時に深化せる社會を意味するであらうか。人は道德なり宗敎なりにおける精進を以て、感性や煩惱から離脫することが出來るであらうか。精神生活とは感性なき、煩惱なき生活の謂であらうか。我々の精神生活が次第に進めば人は感性若しくは煩惱に就いて、それが「曾てありしもの——從て今は全く無きもの」として語る季節が來るであらうか。意識の妥當な法則性から出立して、精神の「矛盾なき統一」を主張し、個人と社會との無制約的一致を信ずるナトルプから見れば、凡ての對立や矛盾は「單なる心理的のもの」であり、若しくは實在の迷でしかないであらう。對立や矛盾は、併し、果して實在の迷であらうか。精神の統一と言つても、それは分離における統一ではなからうか。對立と矛盾とに基づく「內面的緊張」のない精神の統一といふものが、眞の精神の統一であるであらうか。此等の問に答へて、對立を眞に克服しようとするのが、此一篇の主題とする辨證法である。

二

既に說くところに依て、對立を克服し綜合を招來する途が備へなくてはならない條件は、早や或る度まで暗示されてゐるではなからうか。惟ふに對立する二つの眞理契機が共にそれ自身の存在の權利を認められて、獨特の意義と固有の力とを發揮し得るが如き綜合が我々の求める綜合でなくてはならない。それは反對なり矛盾なりが却て綜合に對する積極的の意義を有するやうな綜合である。斯かる綜合にあつては、對立する兩者は、反對や矛盾によつて互に他を驅り立て若しくは動機付け、それに依て綜合統一に對する强い內面的の基礎を與へるであらう。故に反對矛盾にも拘はらずではなくて、實に反對矛盾そのものゝ故に互に結合するといふ統一である。我々はこれを「機能的統一」と呼ぶことも出來る。然らば斯くの如き條件を備へた綜合は如何にして成立するであらうか。それは「止揚」と呼ばれる特殊の手續に依る外はない。「止揚」とは然らば何か。この問に答へる前に、この問に答へる一つの前提として、我々は先づ對立若しくは矛盾が如何に

して我々の求める綜合への積極的の條件であるかに就て述べなくてはならない。

物の生成發展は運動に依てのみ可能である。否運動の外には生成發展といふことは考へらるべくもない。然るにその運動は一般にたゞ差別において生起する。さうして差別の程度の進むところに對立の世界が表はれて來る。斯く考へて對立は生成發展に缺くことの出來ない條件になる。古代においてこのことを說き明かした思想家の代表として私はヘラクライトスを擧げたい。彼は先づ「萬物流る」と言ふ。流るとは生成發展を意味する。如何にして萬物は生成發展するか。それは萬物が互に反對し互に鬪爭することによる外はない。何故なれば戰なくんば一切は無差別平等の一者のうちに留つて、それが現にあるところのものたるを得ないから。斯くして彼は「戰は萬物の父であり、戰に依て萬物は生じて來る、戰は凡てに汎し。」などゝ言つてゐる。戰は彼にあつて萬物を支配する必然的な普遍的な法則である。ヘラクライトスの此の考は辨證法に缺くことの出來ない中核概念の一つである。辨證法の大成者ヘーゲルの思想において、人はヘラクライトスの此の考の顯著な影響を跡づけることが出來るであらう。

フィヒテがあの自我の哲學において、同じ思想を發展してゐることは人のよく知るところである。フィヒテに依れば自我の本質は實踐である。實踐の世界は、併し、如何にして構成されるであらうか。そこには先づ自我に對する抵抗を必要とする。何等の抵抗も何等の反對もないところに、實踐の世界が展開しよう術もない。然るに自我に對する抵抗若しくは反對は非我を待つて初めてあるを得る。斯の樣にしてフィヒテの自我は非我を定立する。自我は自らの內面的本質から斯く必然的に非我を定立するのである。

以上說くところに依て反對、矛盾若しくは鬪爭が物の生成發展に對して演ずる役割は明かになつた。併し、單なる反對、矛盾若しくは鬪爭を以てして果して萬物は生成發展するを得るであらうか。戰は萬物の父であると言ふ。戰は萬物が生成發展する大事な一つの條件であつても、凡ての條件とは言ふことが出來ない。是においてか我々は對立するものゝ「止揚」が意味するところを說いて、辨證法の本質を明かにしなくてはならない。止揚とは對立し、矛盾するものを一段高き次面に誘ひ、その高き次面において綜合若しくは統一することを意味する。低き次面において否定されたるものが、高き次面において新生すると言つていゝであらう。併し、このことを明かにする爲には我々は先づ止揚といふことの本來の、若しくはヘーゲルの意味する意味を叙べなくてはならない。

ヘーゲルは主としてその大論理學第一卷及び「エンチクロペディー」の中に止揚の意味を說いてゐる。止揚は先づ第一に物を廢棄し、取り捨てるといふ普通の意味の否定を意味する。ある法律なり、制度なり、規則なりを止揚するといふとき、其等を廢棄することを意味する如きはこれである。然るにこれと同時に止揚は保管若しくは貯藏することをも意味する。保管や貯藏は決して否定ではなくて、一定の事態のもとに物の肯定されることを意味する。同じ一語が斯く否定と背定との二つの意義を併せ有するところに、止揚本來の、若しくはヘーゲルが止揚の獨自の意味があるのである。さうしてその獨自の意味を明かにする爲、人は先づヘーゲルの否定の概念に通じなくてはならない。否定とはもと或物をそれに非ずとして排斥することである。ヘーゲルにあつても否定は斯の樣な普通の意味を決して否定することはない。彼にあつては、併し、否定は更らに一種特別の意味を有つ。この一種特別の意味如何に依てヘーゲルの全哲學の特色が明かになるとさへ人は言ふことが出來る。彼が謂ふ否定のその一種特別の意味とは何か。

普通、否定と言へば物がそれの存在を拒まれて、後に殘るものは單なる無でなくてはならない。ヘーゲルの否定には斯の樣な否定の普通の意味の消極的半面だけではなくて、更らにそれの積極的の方面がある。言換ればヘーゲルの否定はその半面において背定的の成果を有つてゐる。ヘーゲル哲學の、若しくはヘーゲルの辨證法の核心は此處に潛んでゐる。凡ての存在は自己自身のうちに自己を拒否する否定性を藏し、依て以て自己を否定し、その自己を否定することに依て、自らをばより高次の存在へと驅り上げる。この高次の存在は前の存在の否定たる限り、前の存在とは別物である。それにも拘はらずそれは先行の存在の否定でありながら、先行の存在の否定を媒介とすることに依て、本質的には實は自己の存在を保持し繼續し若しくは發展する。故に此時先行の存在は單に否定されたのではなくて、實は新なる成果として高次の存在の中に止揚されて發展してゐるのである。此意味を我々は最近の日本の教育社會に起つた所謂昇格運動において極く鮮かに觀察することが出來る。高等師範學校の昇格は一面高等師範學校の自己否定である。自己否定であつて、而かも本質的には高次の文理科大學のうちに自らを保管し、貯藏し、新生命を發揮する。辨證法的止揚とは斯の樣に消極的と積極的との兩意義を同時に含む獨自の概念である。

四

以上說くところに依て辨證法的止揚の意味は明かになつた。併し對立するものの斯く止揚される根據は何處にあるであらうか。この問に先づ答へたものは矢張り彼のヘラクライトスであつた。

彼が萬物の生成發展の由て來る所以を萬物の對立、矛盾若しくは鬪爭にありとしたことは前既に述べた。彼に依れば相爭ふものが並び存し、互に制約し、互に豫想することに依て、萬物の存在若しくは生命が可能であるとすれば、その互に對立して相爭ふ兩者は根本において一つでなくてはならない。今これを道德の世界に就て見ても、善と惡とはもと一體である。善は惡に依て、また惡に依てのみ自らの意義と價値、即ち自らの存在と生命とを獲得し、發揮する。彼はまた物は矛盾すればこそ結合もし、差別があればこそ調和もするのであると考へ、この眞理をば始と終との一致する一つの圓周を以て巧みにも象徵的に表はした。

併し對立し矛盾する兩者が何故に止揚されるかの、斯の樣な形而上學的根據を探るは、今私の問題ではない。實在の發展が對立する二極の止揚にあるといふのは、實在そのものゝ眞相である。それは本質直觀によつて把握さるべき、實在のあるがまゝの姿であり、最後的所與であると言つていゝ。我々個々人の意識や生命だけではなく、社會や歷史の凡てが決して勢力の反對も分裂もない相互的懸垂運動の如きものではなくて、實に對立において存立するといふのは、個人なり、社會なり、歷史なりの內面的本質である。辨證法は斯くして自我なり世界なりの充實に對する必然的の條件であつて、それなしには自我なり世界なりの充實は不可能である。然るにナトルプ一派や生命哲學の一派は對立や矛盾を實在發展の必然的な本質とは考へない。ナトルプは既にさきにも言つたやうに、事實存する凡ての對立や矛盾を「單なる心理學的のもの」と見る他面、「矛盾なき精神の統一」を信じ、個人と社會とにおいては、それの無制約的一致を信じた。生命哲學はまた存在の全體的統一の形而上學的確實性を人は自らのうちに所有するものと考へた。此の立場に立てば實在の分離は正しい道からの迷であり、從て戰なきところに生命の統一があり、生命の統一あるところに戰はない。斯く考へて生命哲學はナトルプの立場と同じく、統一と分離とは互に他を排斥するものと信じた。彼等は共に生命が統一と完全性とを保つところ、葛藤はその影を沒し、對立の支配するところ、精神の統一は必然的に失はれるものと考へた。これに對してリツトの如き辨證法的哲學者に依れば「精神的實在性の辨證法は分離における統一、統一における分離といふことの中に精神の本質的構造を見るのである。」斯くして辨證法に取つては對立や矛盾は精神法則の何等の迷でもなく、何等の錯誤でもなく、從つてそれは精神が要求する統一の何等の放棄でもなくて、却て精神そのものゝ必然的本質の表はれであり、精神そのものゝ自己發展の必然的形式に外ならない。つまり實在が本來斯くあるのであつて、それは斯くあるより外にありようがないのである。フィヒテが自我は自らの內面的本質から必然的に非我を定立すると言つたのは正當

である。故に私は辨證法的發展は實在の眞相そのものであり、それは實在の最後的所與であるとさきに言つたのである。

五

以上說くところに依て辨證法の何であるかの大要は明かになつた。斯かる辨證法は一面「ヘーゲル、ルネッサンス」の形を取つて現代に蘇つて來た。「現代の哲學における辨證法一千九百二十九年」の著者アルツール、リーベルト、「哲學の形式學、辨證法の理論一千九百二十三年」の著者ヨーナス、コーン、「文化哲學の基礎論」を「個人と社會一千九百二十六年第三版」といふ論題において綴つてゐる、テオドオル、リットの如きは、何れも現代における辨證法學徒の代表と言つていゝ。然るに哲學における最近のこの潮流は直ちに教育思潮に結合した。即ち「哲學の形式學、辨證法の理論」の著者ヨーナス、コーンは一千九百二十六年に「解放と束縛」といふ一書を交はして「教育の時事問題」の考察を試みた。此の一書の目的とするところは「教育は如何にして被教育者を同時に自然制約なもの及び自由なものとして瞑想するか、教育は如何にして被教育者を同時に道德的に束縛し且つ解放しようとするか、さうして凡ての教育の辨證法的な內面的運動は如何にして此等の對立から起つて來るか」を明かにするにある。

併し辨證法と現代教育思潮との關係を最も深く考へたものはリットである。彼は曾て私の問に答へて「余は辨證法的哲學者である」と言つた。彼は生命哲學者であり、精神科學的哲學者であり、現象學者であつて、而かも辨證法的哲學者である。曾てシュプランガーと共に生命哲學に身を起したリットは一旦シップランガーと共に精神科學的哲學者とはなつたが、如何にして精神科學の基礎を確立すべきかの彼が論理的認識論的關心は、彼を驅つて現象學におもむかせ、こゝにリットはシュプランガーと袂を別つたのであるが、精神科學の基礎を確立しようとする彼れの努力は今や再び彼を導いて、辨證法の世界に入らしめた。併し初め生命哲學者として身を起したリットがシュプランガーのやうに必ずしもディルタイに師事せずして、直接ジンメルの學風を承けたことを思へば、彼が辨證法的哲學者として今日あるは決して偶然ではないのである。主著「個人と社會」は彼が文化哲學の基礎論であつて、同時に彼が教育學の基礎論でもあるが、「個人と社會」の表題が早くも人をして彼れの立場の辨證法的なることを想起させるであらう。現象學が教育學に對する關係も彼は辨證法においてこれを見ようとする。「現代の哲學とその陶冶理想に對する影響」の中に我々はこの消息を明かにする。

リットに言はせると、現代の教育思潮は實證主義と理想主義との對立において、それの顯著な光景を呈してゐる。この對立の克服を企圖したものは生命哲學であつたが、此の哲學の本來主觀主義に傾くを思へば、對立の眞の克服は生命哲學の堪え得る課題ではあり得ない。何故なれば生命の非合理性と主觀性とを强調しようとする生命哲學は結局浪漫主義の立場に立つもの、それでは理想主義における理念若しくは客觀精神を公正に抱擁することが出來ないから。實際ディルタイやジンメルにおいて晩年「理念への轉向」若しくは「生命の先驗性」の閃いた事實は、生命哲學が主觀主義の哲學なることを證して餘りあるものではなからうか。恰も新カント學徒のナトルプやニコライ、ハルトマンやカッシーラーが「理念より生命へ」の推移を示したやうに、ディルタイやジンメルは逆に「生命より理念へ」の推移を示したのである。リットに依れば生命哲學における「生命より理念へ」の流と新カント哲學における「理念より生命へ」の流との合致するところ、其處に現象學は立つてゐる。リットのこの現象學觀は假令その觀察の支點に相違はあるにせよ、彼のエデュアルト、マイヤーが現象學觀と一脈の通ずるところがあると言つていゝ。マイヤーに言はせると、ウィンデルバンド等に見る「存在と當爲」の論は一種の二元論の上に立つ不徹底のもので、現象學派の努力はこの二元論の立場を克服して一義的解釋に達しようとするところにある。

「ウィンデルバンドにあつて、若しあらゆる價値が要求として、即ち存在以上の或るより價値あるものを指示する當爲として現はれるならば、この規範的なる價値觀の背後には、明かに一定の二元論が認められる。」とマイヤーは言つてゐる。

現象學は勿論そのまゝ辨證法と言ふことは出來ない。併しリットは實證主義と理想主義、若しくは心理主義と論理主義との辨證法的綜合の課題を現象學に最も相應はしきものと考へ、其處に効果多かるべき期待をかけてゐる。この意味を人はリットの「現代の哲學とその陶冶理想に對する影響」において明かに讀むことが出來る。辨證法的綜合の試はより具體的な教育教授の世界に現はれて、リットは人をしてヨーナス、コーンの「解放と束縛」を想起せしめるに足る「指導か放任か一千九百二十七年」といふ一書を表はしてゐる。併し辨證法が現代教育思潮に對する役割の如何に大なるかに就いての彼が見解を最も卒直に語るものは、彼が一千九百二十八年に公けにした「教育學の現狀」と題する一篇である。此一篇に依つて私は恰も現代における辨證法的教育學の代表たるかの觀を呈してゐるリットが映像を素描したい。

六

「理論と實際とにおける教育學の現狀が特色とするところは、過ぎし年所の暴風的な激動におい

て、對立をその極端まで發展した後、今や相爭ふ方向の凡ての眞理契機が各自の權利を得るやうな調停を開始するところにある」。これは「教育學の現狀」といふ一篇の冒頭の言葉である。リットに依れば今や開始されたこの調停運動は獨り「保守的」教育學と「進歩的」若しくは「革命的」教育學との間の對立だけではなくて、教育上の種々なる改革運動が、屢々氣付かずに自らに抱いてゐる對立をも調停して「保守的」教育學との統一も可能となる。リットは斯の樣な一般的な命題を以て、

第一　教育活動の本質如何の問題、

第二　教育の實現形式如何の問題、

第三　教案及び教法の意義如何の問題、

第四　教育學の基礎付けにおける科學の機能如何の問題、

第五　教育における個人と社會との意義如何の問題、

といふ五個の問題に對する辨證法的解答を與へてゐる。第一の教育活動の本質如何の問題に就いて、彼は先づ教育活動を以て兒童のうちに秘められた內面的可能性の發展と解し、且つその發展に對する、凡ての干涉を禁止すべきであるとする立場と、教育活動を以て兒童を通じて人類●國家若しくは社會の新形態の發展と解し、進んで兒童のうちではなくて、教育者のうちに生動する理想の實現と解する立場との綜合を企圖してゐる。即ちリットに依れば所謂「放任」及び「指導」といふ相對立する二個の極端な原理は教育の實際にあつては互に他の誤謬を匡して教育活動最後の標的へと進んで行く。蓋し如何なる教育者といへども若き世代を蠻野に交付し得ない以上、自らの積極的活動を斷念することは出來ない。若し自ら積極的活動の斷念を企圖するならば、彼が兒童に對する影響は事實斷絕する。これを兒童の側から見れば、彼等は折に觸れて自己の活動を修正補訂するものとしての教師を渴望する。けれどもまた他面において眞に良心あり、心術の優れた教師は自己の力からよりよき將來のプログラムを實現しようとするが如き僭越を放棄せずには居られぬことほど左樣に多種多樣の精神の內面的發展の諸傾向を幼きものにおいて見出すであらう。玆においてか、正しく良き教育は以上の兩面を自らのうちに統一するにある。「伸び行く者の獨特性に對する恭敬と義務心を以て事に當る自信と」此等兩面を統一するところに正しく良き教育は行はれる。今例を音樂教授に取るならば、人は凡てを「兒童から」引き出さず、併しまた決して教授の押し賣りに陷らず、よく兒童のうちに豫想されたる「素質」が、教師の媒によつて、音樂的創造の「客觀精神」並びに現代音樂精神と結合する時、其時初めて自己創造力への音樂教授も

可能である。

以上はリットが「教育學の現狀」の中に說く僅か一例にしか過ぎない。彼は斯の態度を以て獨り教育活動の本質如何の問題だけではなくて、教育の實現形式、教案及び教法の意義、教育學の基礎付け及び教育における個人と社會との意義の五つの問題に答へてゐる。リットが教育學說の叙述を直接目的とせざる私のこの一篇は、併し、現代教育に於ける理論と實際とに關する彼が辨證法的主張のこれ以上の叙述をやめる。私はたゞ事柄の意識的な基礎付けと科學的定式化とを缺くにも拘はらず、教育の理論と實際とに就ての辨證法的立場そのものは、既に早く近世教育史上に表はれてゐたと思ふ。私は今その代表としてシュライエルマッヘルとフレーベルとを擧げなくてはならない。

生活と理念、個人と社會との綜合統一に教育活動の本質を見ようとし、また教育學を以て存在科學と價値科學との中間を縫ふ獨自の一科學として考へたシュライエルマッヘルの立場は既に十分辨證法的であつたと言つていゝ。シェリングが同一哲學の影響多かりし彼のフレーベルが教育活動の本質論は近世教育史上における辨證法の最も典型的なものではないであらうか。教育の仕事は個別的な特殊的なものを一般的にし、一般的なものを個別的な特殊的なものにし、さうして此等兩者を實在の中に現はすことである。教育の仕事は外的なものを內的にし、內的なものを外的にし、さうして此等兩者を必然的統一へと止揚することである。教育の仕事は有限なものを無限にし、無限なものを有限にし、此等兩者を具體的な人間生活において統一することである。教育の仕事は神的なものを人間的なものゝ中に直觀し、また人間の本質を神において明かにし、且つ此等兩者を相互的に具體的な人間生活に表現することである。無限を有限の中に、永遠を時間の中に、天を地上に、神を人間の中に、人間を通じ、人間の生活の中に現はすことが教育活動本來の目的でなくてはならない。フレーベルは教育活動の本質を斯くまで辨證法的に解し得た教育史上の第一人であつた。彼は此の考を人類の勞働生活にも適用して、勞働と宗教、宗教と勞働との綜合統一を教育の課題とした。眞の綜合を求めて叫を擧げてゐるやうな現代の教育思想界に現はれた辨證法の新精神を、斯くして人はフレーベルの遺した一種豫言的な教說中に十分跡付けることが出來るであらう。

客觀精神の復興

一

數年前ディルタイ一派の生命哲學が日本の學界に紹介された頃、私達は屢々理想主義の哲學は早や逝いたとか、カント哲學は既に學界から葬られたとか、新カント主義は時代錯誤であるとかいふ樣な聲を一部の人から耳にした。併し獨逸に來て親しく學界の事情を見ては、私達が曾て日本で耳にしたさういふ口吻を正義づけないのみか、却て裏切る樣な種々な光景を目擊することも少くない。彼のナトルプの哲學なり教育學なりは、それが論理主義の立場に立つといふ理由を以て、一部の學徒から攻擊され、ほとんど影を學界から沒してでもしまつたかの樣に思はれた。併し獨逸に於ける實際は、必ずしもさうとのみは言はれない。私の在留してゐるライプチヒの大學で言つて見ても、リットの如きは自ら生命哲學の流れを汲む學派に屬しながら、ナトルプの「社會的教育學」や「哲學と教育學」や「社會的理想主義」等を演習に使つて、ナトルプの立場に對する深い理解と同情とを寄せてゐる。又ハンブルヒの大學の樣子を聞けばカツシラー・ゲーラント其他の教授がナトルプの思想を講じてゐるといふ。勿論ナトルプの思想を講ずると言つてもナトルプの立場そのものの單なる祖述ではなくて、新興の種々なる思想との關聯に於いての發展ではあるであらう。たゞこの事實は新カント哲學が無雜作に棄てられたといふ樣な見方の、正しくない事だけは說明してゐる。

私は今年の四月ライン教授の墓參をかねてイェナの大學を訪ねた。其の時イェナ大學の教育學研究室に導かれて、助手の人と學界漫談に耽つて居たところ、突然一人のまだ四十代と思はれる紳士が這入つて來た。私はそれが誰であるかも知らずに、助手との會話を續け、會々その紳士の方に向いて、ヨハンゼンの著作について自分のザツクバランの所感を述べ、特に「教育のロゴス」といふヨハンゼンの著作の批評を露骨にしたところ、その紳士が實にヨハンゼン其の人であつて、「私がそのヨハンゼンである」と名乘られ、大に面喰つたことがある。このヨハンゼン等は新カント學徒の立場に立つて、教育學の體系といふものを、今正に發展しようとして居る新進の學徒である。試みにヨハンゼンの「教育のロゴス」や「文化概念と教育科學」等の著作を見れば、如何に新カント哲學が最近の教育學に發展されつつあるかが分かるであらう。なほこのヨハンゼンが師事する、ブルーノーバウフの如きは、矢張り此のイェナの大學に居て、人の知るやうに最

も熱心なカント學徒であつて、教育學の基礎論に對しても一隻眼を具へて居ることは既に周知の事實である。ヨハンゼンの上にあげた二つの著作は何れも一千九百二十五年の出版であつて、新カント哲學に基く此の派の教育學の發展が、極く最近のことであるといふことも、私はこゝに附け加へたい。私は上にライプチッヒの大學だとかハンブルヒの大學だとか、イェナの大學だとかいふやうな二三の例を擧げたに過ぎない。けれどもこれに依つてもカントの立場は既に逝いたといふやうな、我々が數年前に日本の思想界で耳にした聲の、甚だしき無責任性は明かであらう。最近特に興味ある一事はハイデッガーといふやうな、フッサールの後繼者として現象學派を率ゐて立つ學徒が、カントを深く理解し、發展して、新興現象學の立場乃至は「哲學的人間學」の立場をカント哲學に於ても認識し若しくは發展しつつあるといふことである。彼が近業「カントと形而上學の問題」等を讀めば、思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。誰かカント逝けりと言ひ得るものぞ。

惟ふに獨逸の學界は屢々日本で考へられるやうに單純なものではないやうだ。實に種々樣々の流れが錯綜してゐる。若し發展が一面分化であるならば、獨逸の學界は驚くべき分化を營み、それに較べると日本の學界には殆ど何等の分化もなく、ごく單純な流れを流れて行く。一部の人は實驗教育學若しくは實驗心理學の如きものは今や殆ど立つ瀬がないかに說くけれど、獨逸の學界の現狀は必ずしもさう單純に言ひ去ることを許さない。獨逸國內の各大學の教育學なり心理學なりを見ても、實驗的の研究はかなり盛で、此の點寧ろ驚く外はない。斯く言つても勿論私は新興の諸學が大きな勢力を以て發展しつつある事實を否定するものではない。或は生命哲學なり、或は現象學なり、或は辨證法なり、或は哲學的人間學なり、夫れ夫れに學界に影響しつつある。たゞその間にあつて、曾て芽生えて發育した種々なる學派が、假令舊態をその儘墨守しないにせよ、依然として存續し、思想の發展におのがじし貢獻しつつある事實を人は見遁すべきではないと思ふ。一言で言へば日本の思想や文化は極めて單純で、そこには何の健全な分化發展もない。其の運動が言はば直線的であるのに、獨逸の思想や文化は決して直線的の運動ではなくて、複雜な分化發展を營みながら動いてゐる。話が少し橫道に入つた。私は本論にかへらなくてはならない。

二

さてカント哲學が種々な形で最近の獨逸思想界に働いてゐるといふだけではなくて、一般に獨逸理想主義といふものが、言はゞ「客觀精神の復興」といふ形をさへ取つて、最近著しく發展しつゝあるかに私は思ふ。併し最近における客觀精神の復興を考へる爲に、人は先づ生命哲學乃至生命

教育學が最近如何なる運命に逢着してゐるかを觀察しなくてはならない。生命哲學の業績は誰しもこれを認める雅量がなくてはならない。たゞ妄信するには及ばない。生命哲學の最も大きな缺點の一つとして、「客觀精神の薄弱」を指摘するのは果して誤りだらうか。生命哲學が教育學に與へた最も大きな影響は、人も知るやうに青年運動と勞作教育との二つにおいてである。今この二つの教育運動において生命哲學が如何なる弱點を暴露したかを觀察するは、軈て客觀精神の復興の由來を辿るよき手びきになると私は思ふ。

青年運動の特色とするところは、その精神の根本が浪漫的な主觀主義に立つといふ點である。これ青年性と一脈相通ずるものであつて、これを貢いだものが生命哲學であつた。青年運動の長所も短所も共に生命哲學の根底に横はる浪漫的な主觀主義にあるかに私は思ふ。獨逸の青年運動に對して久しく指導者の役を演じて居た、哲學者にして同時に教育學者たるシュプランガーの思想には、ディルタイの生命哲學には見出すことを難しとする理想主義的な若しくは客觀的な精神の多分に含有されて居ることは、「生の形式」を讀むものの容易く理解出來ることと思はれる。シュプランガーの思想の中にはリッケルト其の他西南學派の思想が著しく攝取されて居るかに思はれる。このこと自身新カント學派が獨逸最近の思想界に尙ほ如何に有力であるかを示すよすがではないだらうか。シュプランガーは現代に於ける生命哲學の最大の代表者であると誰でも言ふ。そのシュプランガーの思想の中に、かく新カント學派の思想の影響してゐる事實を見遁がさない者は、新カント學派は既に沒落したとは言はないであらう。シュプランガーは最近愈々客觀的な精神を强調するやうになり、曾てケルシェンシュタイナーの第七十回の生誕記念の出版の中に「時代と教育に於ける古典の意義」と題する一篇をよせて、浪漫主義に對する古典主義を力說し、獨逸理想主義者の思想の中核をなす客觀精神を取り入れなければ、青年運動の今後の健全な發展は望まれないと言つてゐる。その同じ記念出版の中にリットは「ヘーゲルと獨逸青年の課題」といふ一篇を寄せて、シュプランガーにも勝る慨を以て青年運動に客觀精神導入の必要を說き、遂に「ヘーゲルに歸れ」といふことをさへ高唱してゐる。久しく生命哲學の主觀的な浪漫主義に醉つてゐた青年運動の中に、客觀精神の復興しつゝある事態は察するに難くない。

目を轉じて同じ生命哲學に基礎づけられて發展した勞作教育を見ても、この事態は十分親はれる。蓋し生命哲學に基く勞作教育はリットの言葉を借りて言へば「教育學的表現主義」である。凡そ表現主義の病とするところは、表現の運動若しくは機能に忙殺されて、表現されるもの即ち內容若しくはその內容の妥當性を吟味する暇のないことだ。言換へれば「客觀精神の缺如」、これが

表現主義の上に立つ勞作教育の一難點と言はなくてはならない。勞作教育は舊教育を救ふ福音でなくてはならない。併し我々は生命哲學に基づく勞作教育が、單なる表現主義に陷つて、客觀內容を自省しないといふ缺點を除いて、勞作教育をしてその使命を果させなくてはならないと私は思ふ。この意味に於て客觀精神による勞作教育の新轉回は今や大いに必要であると私は思ふ。青年運動においてヘーゲルへの復歸を叫んだその同じリットが勞作教育における客觀精神の必要を痛感して、ヘーゲルの歷史哲學の根本精神の攝取を叫んで居るのは正しい。蓋しヘーゲルによれば歷史は「理念の自己運動」である。單なる自己運動ではなくて理念の自己運動であるところに、ヘーゲルの思想が屢々表現主義に陷り易い勞作教育を救ふ可能性を有つてゐる。

獨逸の新教育

一

六年前に見た目で再び獨逸の新教育が生ひ立ついそ〳〵しい姿を見るのも嬉しい。私は自分自身の後日の思出までに、着獨以來見たり聞いたりしたことを其儘こゝに書き付けておかう。

教育立國は人のよく知るやうに、獨逸民族の既に久しい傳統である。此の傳統を背景に置くのでなくては、恐らく獨逸の新教育の正しい觀察も難くはないであらうか。宗教改革に依て民族發展の精神的基礎を築いたルターは神人合一の妙境に達する唯一最後の手掛りたる人類天賦の良心を、萬民に「共通の心」と考へ、この「共通の心」を培ふ爲に國民教育の確立を叫んだ。人類文化の長い歷史の上で、教育立國を唱へた第一人は、併し、ペスタロッチーである。そのペスタロッチーの思想を眞に解して採り用ひたものは、決してペスタロッチーの生れて死んだ瑞西でもなく、まして佛蘭西や伊太利や英吉利ではなくて、實に獨逸であつたといふことは、ペスタロッチーとフィヒテとの交渉をこゝに述べ立てるまでもなく、明かなことではないか。獨逸建國史上

先づ第一に指を屈せられるフリードリヒ大王は、佛蘭西建國史上のナポレオン一世に比すべき位置にある。そのフリードリヒ大王は親しくバッハを宮廷に招いて彼れが奏でるピアノに聽き入つたことさへあるやうな大王である。この大王の力に依て教育立國の精神が如何なる進展を見たかは、西洋教育史上の一大出來事である。教育立國を說かうとして瑞西の山奥から遙々巴里まで出かけて行つたペスタロッチーに「余はさるイロハを聽く耳は有たぬ。」と言つて、すげなく一代の大教育家を門前に拂ひのけたナポレオンと較べたら、フリードリヒ大王の心の置きどころは全く違つてゐる。ルターやフィヒテやフリードリヒ大王だけではない。獨逸の大學の歷史を見ても分るやうに、封建時代各地に割據した多くの王侯は、土や石で堅めた城砦を築くことに熱心であつたばかりではなくて、學藝に依て見えざる精神の城砦を築くことを忘れなかつた。これが後にも說くやうに獨逸が全土に亘つて實に二十有三の大學を所有するといふ文化の王國たることの出來た基礎である。

既に久しく教育立國を國是として來た獨逸である。戰未だ酣な頃から、早くも戰後政策の根本を國民の教育におくべしとの聲は上下に高く、兎角淺はかな實用主義に墮し易い政黨の間にさへ、獨逸においては決して產業立國ではなくて教育立國が叫ばれ、その叫が結晶して一千九百十八年八月十一日の新憲法となつたのである。獨逸の新憲法は恐らく世界の憲法史上に新たな紀元を劃して、今後幾世紀の間各國の憲法に支配的影響を與へるだらうとは、憲法學者の屢々口にするところである。憲法に素人の私は、併し、たゞこの新憲法に現はれた教育精神に就いて、少しく感ずるところを述べるであらう。

二

新憲法の第百四十二節に曰く、「藝術・學問及びその教育は自由である。國家はその保護に任じ、またその保育に參與する」と。流石は文化國家の名を辱しめない大精神と言つていゝ。凡そ學藝は自らの內的自律によるの外眞の發展は望めない。立國の大本を普遍的な客觀的な文化價値におかうとする新興の獨逸は、學藝の優越を信じその自由を認め、只管その保護と保育とに任じようとしたのである。教化の優越を認める意志は更らに第百四十四節に現はれて、「學校の監督は專任の專門的教養ある官吏によつて遂行される」と述べてゐる。教育にして若し監督を必要とするならば、また監督の必要なる時代においては、それが精神なるの故を以て、あらゆる他の政策にも增して專門的教養ある官吏によつて監督せらるべきであることは言ふまでもない。私はたゞこのことが憲法の中に特筆されてゐるといふことを指摘すれば十分である。

第百四十五節は就學の義務を示して「一般に就學の義務がある。その履行には原則として少くとも八學年を有する國民學校及びこれと聯絡する滿十八歳までの補習學校がこれに任ずる」と言つてゐる。義務教育の年限延長は我が國にては論じ盡くし、論じ飽きた問題で、たゞ國家が年限を延長するの熱と膽とを缺くの狀態にあると言つていゝであらう。今こゝに述べるまでもなく、我が國の小學教育はその教育力の主部分を片假名五十一、平假名五十、漢字一千三百六十を教へるために殺がれて、教育の內容に深入りすることの到底不能の事情におかれてあるのに、此の地の小學校では僅かに二十六文字を教へれば、教育は直ぐ樣內容の世界に突き入ることの出來るといふことである。故に義務教育の六年と八年との差はこれを教育の內容から見れば決して六と八との差ではなくて、そこには驚くべき溝渠が横はつてゐると言つていゝ。勿論獨逸の憲法は教育の大綱を示したもので、その細部に至つては各州まち〳〵である。即ち八年の教育を施すところもあれば、七年のところもあり、九年制を採用するところもあれば、ザクセン州の一部のやうに十年制の國民學校を設立してゐるところもある。

八年制の國民學校に聯絡する滿十八年までの補習教育はまだ完全に實現してゐるとは言ふことが出來ないが、新憲法の示すところを如何にして實現すべきかを研究し且つ規定した一千九百二十年六月の有名な全國學校會議は、「一將來の義務的補習教育は各州とも三年間とし、二授業時間は少くとも每週八時間、一年間四十週とし、三授業は日曜にあらざる週日の晝間とし、夜間はこれを禁じ、四生徒にして既に雇傭される場合には、傭主は通學に必要の時間を提供する」ことなどを議決して、着々憲法の精神を實現することに努めてゐる。

同じ第百四十五節には「國民學校及び補習學校に於ける授業及び學用品は無料である」と言つてゐる。これは義務教育の本質と社會狀態との兩面から見て、當然のことであり、獨り獨逸だけではなく、今は歐米を通じて實施されてゐる。聞けば日本でも政友會の贊成を得て、一新會の樋口秀雄氏から國定教科書官給に關する法律案が衆議院に提出されたといふ。たゞその費用年六百萬圓の僅少にも拘はらず、「經費莫大」の故を以て實現不可能とされたといふ。全國の小學兒童が無料で六ケ年の義務教育を受けるか、有料で六ケ年の義務教育を受けるかを分つ六百萬圓を、僅少と見るか莫大と見るかは、國民教育そのものに對する觀念の相違に依ると言ふの外はない。同じ精神は中等高等の教育にも及んで第百六十四節になる。「學資乏しきものゝ中等及び高等の學校への進學の爲に、國州及び市町村は公の資財を、また中等及び高等の學校において教育するに適すと認めた兒童の親に對しては、特にその教育を終るまで補助金を備へるべきである。」文化の進歩

と共に小學教育の一般化が中等教育の一般化となり「凡てのものゝ爲の中等教育」といふ標語が既に歐米の全土に響き渡つた今日、無料教育の原理が小學教育より中等教育へと推し進められたことは驚くにも足りない。けれどもその同じ原理が高等教育にも及んで、それが憲法に明示されるに至つては驚く外はない。而かも事柄が教育を受ける者の無料といふに留まらなくて、親の生活費を補助するに至つて、國法が教育を重んずる大精神を讃美せずにはゐられない。私は憲法に斯く定むるところが決して單なる空文でなくて、プロシヤにせよ、ザクセンにせよ、各地に於て着々實現されつゝあるといふことを玆に記したい。のみならず私はライプチヒの教育を見て、全市六萬の小學兒童中その三分の一即ち實に二萬の兒童が毎日校給の麵麭とスープとに舌鼓を打つてゐるのを目擊して、教育立國の精神をまざ〳〵と見る思をした。勿論校給食事は歐米にては既に幾十年の長い歴史を有し、我國にても屢々實施の場合を見るのであるが、我國の場合は言はゞ標本が雛形であつて、獨逸に見る如く徹底的のものではない。

三

教育は結局人の問題であるとは誰しも口にするところ。その人の問題を事實甚しく閑却すること、我等が祖國の如きは、恐らく現代の世界に稀であらう。この點において日本と好個の對照をなすものは今日の獨逸である。私は少しく獨逸の教師養成法を叙して、此一篇の主眼でもある現代の獨逸における教育立國の精神を明かにして見たい。

一千九百十八年の新憲法の精神に基いて、獨逸が從來の師範學校を廢止したのは既に人のよく知るところである。私はたゞこゝに小學教育の任に當る教師を養ふのに不完全のゆゑを以て廢止されるに至つた獨逸の師範學校が、實に八ヶ年制の國民學校卒業生を入學させて六ヶ年の特別教育を施してゐたといふ、我が國今日の師範學校に比して、著しく優れてゐたといふことを記したい。斯かる事情に基いて、舊師範學校は一千九百二十八年三月その最後の學年生の卒業を以て、全く獨逸の教育界から影を沒してしまつた。新制度によれば苟くも獨逸小學教育の任に當るものは、凡て大學教育を受けたものでなくてはならない。遠く祖國を顧ると一時は革命でも起るかと思はれるやうな騷ぎをして、辛うじて定員三百名といふ形ばかりの二個の小さな文理科大學といふものを創つたが、それは比較的優良な中等教師養成の機關であつて、決して小學教師の養成機關ではないのである。獨逸の新制度によると、九年制の高等中學校を卒へたものに二年若くは三年の大學教育を施してゐる。州に依つて多少の相違のあるのは、獨り教師の養成法に限つたことではない。今例をザクセンに取れば、九年制の高等中學校を卒業して、萊府の綜合大學に入つて

少くとも三ケ年所定の講義を聽き演習實習をしなくてはならない。大學で學修するだけではなくて、同時に一千九百二十四年に創設した大學附屬の「教育研究所 Pädagogioche Institut」に行つて、小學教育に必要な學科の教授を受け、また小學教育の實習をしなくてはならない。實習は「教育研究所」に附屬する國民學校でやる外、更らに夏季休業中何れかの國民學校でやることになつてゐる。獨逸では國民學校の夏季休業の終る頃、大學の夏季休業が始まるのである。三ケ年間大學で講義を聽き、研究所でも講義を聽き、更らに附屬學校と市内の國民學校とで實習をしても、教師の資格は與へられない。資格を得るにはその上に在學中檢定試驗を受けなくてはならない。檢定試驗に應ずるには受驗資格が要る。その受驗資格としては少くとも三ケ年間獨逸の大學の學生であり、少くも最後の一ケ年間ザクセン州の大學の學生たること、しかも所定の學科を聽講し、所定の實習に參加し、十分習得することが出來たといふ證明を擔任の教授から得てゐることが必要である。不幸にして最初の檢定試驗に失敗したものは再試驗に應ずることが出來るが、再試驗は長くも二年以内に受けなくてはならない。再試驗を受けて資格を得たものには別種の免許狀が授與される。また再試驗に失敗した者は特別の許可なき以上、最早や受驗資格が一生涯得られない。斯かる嚴格な檢定試驗に合格しても未だ正教員としての資格はない。即ち以上の經路を辿つて檢定試驗に合格せるものは、大體に於て年齢が滿二十歳乃至二十三歳であるから、當分は囑托教員として採用され、滿二十七歳にして始めて正教員たることが出來るのである。プロシアの教師養成制度はザクセンのそれとやゝ趣を異にし、從來の大學とは別に二年制度の「教育大學 Pädagogische Akademie」を創設し、高等中學校の卒業生を入學させる。この大學は普通の大學に比して修業年限が一ケ年短いといふ理由から大學を卒業しても教員たるの資格は與へない。即ち大學卒業後教員試補として少くとも二ケ年間教育の實際に携はり、然る後始めて教員檢定試驗を受け、合格して正教員の資格を得る。二回檢定試驗に應じてなほその目的を達せざるもの、及び五ケ年を經過してなほ合格せざるものは、共に教員試補としての職を被免される。長袖よく舞ひ多錢よく商ふと言ふが、獨逸の小學教師の學力と經驗とは實に豐富である。また獨逸小學教育の强味は亞米利加などに比して女教員の少いといふことである。今獨逸全國の統計的材料をこゝに示すわけには行かないが、私の調べたところによると萊府の如き大都市——我が京都の人口より六萬多い——を觀るに、何れの小學校にも僅かに二三名に過ぎない。比較的機械的の事務の多い諸種の官衙や圖書館や銀行や會社や商店に働く職業婦人は現代の獨逸にも決して少くない。併し教育は機械的の事務ではない。學校教員としての女子に就いては我々はなほ多く研究する必

要があるではなからうか。曾て我が帝國教育會は女教員問題を調査し、その結論として男教員に對する女教員の數を相當高度に認めてゐたかに記憶する。我々は、併し、女教員問題に就いては亞米利加よりも獨逸に學ぶべきではなからうか。尤も亞米利加の女子は人も知るやうに、その素質において、その學力において、またその手腕において、男子に比して必ずしも劣るものとは言ふを得ない。我々は日本の女教員問題を論ずるに當つて、日本の女子の概念に立脚することを忘れてはならない。さうして良き旦那の見つかるまで、暫らく嫁入仕度を稼ぐ積りの女教師が若し日本の教育界に蔓るとすれば、これ正しく國民教育の凌辱であり、國民文化の脅威である。女子なるの故を以て秋波を送るには、國民教育の問題は餘りに神聖であり、餘りに重要性に富んでゐる。獨逸の學校を觀て何時も私の感ずる一事項は一般に教師の力の溢れてゐるといふことである。その由來するところ、全く教育に於ける人の問題を重視する點にある。

リップス教授曰く「教師の職業の尊さに較べたら、如何に高き程度の教育も決して高きに失するといふことはない。一國民の精神的文化の高さは、その國民が教師の職業を評價する高さに依て定まる」と。善い哉言や。けれどもこれは獨り戰後の獨逸に限られたことではない。亞米利加の師範學校がすべて大學に昇格したことは、初度の外遊から歸つた當時私の報告した通りである。スコットランドの小學校は一千九百二十四年十二月から、男子と女子とを問はず「學士Bachelor」の資格なきものは一切小學校教師に採用せぬことを決議した。歐羅巴と亞米利加とを通じて、教師養成制度は、今や全く新たな紀元に入つた。我等は全國僅かに二個の中等教員の養成を目的とする文理科大學の出現に意を安んぜず、世界と共に大學卒業生若しくはこれに劣らぬ力倆ある教師を以て全小學校を充たす日の一日も早く訪れ來るやうに努めなくてはならない。

四

教育立國の精神は、獨逸における大學發達の歴史にもよく現はれてゐる。歐羅巴の最初の大學は人も知るやうに、伊太利のボロニア大學と佛蘭西の巴里大學とで、此等初期の大學は何れも國家的と言はんよりは世界的の性質を帶びてゐた。巴里大學を眞似て獨逸が最初に作つた大學はプラーグ大學（一三四九年創立）とウィーン大學（一三六五年創立）とであり、其後ハイデルベルヒ（一三八六年創立）ライプチヒ（一四〇九年創立）等に大學を作つたのであるが、獨逸に斯く次第に多くの大學の設立を見るに至つた理由は、全く各州の王侯が自己の領内に學藝を興し、人材を養ふことを目的としたところにある。文化國家の概念は勿論カントやフィテやヘーゲルなど後世學徒の論ずるところであるが、その實體はそれゆゑ獨逸においては十四世紀以來諸州の王侯が奉

じてゐた重要な經倫であつたと言ふことが出來よう。凡そ一國文化の由來するところは斯く遠くして長きがその常である。獨逸の大學が各地に散在してゐるのは、全く長い歴史を通じて、各王侯が學藝の振興、人材の養成を目的として大學を設立したといふ事情に基づいてゐる。今はそれが獨逸文化の俤を傳へる所謂「大學町 Universitätsstadt」といふものになつてゐる。ハイデルベルヒにせよ、イェナにせよ、ゲッティンゲンにせよ、マールブルヒにせよ、皆な「大學町」と呼ばれてゐるではないか。主都伯林の大學が一千八百九年即ち十九世紀に入つて始めて出來た新らしい大學であると言つたら、意外に感ずる人も少くはあるまい。獨逸文化の特色は文化が斯く夙に地方にその根を深くおろしてゐるといふところにある。獨逸の文化は佛蘭西や日本のやうに、決して病的に中央に集中しては居ないのである。獨逸の大學の數は戰前において實に二十二の多數に及んでゐたが、國民はそれに滿足せず、且つ曾てナポレオンに挫がれた國力回復の爲にプロシアが伯林大學を創立したと同じ動機から昇格若くは創立の形で、ハンブルヒ・ケルン及びフランクフルトアンマインに三つの大きな大學を建てた。我々は獨逸國民の眼光が決して目先きのことに捕はれず、常に斯く遠い彼岸を見透す力のあるといふことを忘れてはならない。明日食ふ麵麭を互にわづらふやうな大戰直後にあつて、三つの大きな大學を設立するといふやうな覇氣が今日の日本人にもあるだらうか。斯くして獨逸は一時二十五の大學を所有してゐたが、平和會議の結果ストラスブルグの大學とブラーグ大學とを失ふことになつて、今は二十三の大學を有つてゐる。二十三の大學を有つのであるから、一州一大學の割である。獨逸の人口は凡そ六千五百萬、日本より少きこと一千五百萬である。而かもこの二十三の大學は綜合大學であつて、別に六十三の單科大學を有つてゐる。いま一千九百二十六年より七年にかけての統計によれば、綜合大學に籍を置くもの六萬四千四百四十、單科大學に籍を置くもの三萬六千百五十四、計十萬五百九十四になる。文化國家としての獨逸の國本の如何に强固なるかは察するに難くない。筆の序に私は此地の大學の様子も少し記して見よう。

五

綜合と單科の別なく、獨逸の大學には九年制の高等中學校の卒業生が入つて來る。獨逸の大學には日本のやうに定員の規定もなければ、入學試驗といふものもない。九年制の高等中學校を終つたものは何れの大學へでも無試驗で入學出來る。一年が二つの學期になつてゐて、その學期が單位であるから、學生は一學期毎に別の大學へ行つて學ぶ自由がある。各學期の講義・演習の擔任者・題目・時間表は前學期のうちに印刷されて、書店で賣つてゐるから、學生はそれに依て次の

學期の案を自分で決める。一度ある大學に入つても次の學期に在學の手續をせぬと最早やその大學の學生ではない。勿論在學年限といふものもなく、從つて何時卒業といふこともない。幾科目の講義を聽かねばならぬといふやうな規定は更らにない。從つて我國に見るやうな無益にして有害な學期學年の試驗といふものも全くない。たゞ一つの例外として、醫學・化學・工學の學生には途中一回の試驗がある。これに合格した者に實習をさせるといふ關係から來てゐるのである。勿論種々な國家的の資格を得るとか若くは學位を取らうとかする者には一定の試驗があつて、その試驗規則のうちには、大學における最少限度の在學期間が示してあつて、神學・法學・哲學・などの文科的學科にては六學期三ケ年、醫學は五ケ年、其の他は三ケ年乃至五ケ年としてある。併しこれは國家試驗の規定であつて、大學教育そのものとは本來何の關係もないのである。要するに研究の自由が獨逸の大學の一大特色で、學生は笈を負うて就いて學ぶに足る教授のゐる大學に趣き、且つ自己の欲する講義を聽くのである。故に獨逸の大學は國家の教育的設備を利用して、教授と學生とが學問的に接觸するところである。教授の名前と講義の題目を見たゞけでは勿論決しかねる場合も少くない。そこで毎學期一二週間は試みに聽講して講義が良ければ引き續き聽講する手續をすることになつてゐる。從て名教授の下には各州から學生が雲集して押すな押すなの盛況で、例へば萊府の大學で言ふならばリットとかドリーシュとかの講堂は座席爭で怪我人を出すやうな騒ぎである。その反對に特色なき教授の講堂は極めて寂寞で時には聽講生が一人もなくなつて、講義が自然消滅になることもある。現に先學期にこの萊府の大學でも或る宗教學の教授の講義が自然消滅になつたといふ話を私は耳にした。學生の多く集まるのは教授の偉大を示すだけではなく、大學の誇でもあるので、各大學は實力ある名教授を招聘するのに極めて熱心である。一般市民もそれに關心し、新聞を見てゐると、フランクフルトではカッシラーをハンブルヒから取らうとしたが、カッシラーが應じなかつたとか、フッサールの後にはハィデガーが招かれたとかいふ類の人事的記事が可なり詳細に報道されるといふのも獨逸國風の一端である。

大學の教育方法は講義・演習又は實習、及び研究指導の三種である。講義は各專門に入る言はゞ手ほどきで日本の講義のやうに難解のものは殆どない。演習は大學教育の中核で、學生の實力を養ふものは實にこの演習である。ある題目を中心にして時には書物を用ゐて、教授も學生も討議的態度を以て研究する。先學期のリットの演習を例に取つて少しくその實況を説明して見よう。リットは「ナトルプの教育學」を演習の題に選んで、毎週金曜日の午後七時から九時までをその時間にあてた。最初二回はリットがナトルプの教育學に就いて自己の見るところを概論し、且つ

研究上の着眼點や注意事項を述べ、第三回目からはナトルプの「社會的教育學」を參考書として
その中の中心思想に就て質疑應答の形で研究を續け、學期の中ば過ぎになつてから、一哲學と教
育學、二社會的理想主義、三個人と社會、を表題として夫れ〴〵三人の學生がナトルプ研究を
發表し、互に質疑應答した。教授の實力と手腕とは此の演習において遺憾なく發揮される。學
生は命がけで勉强して來て、或は教授に質疑に爭つて答へ、或は教授に喰つてかゝり、或ひは學
生相互に論難攻擊する。五十人の男學生の間に交じつてゐた十四名の女學生も男まさりに活動し
た。學生の實力は主として此の演習において養はれると言つていゝ。私は演習に出る度毎に、獨
逸の大學の演習室は、まるで角力取りの稽古部屋か禪寺の禪堂そのまゝであるなどゝ時々思つた。
リットの新學期の演習題目は「現代の哲學的倫理學」である。此の間會つて聞けば、シェーラーの「倫
理學における形式主義と實質的價値倫理學」並びにニコライ、ハルトマンの「倫理學」を中心にす
るといふ。現象學に一進展を與へたシェーラーの文化哲學としての倫理學が如何なるものか、また
批判的形而上學徒としてのハルトマンの倫理學が如何に時代の新精神に應ずるか、其等の新思潮
に對して、現象學に辨證法的基礎を與へつゝあるリット自らが如何なる批評を加へるであらうか。
新鮮な學問的の空氣に浸らうとする多くの學生達は今や遲しとその演習を待ち詫びてゐる。（一
千九百二十九年四月十二日　萊府レッシング町の假寓にて）

學校教育を觀て

一

獨逸の學校教育は近世以來何時も世界に範を垂れてゐる。「親が其の子を教育するは、ローマやイェルサレムに順禮するより遙かに神意に適ふ。」と言つたのは、確かあのルターであつた。獨逸の國運に一時期を劃したフリードリヒ大王なども、その大王の名から誰もが聯想し勝ちの單に武弁の一政治家ではなくて、シャンスッシーの王宮にバッハを招いて寵遇したり、シャトーブリアンを假寓させて難をいたはつてやつたりするほど、あはれを解することの出來た名君であるが、その獨逸學校教育の發達に盡くした功績は教育史家の特筆する如くである。やゝ降つて哲學者フィヒテが「獨逸國民に告ぐ」の講演が國民教育に依る祖國再生の雄叫びであつたことは人のよく知るところである。併しこれは獨逸民族の單なる歴史物語ではなくて、ナトルプの如き現代の獨逸人にもその例を見出すことの出來る、言はゞ此の民族の傳統である。ナトルプが晩年の著作「社會的理想主義」はペスタロッチーの「リーンハルトとゲルトルート」並にフィヒテの「獨逸國民に告ぐ」

と共に、私が何時も世界史上における教育立國策の三部曲に數へるほど特色深きもので、彼が此の著作を公けにせざるを得なかつたわけは、自ら此著作の中に述べてゐるやうに、現代の頽廢に直面して默止するに忍びず、起つて理想主義教育に依る祖國の、乃至は世界一般の更生を企圖するところにある。國家が資本を教育におろすことは、凡そ資本をおろすことのうちで、最も利廻りよき場合であるなどとも彼は說くではないか。さうして此の種の教育立國策が現代の獨逸において決して架空の論でないことは、國步艱難な大戰中から大戰直後にかけてさへ、フランクフルトやハンブルヒやケルンに新に大學を營んだ事實からも人は容易く推すことが出來よう。一國教育制度の魂と言つていゝ教師養成機關にして見ても、舊い師範學校は全廢され、苟くも小學教師を志すものはすべて大學の課程を履修する外に、兼て「教育研究所 Pädagogische Institut」で專門的の教養を積むことになつた。かういふ國土に身を置いて、遠く祖國を顧みるとき、私は感慨胸に迫まるを禁じ得ない。財界の不況は獨り日本に限つたことではなく、種々なる統計を綜合すると、日本の不況は歐米のそれに比して、特に獨逸のそれに比して、著しく低度である。それにも拘はらず、廢校に學級減に俸給値下げに、上へ下への騷ぎだとか。曾て某政黨人が選擧民の意を迎へて、產業立國を說けば、眞理の道にいそしむ學徒さへこれに和し、國民基礎教育の根幹とし

て人文教育に徹すべき小學・中學にさへ徒弟學校の出店を開く勢である。遠き慮りなき近視短見は我が民族の持前であると聞くはまことか。

二

「教育の秘訣は平易のことを少し教へるにあり。」とは私の持論の一節であるが、獨逸の學校を見るにつけて、私はこの平凡な私の持論が裏書きされてゐるかに思はれて嬉しい。教科の種類に依て、除外例のあるは勿論だが、總じて獨逸の學校教育は我が國のそれに比して、教材が平易であつて、分量が少ない。所謂實力涵養の秘訣は難解なことを多量に詰め込むにありといふ堅い信仰に生きてゐる日本の教育者には恐らく想像することさへ難いであらう。最近獨逸各大學の化學教授の會合は、教育社會に對するくさ〴〵の注意事項の一つとして、「大學の門を潜るまでは、專門的の學術は教へずに置け、」といふを掲げてゐる。大學の門を潜るまでと言へば、我が國なら小學・中學及び高等學校を含んでゐる。高等學校においてさへ、專門的の教育は施さず、偏に日常卑近の出來事に取材するといふのであるから、日本の學校教育とは天地の差である。平易のことを僅か教へればこそ、教材は一々內面化され、人格化され、血となり肉となつて、そこに力の感情と意志とが湧發し、眞の創造的叡智が構成する。ペスタロッチーは曾て「ゲルトルートは如何にして其の子を教ふるか」の中に教育の秘訣三則を擧げて、單純性・完結性及び連續性を示してゐる。獨逸の學校教育が正しくそれだ。認識のいろはの完結されるところ、兒童の精神は內部から連續的に自發自展する。併し、日本の學校教育はこれとは全く逆に行く。一課よりは二課、二課よりは三課と、可なりに急勾配の六づかしさを以て配列された階梯を、兒童は危ぶなげに進まなくてはならない。疲れを休める閑もなく、宿題は急雨の如く浴びされる。日本の教育は被教育者を斷えず債務者の位置に置く債權教育にも外ならない。一課二課と學習の歩みを續ける毎に幼き者の能力は不當の賦課に債務を生じ、寛ろいで天地自然に心ゆくまで身を浸たすべき夏休は、嵩まる債務の利拂に忙殺される。その利拂さへも出來ずして、果ては心身の破綻を來す實例が日本の教育社會に稀れであるとは誰が言ひ得るであらうぞ。獨逸の社會における學理と生活との融合渾化が學校教育の單純完結に原因し、日本の社會における學理と生活との分裂割據が債權教育に原因すると言ふはやゝ短兵急の論かも知れない。けれども實力の涵養、役立つ人間の陶冶が、教材の內面化と人格化とにあるといふは恐らく誤ではあるまい。さうしてその內面化と人格化との爲に、本質的なものを平易に且又少しく教へる工夫が必要である。斯く考へて我が國の教育における分量主義と難解主義との偶像は一日も早く破壞しなくてはならない。其の偶像破壞の爲の言はゞ他山の石

として、私は獨逸の學校教育を少しく詳細に觀察することを奬めたい。

三

學理を消化してこれを實際に移す才能に秀でた獨逸民族の學校を見れば、誰でも先づ教育の思潮がよく教育の實際に滲透してゐるのに氣付くであらう。例を勞作教育に取つて見ても、戰後の教育は到らぬ隈なく勞作化されてゐる。生命教育學の思潮が興れば、體驗・個性・全體性・自由・創造などの原理が各科教授の實際に影響する。勞作學校・體驗學校・生活學校・全體教授・鄕土科・文化科なども此の國においては決して單なる概念の遊戯ではない。勞作教育の聲は我が日本でも今や相當高いといふ。けれども此の聲も恐らく日本においては他の凡ての場合においてさうであるやうに、單なる聲に終つて、大風一過の觀を呈するであらう。私達の祖先の實踐的の民族であつたのに對しても、恥づべき今日の有樣ではないか。實踐能力の缺乏は確かに我が教育界の深刻な症狀である。教員相手の講演會の壇上などで私は時々自分の愚かさを心のうちで嘲笑ふこともある。愚かさとは運動中樞の痳痺した人達に話しかける勞力の徒費の謂である。日本の教育界には堅實の美名に隱れて、竊かに自己の無能を修飾する者もあれば、また余は進歩主義の友ではあるが、大凡進歩は一歩々々でなくてはならないなどと言ふものもある。一歩も二歩もない。人はたゞ正しきこと善きことをなせばそれでいゝ。正しきこと善きことをなすに何の一歩一歩ぞ。義を見てせざるは勇なきなりと古人も言つてゐる。無意味の折衷や妥協は君子の恥づるところでなくてはならない。また凡そ堅實とは正しきこと善きことを爲すの謂であつて、根據なき因襲にこだはり、舊き株を守る謂ではないであらう。君子は物に凝滯せず、よく世と推し移ると言ふ。ヘーゲルがその歴史哲學において「理念の自己運動」を說き、ベルグソンが生命の創造的進化を說くのも同じ意である。日本の教育界に教育の第二維新の必要なわけはこゝにある。試みに學校數學における米突法の徹底し難きわけを考へて見るもいゝ。ジョン、ロックが白紙に譬へた兒童の頭には舊い度量衡よりは米突法の方が入り易い。その米突法の教授が兎角徹底し難いのは、教師の頭に滲み込んだ舊度量衡の因襲でなくて何であらう。教育の進歩の敵が教師そのものである場合は決して少くない。斯く考へて昔秦の始皇帝が書を燒き儒を穴にした話などは意味深長と言つていゝ。私は大戰以後の獨逸教育者が凡て正しきこと善きことを敢行する勇猛心を愛するものゝ一人である。